長崎県芦辺町文化財調査報告書 第5集

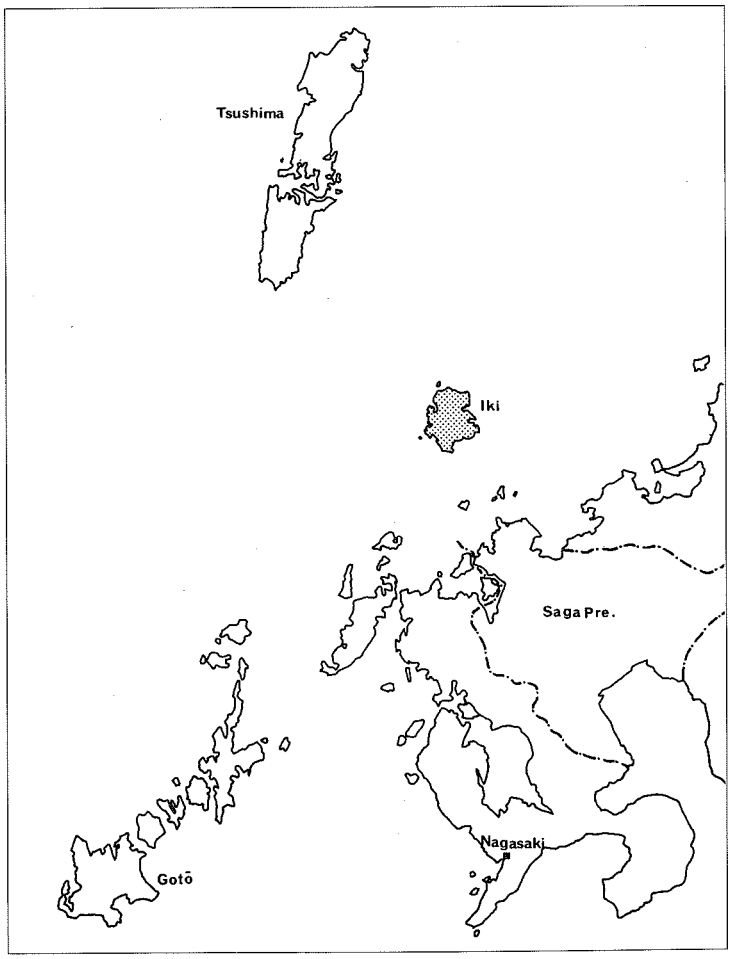
壱岐嶋分寺 I

1991

長崎県芦辺町教育委員会

題字　兵働 翠苑氏

壱岐嶋分寺跡発掘調査報告書 I



長崎県芦辺町教育委員会

序　　文

壱岐は古代より大陸との中継地として重要視され，中央からは国に準ずる取扱を受けていました。そのため，国府，国分寺，安国寺などそれぞれの時代を代表する由緒ある施設が置かれております。

なかでも「壱岐国分寺跡」は，長崎県内でここだけが位置が確認できるところとして注目されてきました。

聖武天皇の詔により全国各地に建立された国分寺ですが，壱岐の場合は既にあった壱岐直の氏寺を当てたということで，そこには古くから瓦片や礎石が見られ，壱岐国分寺跡として周知されていました。

そのため昭和49年７月２日，長崎県の文化財（史跡）として指定をうけ一部公有化しましたが，建築時代や寺域確認のため，昭和62年度より平成２年度まで４カ年間私有地を含め発掘調査を実施いたしました。

その結果，東西及び北側の寺域の確認と，基壇をもつ建物２カ所，軒丸瓦，軒平瓦，完形丸瓦他多くの瓦片，土器片，柱穴を発見することができました。

しかしながら，南限については４カ年の調査では確認できず，更に２カ年程度延長して確認を図りたい所存であります。

４カ年にわたる調査はもちろんのこと今回の中間報告書の発刊に当たり，文化庁記念物課主任調査官河原純之先生，同記念物課調査官山崎信二先生，同記念物課調査官岡村道雄先生，奈良国立文化財研究所建造物研究室長宮本長二郎先生，福岡大学人文学部教授小田富士雄先生，長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事高野晋司先生，同指導主事川道寛先生，同文化財保護主事町田利幸先生，同文化財調査員伴耕一朗先生，土地所有者の竹藤忠孝様に多大のご協力とご指導をいただきましたことに対し，深甚の敬意と謝意を表しまして発刊のことばといたします。

平成３年３月

長崎県壱岐郡芦辺町教育委員会

教育長　**野　元　茂　生**

例　　言

一　本書は，昭和62年度から平成２年度にかけて国庫の補助を受けて実施した壱岐嶋分寺の範囲確認調査の結果報告書である。

二　事業は昭和62年度から平成４年度までの継続事業であるが，本書はこの内昭和62年度から平成元年度分の成果について収録し，以降の調査分については平成４年度にまとめて報告する予定である。

三　調査は芦辺町教育委員会が主体となり，長崎県文化課が担当した。

四　本書の執筆は，土器を町田が，それ以外は高野が担当した。

五　遺物の実測については，それぞれ各担当者が行ったが，一部写真撮影について長崎県文化課浦田和彦の協力を得た。

六　本書の編集責任は高野にある。

本 文 目 次

I　序　　説

一　調査に至る経過……1

二　遺跡の地理的歴史的環境……4

II　　遺跡の調査……13

一　1次調査……13

二　2次調査……21

三　3次調査……37

III　　総　　括

一　遺　　構……61

二　土　　器……63

三　　瓦　……65

IV　　ま と め……78

挿 図 目 次

Fig. 1　表採軒平瓦(1/3) …… 2
Fig. 2　残存礎石実測図(1/20) …… 2
Fig. 3　遺跡位置図 …… 4
Fig. 4　周辺遺跡分布図 …… 5
Fig. 5　周辺地形図 …… 7
Fig. 6　試掘壙配置図 …… 12
Fig. 7　TP11(SB1)周辺出土土器(1/3) …… 14
Fig. 8　TP11(SD2)及び周辺出土土器(1/3) …… 14
Fig. 9　TP11(SB1・SD1・SD2・SD3・SD4)平面実測図(1/80) …… 15・16
Fig. 10　TP11(SD3)出土瓦実測図(1/5) …… 17
Fig. 11　TP11東瓦溜出土土器(1/3) …… 17
Fig. 12　TP11出土土器実測図(1/3) …… 18
Fig. 13　TP11出土軒丸瓦実測図(1/3) …… 19
Fig. 14　TP11出土瓦実測図(1/5) …… 20
Fig. 15　TP13出土土器(1/3) …… 21
Fig. 16　TP14(SB2)平面実測図(1/50) …… 22
Fig. 17　TP14(SB2)出土土器実測図①(1/3) …… 23
Fig. 18　TP14(SB2)出土土器実測図②(1/3) …… 23
Fig. 19　TP14西瓦溜出土土器実測図(1/3) …… 24
Fig. 20　TP14西瓦溜出土瓦実測図(1/5) …… 25
Fig. 21　TP14　2・3層出土土器実測図(1/3) …… 26
Fig. 22　TP14　2層出土銅製仏像(1/2) …… 27
Fig. 23　TP14　2層出土滑石製品(1/3) …… 27
Fig. 24　TP15(SD7・SK1・瓦溜)実測図(1/80) …… 27
Fig. 25　TP15瓦溜実測図(1/30) …… 28
Fig. 26　TP15瓦溜出土軒丸瓦実測図(1/3) …… 28
Fig. 27　TP15瓦溜出土平瓦実測図(1/5) …… 29
Fig. 28　TP15(SK1)実測図(1/30) …… 29
Fig. 29　TP15(SK1)出土土器実測図(1/3) …… 29
Fig. 30　TP16(SX1・SD5・SD6)実測図(1/60) …… 30
Fig. 31　TP16(SD5)出土土器実測図(1/3) …… 30
Fig. 32　TP24(SD6)出土土器実測図(1/3) …… 30

Fig. 33　ＴＰ16(ＳＤ５)出土瓦実測図(１/５) ……31
Fig. 34　ＴＰ16出土瓦実測図(１/５) ……31
Fig. 35　ＴＰ17，ＴＰ18平面実測図(１/80) ……32
Fig. 36　ＴＰ17　2・３層出土土器実測図(１/３)……33
Fig. 37　ＴＰ18　2・３層出土土器実測図(１/３)……34
Fig. 38　ＴＰ17　2層出土瓦実測図(１/５)……34
Fig. 39　ＴＰ17　2層出土滑石製品実測図(１/３)……35
Fig. 40　ＴＰ18　2層出土軒丸瓦実測図(１/３)……35
Fig. 41　ＴＰ18　2層出土瓦実測図(１/５)……35
Fig. 42　ＴＰ18　3層出土瓦実測図(１/３)……35
Fig. 43　ＴＰ19　2層出土土器(１/３)……36
Fig. 44　ＴＰ19　2層出土熨斗瓦実測図(１/３)……36
Fig. 45　ＴＰ14，20，21平面図及びＴＰ21北壁実測図(１/60) ……39・40
Fig. 46　ＴＰ21(ＳＢ５)出土土器実測図(１/３) ……38
Fig. 47　ＴＰ21(ＳＢ５)出土玉縁丸瓦(１/５) ……38
Fig. 48　ＴＰ21東瓦溜実測図(１/20) ……38
Fig. 49　ＴＰ20pit10出土土器(１/３)……38
Fig. 50　ＴＰ20　3層瓦溜出土土器実測図(１/３)……41
Fig. 51　ＴＰ21pit15出土土器(１/３)……41
Fig. 52　ＴＰ21　3層瓦溜出土土器実測図(１/３)……41
Fig. 53　ＴＰ21西瓦溜(上部)実測図(１/60) ……42
Fig. 54　ＴＰ21西瓦溜(下部)実測図(１/60) ……42
Fig. 55　ＴＰ21西瓦溜出土土器実測図①(１/３) ……43
Fig. 56　ＴＰ21西瓦溜出土土器実測図②(１/３) ……44
Fig. 57　ＴＰ21出土軒丸瓦・軒平瓦実測図(１/３) ……46
Fig. 58　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図①(１/５) ……47
Fig. 59　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図②(１/５) ……48
Fig. 60　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図③(１/５) ……49
Fig. 61　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図④(１/５) ……50
Fig. 62　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図⑤(１/５) ……51
Fig. 63　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図⑥(１/５) ……52
Fig. 64　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図(１/５) ……53
Fig. 65　ＴＰ21西瓦溜出土熨斗瓦実測図(１/５) ……55
Fig. 66　ＴＰ21西瓦溜出土平瓦実測図(１/５) ……55

Fig. 67　ＴＰ21西瓦溜出土遺物実測図（１／３）……55
Fig. 68　ＴＰ23出土瓦実測図（１／５）……56
Fig. 69　ＴＰ24（ＳＢ６）実測図（１/60）……56
Fig. 70　ＴＰ24(ＳＢ６)出土土器実測図（１／３）……57
Fig. 71　ＴＰ24　2層瓦溜出土土器実測図①（１／３）……57
Fig. 72　ＴＰ24　2層瓦溜出土土器実測図②（１／３）……57
Fig. 73　ＴＰ25西壁断面図（１/60）……58
Fig. 74　ＴＰ26西壁断面図（１/40）……58
Fig. 75　ＴＰ26　2層瓦溜出土土器実測図（１／３）……58
Fig. 76　遺構配置図……62
Fig. 77　平城宮出土 6284Ａ型式軒丸瓦……65
Fig. 78　行基瓦布目経緯本数……67
Fig. 79　平瓦Ⅰ類・Ⅱ類布目経緯本数……70
Fig. 80　遺構別時期変遷図……79

表　目　次

Tab. 1　周辺遺跡地名表……8
Tab. 2　周辺遺跡地名表……9
Tab. 3　周辺遺跡地名表……10
Tab. 4　周辺遺跡地名表……11
Tab. 5　出土土器観察表……59
Tab. 6　出土土器観察表……60
Tab. 7　出土瓦地区別総量……71
Tab. 8　出土瓦地区別総量……72
Tab. 9　出土瓦地区別総量……73
Tab. 10　丸瓦Ⅰ類観察表(行基瓦)①……74
Tab. 11　丸瓦Ⅰ類観察表(行基瓦)②……75
Tab. 12　丸瓦Ⅱ類観察表(玉縁丸瓦)……76
Tab. 13　平瓦Ⅰ類観察表……76
Tab. 14　平瓦Ⅱ類観察表……77
Tab. 15　平瓦Ⅲ類観察表……77

図 版 目 次

ＰＬ．1	調査風景
ＰＬ．2	ＴＰ11区
ＰＬ．3	ＴＰ11区
ＰＬ．4	ＴＰ14，ＴＰ15区
ＰＬ．5	ＴＰ16区
ＰＬ．6	ＴＰ17，ＴＰ18，ＴＰ24区
ＰＬ．7	ＴＰ14，ＴＰ20，ＴＰ21区
ＰＬ．8	土器①
ＰＬ．9	土器②
ＰＬ．10	土器③
ＰＬ．11	土器④
ＰＬ．12	土器⑤
ＰＬ．13	土器⑥
ＰＬ．14	土器⑦
ＰＬ．15	平城京出土軒丸瓦及び壱岐嶋分寺出土軒丸・軒平瓦
ＰＬ．16	瓦①
ＰＬ．17	瓦②
ＰＬ．18	瓦③
ＰＬ．19	瓦④
ＰＬ．20	瓦⑤
ＰＬ．21	瓦⑥
ＰＬ．22	瓦⑦
ＰＬ．23	瓦⑧
ＰＬ．24	瓦⑨
ＰＬ．25	瓦⑩
ＰＬ．26	側縁破面と模骨痕
ＰＬ．27	その他の遺物

Ⅰ 序　説

一　調査に至る経過

律令制度下においては，壱岐，対馬は下国とはいえそれぞれ一つの国として扱われている。従って国府が置かれ，国分寺が設置されることとなった。但し，壱岐に於いては「壱岐嶋直の氏寺を嶋分寺となす。僧五口を置く」との記録[註1]がある。豪族である壱岐直の氏寺を嶋分寺に充てたとする記録であり，新たに国分寺を建立するほどの経済基盤が無かったことを示している。

壱岐嶋分寺に関する研究としては，山口麻太郎氏の労作[註2]がある。古文献の解釈と明治初期の字図の検討，そして礎石と表採瓦の実見から，芦辺町国分本村触字中野第1348番地を中心とする区域を嶋分寺の跡に比定された。これらの実績からこの区域は昭和49年（1974年)「壱岐国分寺」の名称で長崎県史跡として指定されるにいたっている。

大正年間に採集されたという遺物に軒丸瓦と軒平瓦（Fig. 1）がある。軒丸瓦は瓦当面の文様が判別出来ないほど摩滅しているが，複弁蓮華文である。軒平瓦は2個知られており，何れも外区と脇区に珠文を持ち，均整唐草文を配している。**2** は現在県立美術博物館が所有しているが，**1** は残念ながら所在不明である。

礎石については，寛保2年（1742年）に編纂された『壱岐国続風土記[註3]』には「往古の礎六十四あり」と，当時嶋分寺の礎石が64個あったことを記しているが，文久元年（1861年）編纂の「壱岐名勝図誌[註4]」には「今現然とせしは廿余ばかりなり」と三分の一に減じ，そして現在は更に三分の一の9個にまで減じている(Fig. 2)。残存礎石は実測した限りでは，柱座の造出があるタイプのもの7個と無いタイプのもの2個があり，その径は50cmのもの3個，48cmのもの2個，43cmのもの1個，不明のもの3個となっている。「壱岐国続風土記」には，丸柱の跡方一尺七寸のものと一尺八寸の二つのタイプがあると記されている。50cmのものが上記の一尺七寸に相当するものと思われるが，一尺八寸に相当するものは見当たらない。

以上のように，先学の研究や礎石の残存，及び古代瓦の採集から壱岐嶋分寺跡の存在の事実とその所在地は大旨分かってきたが，その内容については，殆ど不明のままであった。

一方芦辺町はこの国分一帯を史跡公園として整備する将来計画をもっていたため，合わせて嶋分寺の規模等を実際に確認する必要性が生じてきた。この為，芦辺町を事業主体とし，国庫補助を受けて昭和62年度から2ヶ年計画による範囲確認調査の計画が実施される運びとなった。その後事業の進展に伴って調査計画は平成4年度まで延長継続することになっている。

註1　『延喜式』巻21　玄蕃寮
註2　山口麻太郎　「第十一　壱岐」『新修　国分寺の研究　第五巻下　西海道』所収　1977
註3　『壱岐続風土記』　寛保2年（1742）
註4　後藤正恒・古野尚盛「壱岐名勝図誌」　文久元年（1861）

調査の組織

第１次調査　昭和62年（1987）　９月１日～９月11日，９月16日～９月28日

調査総括　野元茂生　芦辺町教育委員会教育長

田口唯雄　同　社会教育主事（現佐世保市立早岐中学校）

調査員　高野晋司　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

川道　寛　同　指導主事（現県立西陵高等学校教諭）

第２次調査　昭和63年（1988）　９月29日～10月７日，10月10日～10月24日

調査総括　野元茂生　芦辺町教育委員会教育長

長嶋邦昭　同　教育次長

調査指導　河原純之　文化庁記念物課主任調査官

宮本長二郎　奈良国立文化財研究所建造物研究室長

小田富士雄　福岡大学人文学部教授

調査員　高野晋司　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

伴耕一朗　同　文化財調査員

第３次調査　平成元年（1989）　９月４日～９月14日，９月18日～９月30日

調査総括　野元茂生　芦辺町教育委員会教育長

長嶋邦昭　同　教育次長

調査指導　山崎信二　文化庁記念物課文化財調査官

小田富士雄　福岡大学人文学部教授

調査員　高野晋司　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

伴耕一朗　同　文化財調査員

第４次調査　平成２年（1990）　９月18日～９月28日

調査総括　野元茂生　芦辺町教育委員会教育長

長嶋邦昭　同　教育次長

調査指導　岡村道雄　文化庁記念物課文化財調査官

小沢　毅　奈良国立文化財研究所

小田富士雄　福岡大学人文学部教授

調査員　高野晋司　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事

町田利幸　同　文化財保護主事

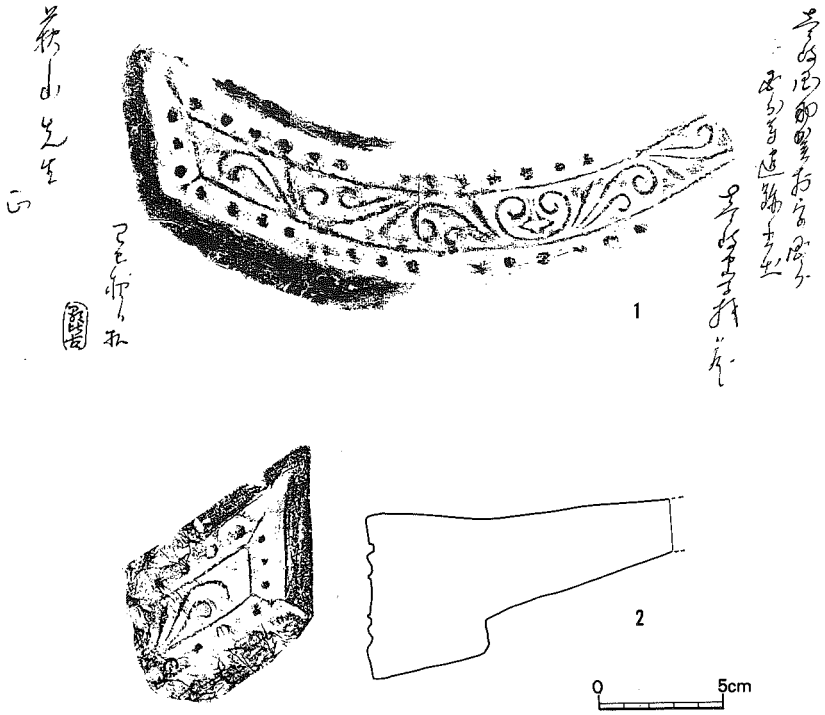


Fig. 1　表採軒平瓦

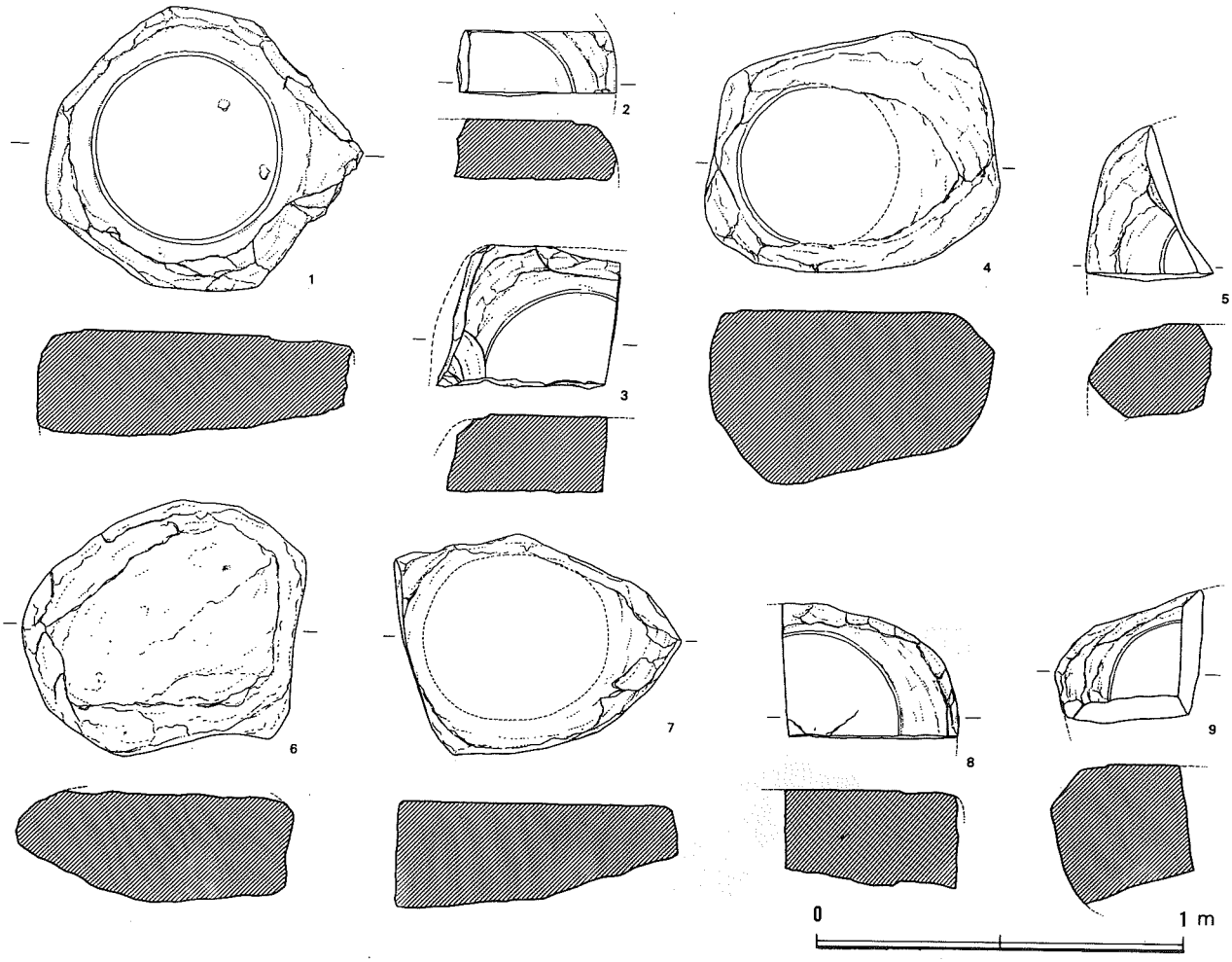


Fig. 2　残存礎石実測図（1/20）

二　遺跡の地理的歴史的環境

対馬と共に九州本土と朝鮮半島の間に飛び石状に展開する壱岐島は東西約15km，南北約17km，面積約140km²，行政的には現在４町に分かれ人口４万人を数える。弥生時代には「一支国」という，国名と場所が一致する数少ない国として『魏志倭人伝』に登場する。その中の記述「…至一大国，官亦日卑狗，副日卑奴母離，方三百里，多竹木叢林，有三千許家，差有田地，耕田猶不足食，亦南北市糴…」は当時の壱岐の状況を僅か45字で端的に説明している。名文である。但し，現在は県内に於ける有数の穀倉地帯となっている。

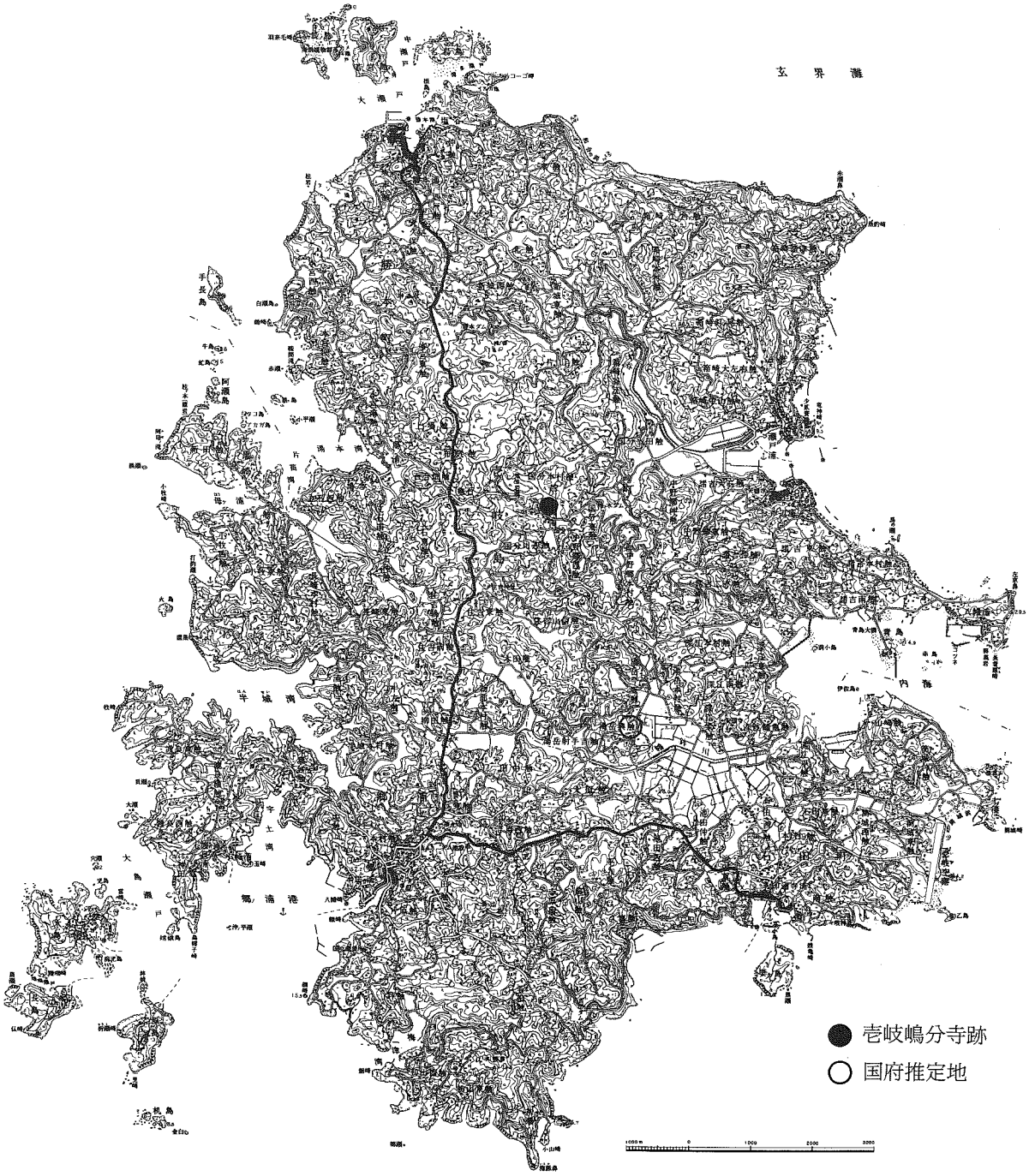


Fig. 3　遺跡位置図

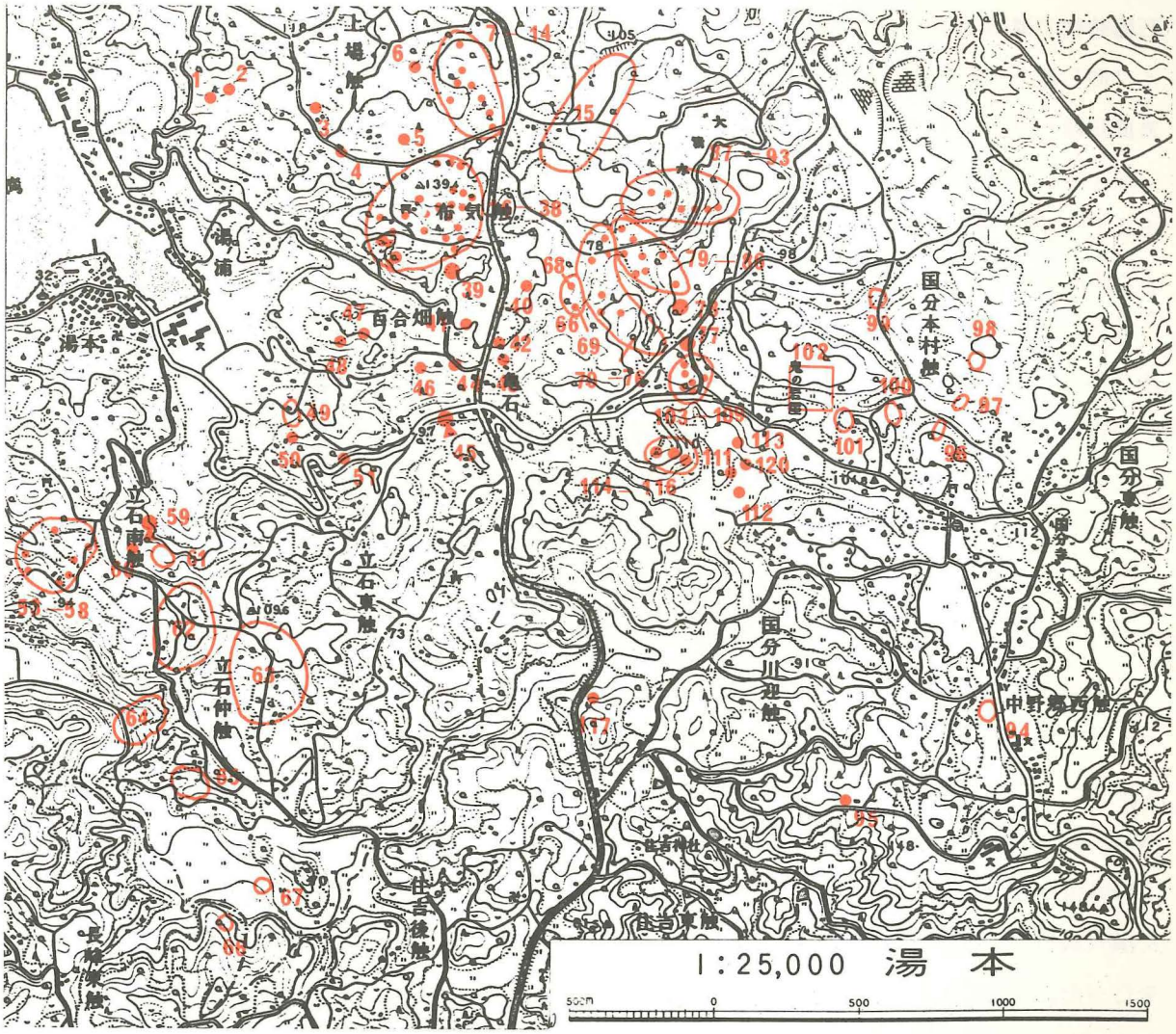


Fig. 4　周辺遺跡分布図

島は全体が低平な溶岩台地であり，起伏は少なく最高所でも僅かに213mを測るにすぎない。全島が峻剣な対馬と好対照をなしている。島の基盤は第三紀層で，玄武岩がその表面を覆う。島の要所要所には玄武岩の岩塊が見られ，弥生時代以降，箱式石棺や古墳の石室材としてよく利用されている。

壱岐嶋分寺は，この壱岐島のほぼ中央部に位置する。この地点からはどの方角にも車なら20分程で到達する。この周辺は後述する如く壱岐に於ける一大古墳密集地帯であり，古代においても同様に交通の要衝であったものと思われる。

周辺遺跡に目を転じて見よう。

Fig. 4 に示した如く，嶋分寺を含むこの一帯は壱岐に於ける古墳の最も集中する場所である。壱岐には且て338基があったという[註1]。現在確認している古墳の数は，ほぼ崩壊したものまで含めて256基である。掲載した方 4 kmの地図の中には112基の古墳が含まれている。壱岐で築造された古墳の半数がこの区域に集中していることになる。

時代を追って遺跡の説明をしておきたい。

掲載した地図内には旧石器時代の遺跡は含まれていない。壱岐においては昭和50年までは明瞭な旧

石器時代の遺跡は知られていなかったが，県教委による「原の辻遺跡」の範囲確認調査によって，ナイフ形石器や台形石器などが新たに発見された[註2]。平成２年度の壱岐嶋分寺の調査でも，１点だけナイフ形石器が出土している。寺域として利用される前にはその時期の遺跡があったのかも知れない。

縄文時代の遺跡も，この地図内には含まれない。壱岐では縄文時代遺跡もまた希薄であり，昭和52年までは遺跡台帳にもその記載は１か所のみであった。現在ではある程度知られるようになったが，まだ調査例が少なく内容把握が十分とは言えない。

壱岐の遺跡が脚光をあびるのは著名な「原の辻遺跡」[註3]や「カラカミ遺跡」[註4]などの二大弥生遺跡が調査されたことによる。昭和23年以来の東亜考古学会や九学会による数回の調査[註5]と昭和49年以降の長崎県教育委員会による範囲確認調査は，この両遺跡が壱岐の弥生時代を代表する大遺跡であることをさらに証明した。特に原の辻遺跡は，豊富な鉄器や船載鏡などを持つなど，一支国の王墓を語るのにふさわしい遺物内容を持っている。

古墳時代の遺跡は多いが，弥生時代から連続するわけではない。５世紀になって初めて高塚古墳が築かれる。その中で芦辺町大塚山古墳[註6]は，５世紀代に築かれた数少ない古墳として昭和62年県史跡として指定された。

６・７世紀代になると古墳は飛躍的に増加する。Fig. 4 に含まれる古墳の大部分はこの時期の所産であろう。また **7**～**14**の布気古墳群，**16**～**38**の百合畑古墳群，**70**～**75**山ノ神古墳群，**79**～**86**百田頭古墳群，**87**～**93**釜蓋古墳群など群集墳が顕著となる。

39の笹塚古墳からは金銅製金具を含む豊富な馬具や須恵器が見つかっている。すでに開口してあった横穴式石室からの出土であった[註7]。**77**の鬼の窟古墳は羨道部天井石の修復に伴って墳丘と石室の実測を行った。それによると，直径45m，高さ14m，石室は３室で全長16.5mの県内最大規模の大円墳であることが確認された[註8]。この周辺には**45**全長約90m，二段構築を持つ双六古墳が知られる。前方後円墳としては県下最大である。このように，県下で最大規模の古墳は殆どこの区域に集中している。

本書で報告する壱岐嶋分寺は，これらの古墳群から東へ僅か500mの地点に位置する。現況は標高は100m前後のほぼ平坦地であるが，北側の山林を多少削平した痕跡があり，この結果，当該地には北側山林を背に東西60m，南北70m程の平坦地が生じている。寺域を確保するための工事を行ったものと思われる。当該地はもともと緩やかな勾配を持つ山林であるが，湧水には恵まれており，２か所に豊富な水量を持つ井戸が掘られている。この地の東側には**101**壱岐居館跡が隣接する。60m四方の敷地の回りには深い空堀を巡らす。壱岐直の居館跡に推定されている。現在の国片主神社である。

註１　「壱岐国続風土記」　寛保２年（1742）
註２　長崎県教育委員会　「原の辻遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第26集　1976
註３　長崎県教育委員会　「原の辻遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第31集　1977
註４　勝本町教育委員会　「カラカミ遺跡」　勝本町文化財調査報告書　第３集　1985
註５　水野精一・岡崎敬　「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』所収　1959

註6　壱岐郡文化財調査委員会　「大塚山古墳」　1983
　　芦辺町教育委員会　「大塚山古墳」　長崎県芦辺町文化財調査報告書　第2集　1987
　　芦辺町教育委員会　「大塚山古墳―環境整備事業報告書―」　1989　など
註7　長崎県では，平成元年度から県内の12の重要古墳について，墳丘測量や石室の実測を行っている。笹塚古墳は平成元年度に実施した。出土遺物の内金属器については現在保存処理中。
註8　芦辺町教育委員会　「鬼の窟古墳」　長崎県芦辺町文化財調査報告書　第4集　1990

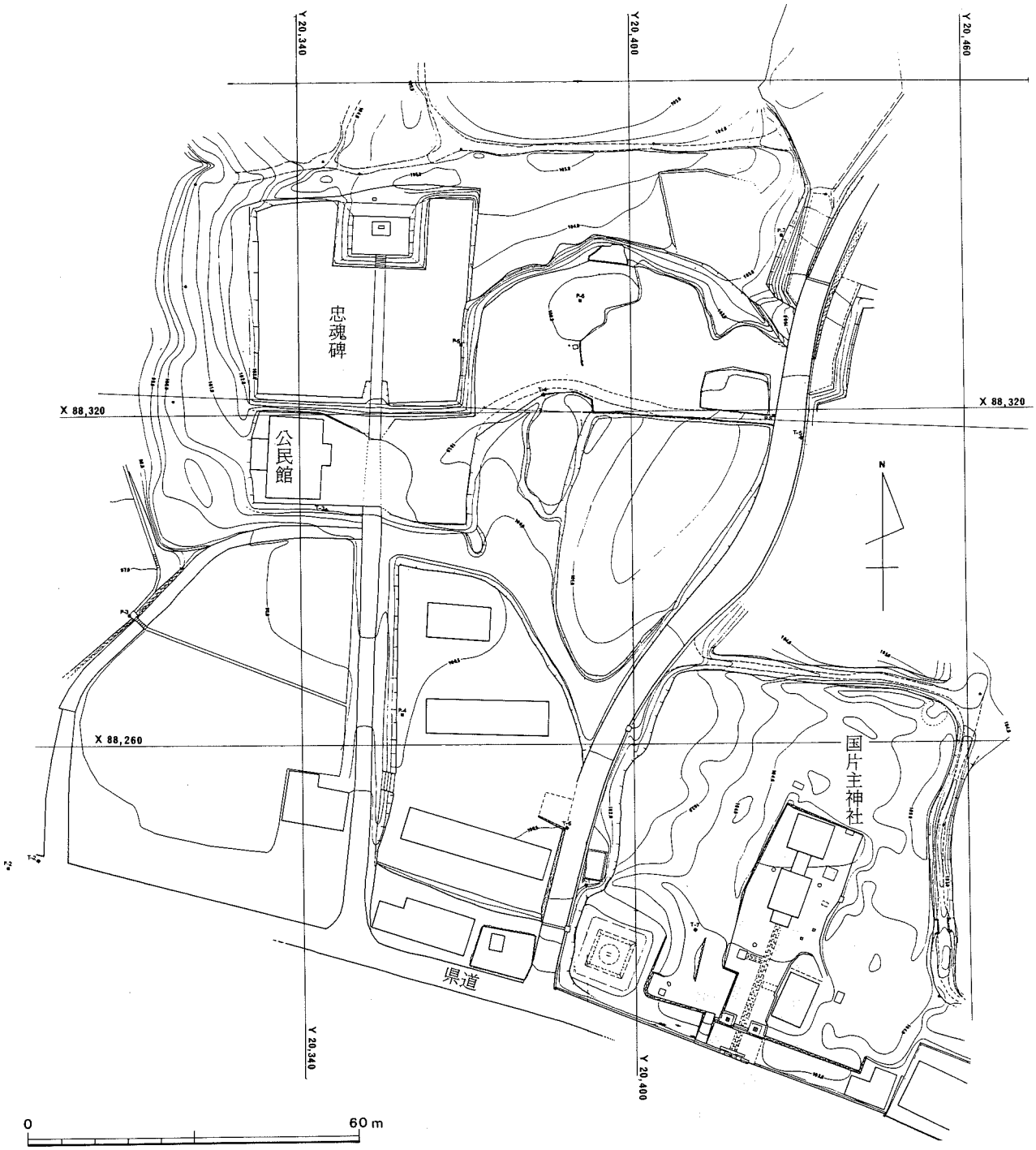


Fig. 5　周辺地形図（座標系Ⅰ）

石器時代の遺跡は知られていなかったが，県教委による「原の辻遺跡」の範囲確認調査によって，ナイフ形石器や台形石器などが新たに発見された[註2]。平成２年度の壱岐嶋分寺の調査でも，１点だけナイフ形石器が出土している。寺域として利用される前にはその時期の遺跡があったのかも知れない。

縄文時代の遺跡も，この地図内には含まれない。壱岐では縄文時代遺跡もまた希薄であり，昭和52年までは遺跡台帳にもその記載は１か所のみであった。現在ではある程度知られるようになったが，まだ調査例が少なく内容把握が十分とは言えない。

壱岐の遺跡が脚光をあびるのは著名な「原の辻遺跡」[註3]や「カラカミ遺跡」[註4]などの二大弥生遺跡が調査されたことによる。昭和23年以来の東亜考古学会や九学会による数回の調査[註5]と昭和49年以降の長崎県教育委員会による範囲確認調査は，この両遺跡が壱岐の弥生時代を代表する大遺跡であることをさらに証明した。特に原の辻遺跡は，豊富な鉄器や船載鏡などを持つなど，一支国の王墓を語るのにふさわしい遺物内容を持っている。

古墳時代の遺跡は多いが，弥生時代から連続するわけではない。５世紀になって初めて高塚古墳が築かれる。その中で芦辺町大塚山古墳[註6]は，５世紀代に築かれた数少ない古墳として昭和62年県史跡として指定された。

６・７世紀代になると古墳は飛躍的に増加する。Fig. 4に含まれる古墳の大部分はこの時期の所産であろう。また**7**～**14**の布気古墳群，**16**～**38**の百合畑古墳群，**70**～**75**山ノ神古墳群，**79**～**86**百田頭古墳群，**87**～**93**釜蓋古墳群など群集墳が顕著となる。

39の笹塚古墳からは金銅製金具を含む豊富な馬具や須恵器が見つかっている。すでに開口してあった横穴式石室からの出土であった[註7]。**77**の鬼の窟古墳は羨道部天井石の修復に伴って墳丘と石室の実測を行った。それによると，直径45m，高さ14m，石室は３室で全長16.5mの県内最大規模の大円墳であることが確認された[註8]。この周辺には**45**全長約90m，二段構築を持つ双六古墳が知られる。前方後円墳としては県下最大である。このように，県下で最大規模の古墳は殆どこの区域に集中している。

本書で報告する壱岐嶋分寺は，これらの古墳群から東へ僅か500mの地点に位置する。現況は標高は100m前後のほぼ平坦地であるが，北側の山林を多少削平した痕跡があり，この結果，当該地には北側山林を背に東西60m，南北70m程の平坦地が生じている。寺域を確保するための工事を行ったものと思われる。当該地はもともと緩やかな勾配を持つ山林であるが，湧水には恵まれており，２か所に豊富な水量を持つ井戸が掘られている。この地の東側には**101**壱岐居館跡が隣接する。60m四方の敷地の回りには深い空堀を巡らす。壱岐直の居館跡に推定されている。現在の国片主神社である。

註１　「壱岐国続風土記」　寛保２年（1742）
註２　長崎県教育委員会　「原の辻遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第26集　1976
註３　長崎県教育委員会　「原の辻遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第31集　1977
註４　勝本町教育委員会　「カラカミ遺跡」　勝本町文化財調査報告書　第３集　1985
註５　水野精一・岡崎敬　「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』所収　1959

註6　壱岐郡文化財調査委員会　「大塚山古墳」　1983
　　芦辺町教育委員会　「大塚山古墳」　長崎県芦辺町文化財調査報告書　第2集　1987
　　芦辺町教育委員会　「大塚山古墳―環境整備事業報告書―」　1989　など
註7　長崎県では，平成元年度から県内の12の重要古墳について，墳丘測量や石室の実測を行っている。笹塚古墳は平成元年度に実施した。出土遺物の内金属器については現在保存処理中。
註8　芦辺町教育委員会　「鬼の窟古墳」　長崎県芦辺町文化財調査報告書　第4集　1990

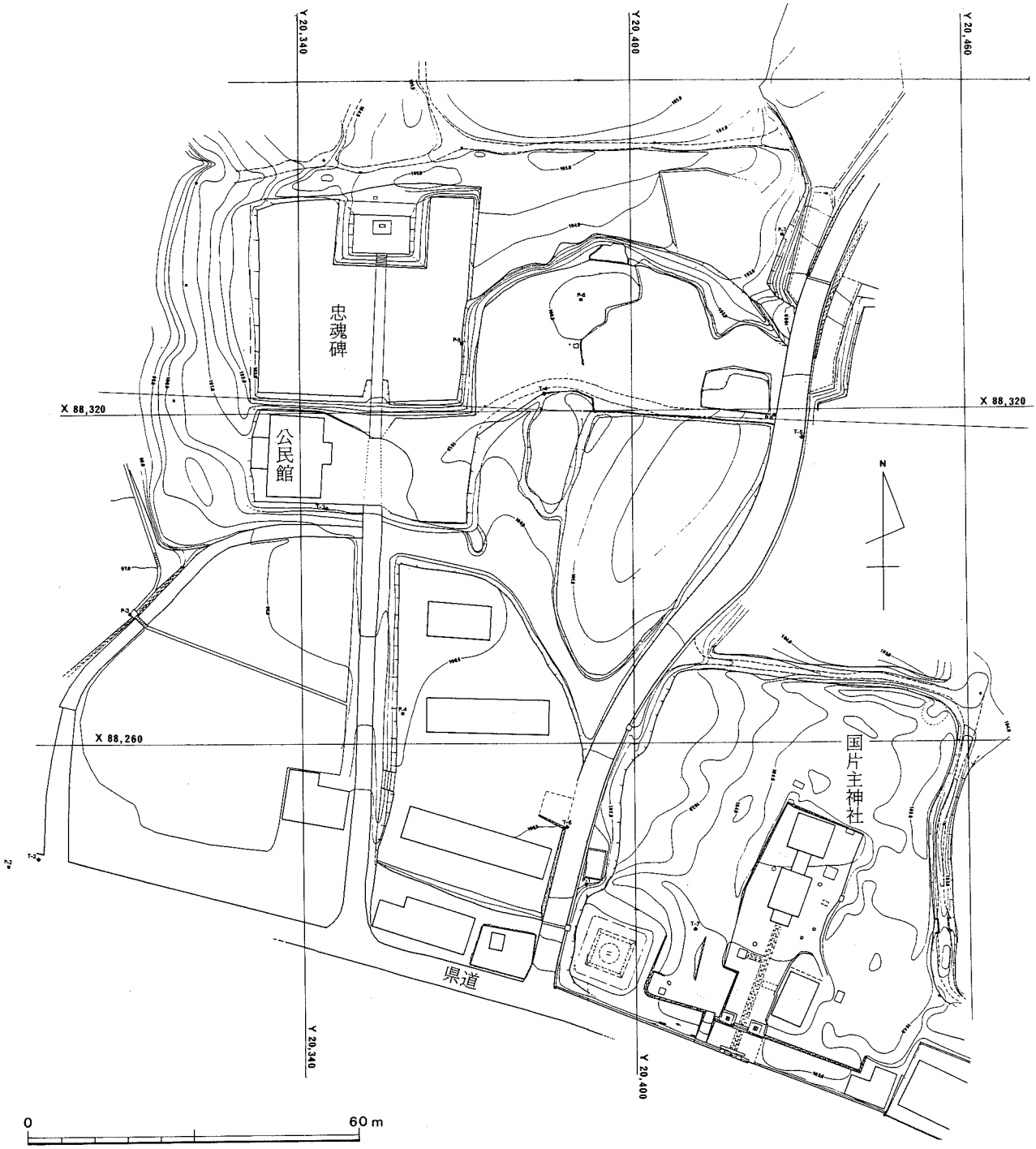


Fig. 5　周辺地形図（座標系Ⅰ）

Tab. 1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物	文献
1	水ノ元1号墳	勝本町布気触字水ノ元	古墳	古墳	円墳，横穴式石室	1
2	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	小さな墳丘が痕跡的に残る	1
3	明神山1号墳	〃 〃 字明神	〃	〃	円墳，竪穴式石室？ 大半は崩壊	1
4	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
5	掛木古墳	〃 〃 字掛木	〃	〃	円墳，横穴式石室 玄室に刳抜式家形石棺あり	1・3
6	道元古墳	〃 〃 字中尾	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
7	布気古墳群1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室 半壊 石室の一部が残	1
8	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室 線刻？	1
9	〃 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳	1
10	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	積石塚	1
11	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
12	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室	1
13	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室	1
14	〃 8号墳	〃 〃 〃	〃	〃	石室はない	
15	大清水池遺跡	〃 〃字原野田・森尻	包含地	古・奈	奈良時代の製塩土器，須恵器	3
16	百合畑古墳群1号墳	〃 百合畑触	古墳	古墳	前方後円墳	1・3
17	〃 2号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
18	〃 3号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳？	1
19	〃 4号墳	〃 〃	〃	〃	封土なし 横穴式石室	1
20	〃 5号墳	〃 〃	〃	〃	円墳？ 横穴式石室	1
21	〃 6号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
22	〃 7号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
23	〃 8号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
24	〃 9号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
25	〃 10号墳	〃 〃	〃	〃	須恵器出土？	1
26	〃 11号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
27	〃 12号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，竪穴式石室？	1
28	〃 13号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
29	〃 14号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
30	〃 15号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳？	1
31	〃 16号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳？	1
32	〃 17号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
33	〃 18号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
34	〃 19号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
35	〃 20号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳	1・3
36	〃 21号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1
37	〃 22号墳	〃 〃	〃	〃	円墳	1

Tab. 2 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物	文献
38	百合畑古墳群 23号墳	勝本町百合畑触	古墳	古墳	円墳，横穴式石室	1
39	笹塚古墳	〃 〃 字笹塚	〃	〃	円墳，横穴式石室	1・3
40	城山 1号墳	〃 〃 字城山	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
41	亀石 9号墳	〃 〃 字笹塚	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
42	双塚 1号墳	〃 立石東触字双塚	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
43	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
44	亀石 8号墳	〃 〃 〃	〃	〃	封土なし	1
45	双六古墳	〃 〃 字双六	〃	〃	前方後円墳，横穴式石室	1・3
46	人羅古墳	〃 〃 字双塚	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
47	亀石 4号墳	〃 〃 字茶屋元	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
48	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，石室は崩壊	1
49	高峰遺跡	〃 〃 字大石	包含地	弥・古	弥生土器，土師器，黒曜石剝片，磨製石斧	3
50	高峰古墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳，箱式石棺，勾玉1，碧玉製管玉，臼玉1，小玉1	1
51	大石古墳	〃 〃 〃	〃	〃	封土なし，石室の一部が残る　金環	1
52	亀石 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，半分削られる	1
53	若宮神社古墳	〃 立石仲触字立石	〃	〃	円墳，箱式石棺，鎧(短甲)，直刀，土器，人骨	2・3
54	一本松古墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室　石室のみ残る	1
55	立石 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室　半壊	1
56	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室　半壊	1
57	布代 2号墳	〃 〃 字布代	〃	〃	円墳，横穴式石室，石室不明，削平	1
58	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
59	対馬塚古墳	〃 立石東触字国柳	古墳	古墳	前方後円墳，竪穴式石室？	1
60	匹合古墳	〃 立石仲触字立石	〃	〃	円墳，墳丘が残る	3
61	牛神遺跡	〃 立石東触字国柳	墳墓	弥生	甕棺，箱式石棺	1
62	国柳遺跡	〃 〃 〃	〃	先～古	細石刃核，剝片鏃，骨角器，敲石，弥生土器，須恵器，石鍋	3
63	カラカミ遺跡	〃 〃 字カラカミ 国柳	包含地	弥生	甕棺，V字溝，須恵器，弥生土器，土師器，陶質土器，銅鏃，骨角器	4
64	木場遺跡	〃 立石仲触字鯨伏	墳墓	〃	甕棺，箱式石棺	3
65	経ノ辻遺跡	〃 〃 字椿多	包含地	〃	V字溝，弥生土器	4
66	下松 2号墳	芦辺町住吉後触字下松	古墳	古墳	円墳，横穴式石室　半壊	1
67	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，石室は羨道のみ残る	1
68	柴取神辻 2号墳	〃国分本村触字仮塚国分	〃	〃	円墳，ゴルフ場建設のため完全消滅	1
69	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
70	山ノ神古墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室　ほぼ原形	1
71	山ノ神 1号墳	〃 〃 字京塚国分	〃	〃	前方後円墳，横穴式石室玄室のみ残る	1

Tab. 3 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物	文献
72	山ノ神2号墳	〃国分本村触字京塚国分	古墳	古墳	円墳，横穴式石室　道路で半壊	1
73	〃 3号墳	〃 〃 字仮塚	〃	〃	円墳，横穴式石室　倉庫で半壊	1
74	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，崩壊している	1
75	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
76	小オニヤ古墳	〃 〃 〃	〃	〃	大部分壊滅	1
77	鬼の窟古墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室　壱岐最大古墳	1・6
78	兵瀬古墳	〃 〃 字兵瀬	〃	〃	円墳，横穴式石室　周溝あり	1・3
79	百田頭1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳	1
80	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳	1
81	〃 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳	1
82	〃 4号墳	〃 〃 字国分	〃	〃	円墳，横穴式石室　半壊	1
83	〃 5号墳	〃 〃 字仮塚国分	〃	〃	円墳，横穴式石室　船の線刻	1
84	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室　ほぼ完全	1
85	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳？　小さな石で構築(ドーム状)	1
86	〃 8号墳	〃 〃 〃	〃	〃	低平な封土　竪穴式石室？	1
87	釜蓋1号墳	〃 〃 字釜蓋国分	〃	〃	横穴式石室	1
88	〃 2号墳	〃 〃 字兵測国分	〃	〃	円墳，封土消失	1
89	〃 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室　須恵器出土	1
90	〃 4号墳	〃 〃 字国分	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
91	〃 5号墳	〃 〃 字兵瀬	〃	〃	円墳，両方削平	1
92	〃 6号墳	〃 〃 〃 国分	〃	〃	円墳，横穴式石室	1
93	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳　墳丘半分消失，横穴式石室　半分壊滅	1
94	通触遺跡	〃 中野郷西触	包含地	弥・古	弥生土器，須恵器，石斧，黒曜石，近世陶磁器	1
95	ムギカミ神社古墳	〃 〃 西触	古墳	古墳	円墳？　横穴式石室　天井石露出　半壊状態	1
96	大谷第2遺跡	〃 国分東触	包含地	弥・古	弥生土器，土師器，須恵器	3
97	〃 第1遺跡	〃 〃	〃	〃	弥生土器，土師器，須恵器	3
98	月読神社前遺跡	〃 〃 〃	〃	〃	弥生土器，土師器，須恵器，青磁	3
99	館遺跡	〃 国分本村触字館山	〃	古・奈	たたら遺構，土師器，鉄片	5
100	大谷第3遺跡	〃 〃 〃	〃	古・鎌	黒曜石原石，弥生土器，土師器，須恵器，高麗青磁，鉄	3
101	壱岐氏居館跡	〃 国分国片主神社敷地	館跡	奈・平	空堀，土塁	3
102	壱岐嶋分寺跡	〃 国分本村触	寺跡	〃	基壇，礎石，瓦溜，軒丸瓦，布目瓦，須恵器，土師器　等	本書
103	京塚山1号墳	〃 〃 国分	古墳	古墳	円墳，横穴式石室	1
104	京塚山2号墳	芦辺町国分本村触国分	〃	〃	円墳，封土僅かに残存，竪穴式石室　石材一部露出	1

Tab. 4 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物	文献
105	京塚山3号墳	芦辺町国分本村触国分	古墳	古墳	円墳，竪穴式石室	1
106	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，石室の一部が露出	1
107	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	封土なし，竪穴式石室？	1
108	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，封土僅かに残る，横穴式石室半壊	1
109	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳，竪穴式石室	1
110	小原1号墳	〃 国分川迎触	〃	〃	円墳，横穴式石室　石室が見えている	1
111	〃 2号墳	〃 〃	〃	〃	円墳，半壊	1
112	カジヤバ古墳	〃 〃	〃	〃	円墳，横穴式石室　木棺	7
113	大原3号墳	〃 〃 字大原	〃	〃	墳丘は残存しない天井石・側石が露出	3
114	平原3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘・石室とも半壊　石室内から土師器椀出土	3
115	大原2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘は残存しない天井石・側石が露出	3
116	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘は残存しない　一部を削平されているが，石室はほぼ完全	3
117	長野古墳	〃 住吉東触長野上	〃	〃	墳丘東側の一部を削平　墳丘長10.0m 横穴式石室　天井石が落下	3

文献1　松永康彦「壱岐島における古墳の現状」『壱岐』15号　壱岐史蹟顕彰会　1981
文献2　小田富士雄「対馬・壱岐の古墳文化」『東アジア世界における日本古代史講座』第2巻
文献3　長崎県教育委員会「長崎県遺跡地図」長崎県文化財調査報告書　第87集　1986
文献4　勝本町教育委員会「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書　第3集　1984
文献5　1976年　九州大学調査
文献6　芦辺町教育委員会「鬼の窟古墳」　長崎県芦辺町文化財調査報告書　第4集　1990
文献7　芦辺町教育委員会「カジヤバ古墳」　長崎県芦辺町文化財調査報告書　第3集　1988

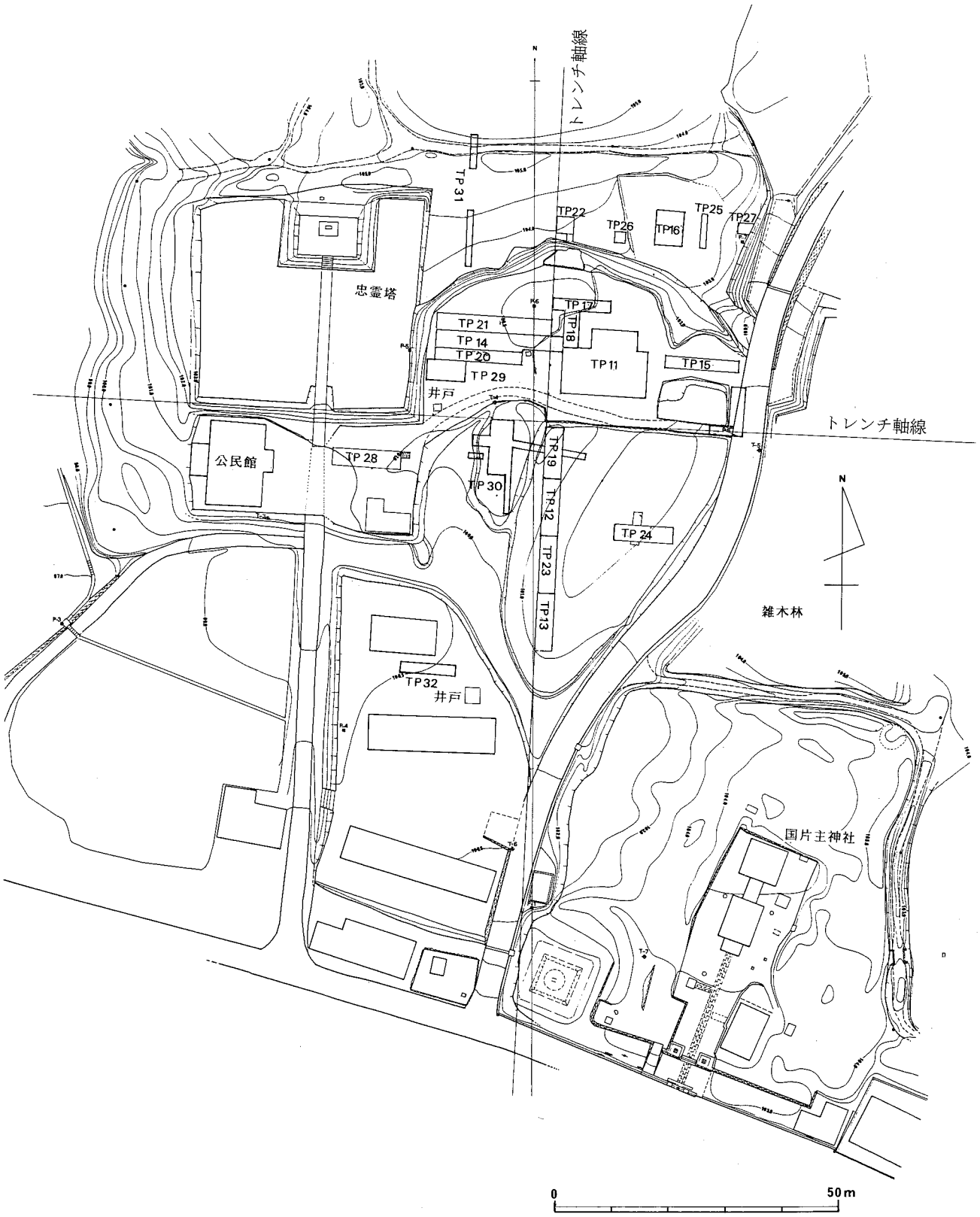

トレンチ軸線
TP 31
TP22
TP26
TP16
TP25
TP27
忠霊塔
TP 17
TP 21
TP 18
TP 14
TP 20
TP 29
TP 11
TP 15
井戸
トレンチ軸線
公民館
TP 28
TP 19
TP 30
TP 12
TP 24
TP 23
TP 13
N
雑木林
TP 32
井戸
国片主神社
0
50m

Fig. 6　試掘壙配置図

II　遺跡の調査

壱岐嶋分寺及びその周辺の調査は昭和62年に始まる。遺跡の東側を南北に蛇行して走る道路の拡副工事が計画されたのが初現である。この時は遺跡の範囲が不明であったので，拡幅部分についてそれぞれ試掘壙を設定してみた。ＴＰ１～ＴＰ10までがそれである。この中には国片主神社の西側空堀の一部や，ＴＰ15の南側通路の一部が含まれるが，今回の報告では紙幅の都合上割愛せざるを得なかった。また，調査は平成２年度まで行っているのでFig. 6にはＴＰ32まで掲載してあるが，今回の報告は例言で述べた如く平成元年までの報告であるからＴＰ11～ＴＰ28までが本書収録内容であることを断わっておく。

一　１次調査（ＴＰ11～ＴＰ13）

調査区の設定にあたっては，県指定区域のほぼ中央部に位置する標柱と指定地東側境界標柱の中心部を結ぶ線を東西軸とし，この線に直交する南北線を設定した(Fig. 6)。翌年度には座標杭を遺跡周辺に８か所設定したが，混乱を避けるため調査軸線はそのまま踏襲した。南北の調査軸線と座標軸線との差はN－１°30′－Eである。

ＴＰ11

山口麻太郎氏の著書にも述べられているが，耕作時に大きな石が邪魔をしたとの談があったため，耕作者の記憶を参考として設定したのがＴＰ11である。試掘の結果，トレンチ中央部に版築状の遺構が現れたため，東，西，北側にそれぞれ拡張を行った。拡張の結果，版築を持つ建物基壇と２本の溝，瓦溜，そして原位置を保つ礎石１個を確認した。建物をＳＢ１，溝をＳＤ１，ＳＤ２，ＳＤ３，ＳＤ４と呼称する(Fig. 9)。各遺構と出土遺物，そしてその他の場所から出土した遺物の順に説明を加える。

ＳＢ１

一辺が6.6m平方の建物基壇である。基壇内に偶然掘ってあった電柱跡の断面の観察によれば，版築は６枚から８枚を厚さ40cm程に固めている。色調は明茶褐色を呈する。黄褐色のローム層と灰青色の風化礫をまぜて固める。基壇の南側中央には２段に構築された簡単な階段が見られる。また，東側と北側には明瞭な雨落ち溝が見られるが，南側と西側は顕著ではない。基壇化粧と思われる遺構は確認出来ない。基壇の北東隅にはいびつな七角形をした礎石が据えられているが，基壇の一部を切った状況からするとこの基壇とは時期が異なる可能性がある。礎石の周囲には固定するための赤褐色をした焼成が甘い瓦片がぎっしりと投げ込まれている。

基壇上面には４個の礎石痕が見られるが，そのほかにも近世のものと思われる柱穴状ピットが見られる。昭和の初期まではこの付近に家が建っていたと言う。

基壇の上面は表土から僅か15cm程で露出する。本来ならこの上に礎石がのる訳であるから，当然耕作の邪魔になろう。残存礎石に完形品が少ないのは大きな礎石が細かく砕かれた可能性を示唆している。

ＳＢ１周辺出土土器（Fig. 7）

基檀内部からではなく，何れも礎石周辺から出土した。従ってＳＢ１に確実に伴う資料というわけではない。

1～**3**は土師器の皿と椀である。**1**はロクロ切り離しを行い底部から内湾ぎみに体部に移行し，中位に浅い沈線を施す。口縁部はにぶい稜をなし，器面はナデ調整を行う。色調は外面が暗黄褐色，内面が淡黄赤褐色を呈する。**2**は，やや外反ぎみの高台を貼りつける。胎土に黒曜石粒を５点認める。色調は，内外面ともに赤褐色を呈する。３は低い高台を貼付している。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈する。

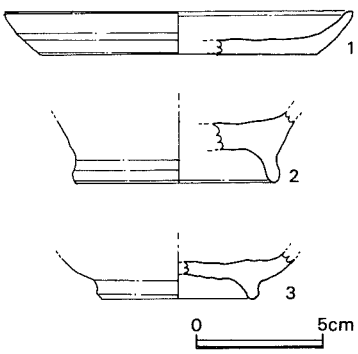


Fig. 7　ＴＰ11
ＳＢ１周辺出土土器（1/3）

ＳＤ１（Fig. 9）

ＳＢ１の南側を東西に走る溝である。幅２ｍ，深さ40cm程で西側の方が少し深くなる。遺物は瓦片が主で土器は少ない。

ＳＤ２（Fig. 9）

ＳＢ１の南側雨落ち溝である。幅40cm，深さ10cmと浅いが中に多くの瓦片と若干の土器片を含む。

ＳＤ２及び周辺出土土器（Fig. 8）

1は，土師器杯のヘラ切り離しの底部である。色調は，内外面とも淡黄赤褐色を呈する。底部からの立ちあがりやや直線的となり，ナデ整形をしている。胎土に安山岩小粒が混入するものの緻密である。**2**は，小型の皿で，胎土に金雲母が入る。底部から体部への移行部位やや丸味をもって立ちあがる。体部の整形は風化のため明瞭ではない。また，底部はヘラ切り離しである。**3**は，緑色が濃い青磁椀である。外面に草花文の片彫を施す。**4**は，越州窯系青磁椀（II－３類）で平底の形態を有し，外底部を回転ヘラ削りし，重ね焼きの目跡が体部最下部内面見込みに認められる。畳付部分は露胎である。色調は黄色味を帯びた緑色を呈する。**5**は土師器杯で高台を有し，端部やや尖りぎみである。色調は淡赤褐色を呈する。ロクロ痕を残す。**6**は須恵器で小さく低い高台を有する。内面ミズビキで外面はヘラ調整を行っている。焼成良好で，断面の色調は小豆色を呈する。**7**は須恵器杯である。口縁部で外反し端部丸くおさめ，色調暗灰色を呈する。**8**は須恵器蓋の小片である。口縁端部に厚みがあり，その端部に浅い沈線が入る。色調は明灰色

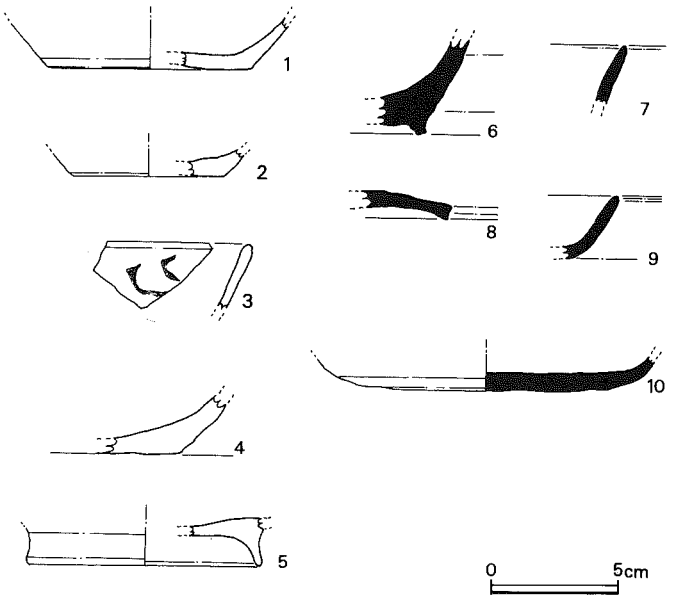


Fig. 8　ＴＰ11（ＳＤ２）及び周辺出土土器（1/3）

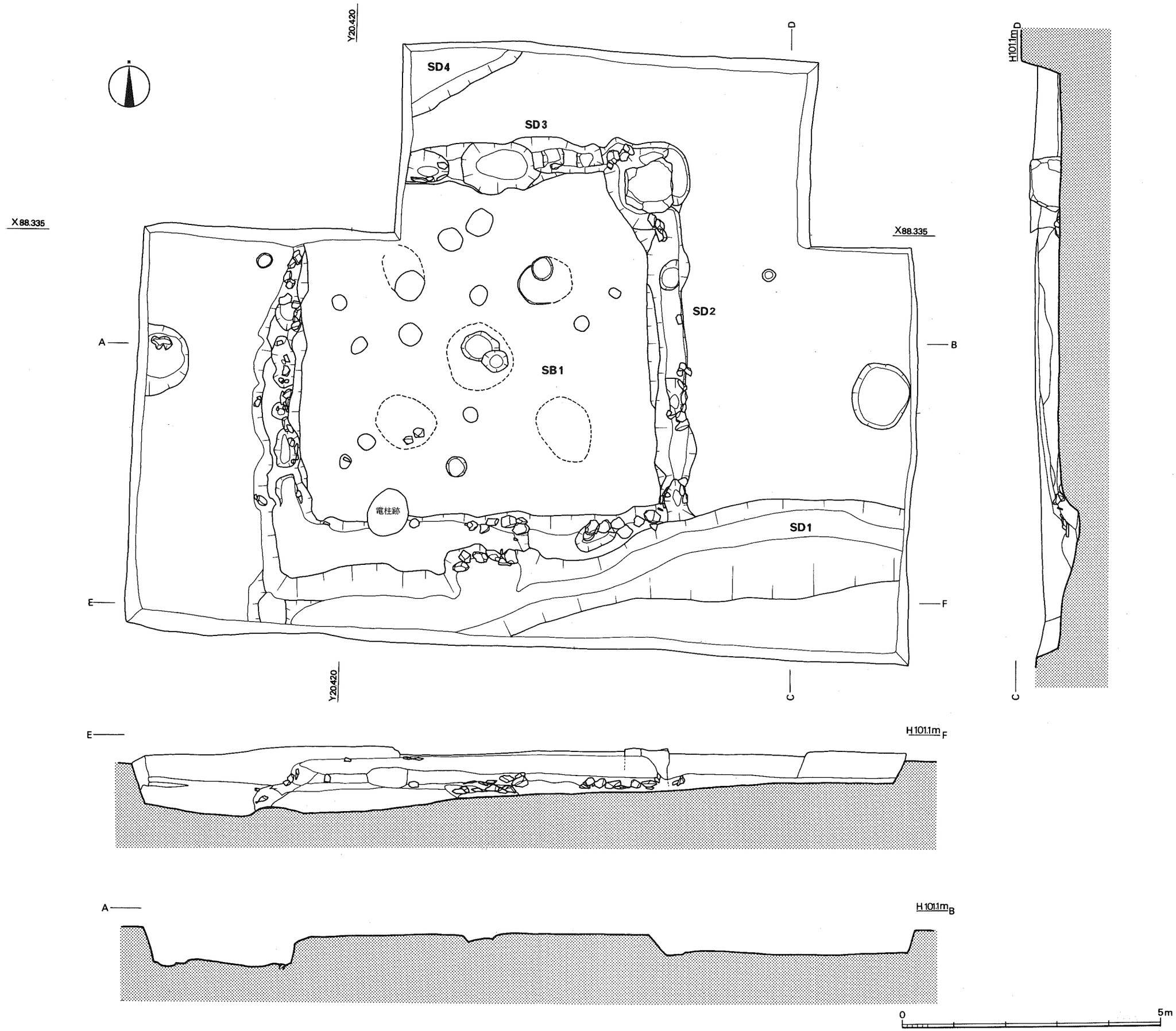


Fig. 9　ＴＰ11区（ＳＢ１・ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３・ＳＤ４）平面実測図（1/80）

を呈する。**9**は外面が灰色を呈し，底部からやや膨らみかげんに口縁部に移行する。口縁端部はやや尖り気味である。赤褐色を呈する。**10**は須恵器の底部でロクロ痕をナデ消す。器形は底部から丸みをもって立ち上がる。内底中央部のミズビキ痕をナデ消している。

以上の資料の内，**5**，**6**，**9**はＳＤ２内出土である。

ＳＤ３（Fig. 9・10）

ＳＢ１の北側雨落溝である。多くの瓦片を含むが細片が多い。Fig. **10**—**1**は玉縁丸瓦の細片である。灰色で焼成は甘い。凹面には目の粗い布目が残る。**2**は平瓦である。灰白色で焼成堅緻である。凹面には目のつまった布目が残る。凸面は右撚りの縄目圧痕の上に一部ハケ目状のヨコナデ調整を行っている。側縁部は両面について面取りを行う。

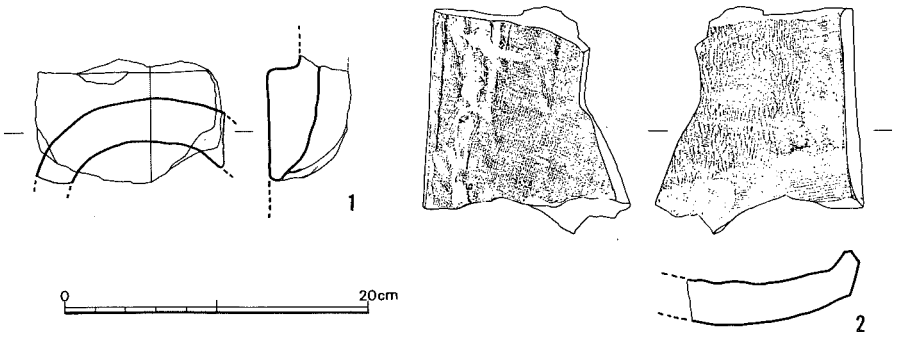


Fig. 10　ＴＰ11（ＳＤ３）出土瓦実測図（1/5）

東瓦溜出土遺物（Fig. 11）

ＳＢ１の東側瓦溜出土土器である。**1**は須恵器の蓋の口縁部が下方に折れ曲がり，口縁端部ににぶい稜をもつ。色調は灰色を呈したミズビキ成形である。**2**は須恵器の杯身で低い高台を有し，外端部が体部にめりこんだ状態にある。底部からの立ち上がりは，膨らみを持って体部へ移行する。色調は内外面共に暗灰色を呈する。

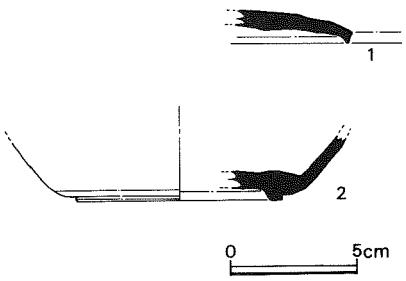


Fig. 11　ＴＰ11東瓦溜出土土器（1/3）

ＴＰ11区出土遺物（Fig. 12～Fig. 14）

遺構以外から出土した遺物を掲載しておく。

1は，表面採集の青磁碗で外面に火を受けたものか茶色味を帯びた緑色を呈する。内面は青味を帯びた緑色である。釉は，高台まで施釉されている。高台やや湾曲し，丸味をもって立ちあがる。無文である。**2**は，越州窯系青磁椀である。細くて低い高台を有する。器面の全体の発色は，黄緑色を呈する。内面に目跡が４か所ある。**3**は，土師器の皿で底部より丸味をもって立ちあがる。また，底部のロクロ成形をナデ消している。**4**は，平坦な底部をなし，ロクロ引きがわずかに残る。底部と体部との境に緩い屈曲がある。風化がかなり進行しており，器面全体に細かいひびが入る。内外面の色調は，赤褐色を呈している。**5**は，底部からやや屈曲して体部へ移行する。色調は，内外面ともに淡黄褐色を呈する。**6**は，底部と体部の境に稜があり，立ちあがりやや湾曲する。色調は，外面が淡赤褐色を呈し，内面は暗赤褐色をなす。**7**は，平坦な底部から丸味をもって立ちあがり，内外面体部に黒

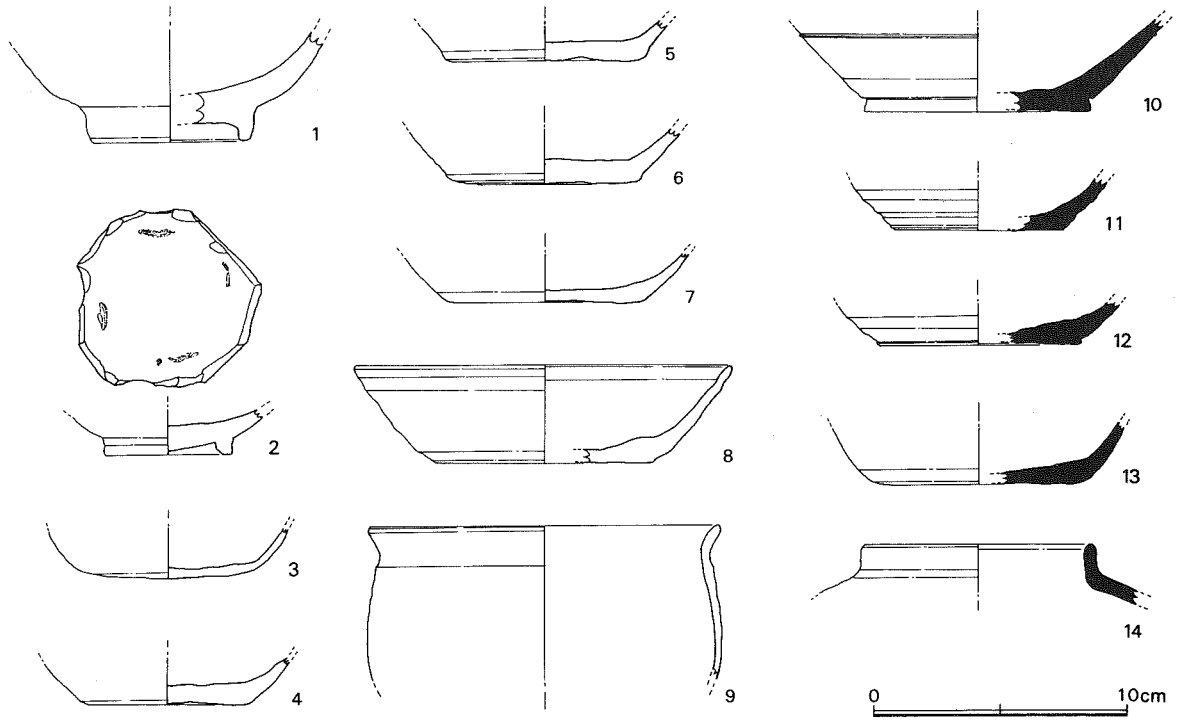


Fig. 12　ＴＰ11出土土器実測図（1/3）

く変色した部分がある。他は暗黄赤褐色を呈する。**8**は，よく焼き締まった土師器で，底部と体部の境に稜があり立ちあがり湾曲しつつ外方へ延びる。口縁端部は，丸くおさめる。**9**は，甕形土器で，器壁が薄く，頸部から外反し口縁端部は丸くおさめる。色調は，内面が黒色を呈し，外面は暗黄褐色を呈する。**10**は，須恵器の杯である。底部に回転糸切り痕が明瞭に残る。底部と体部との境に稜をなし，体部より直線的に上方へ延びる。色調は，内外面とも乳灰色を呈する。時期的には9世紀前半以降のものであろう。**11**の底部は，ほぼ平坦に作出し，底部との立ち上がりから体部との境に丸味を意識して製作されているが，粗雑な整形のため凹凸がめだつ。体部に浅い凹線が3本入る。**12**は，焼成あまく，暗灰黄色を呈する。底部との境に稜をなす。体部に2本の稜が残る。**13**は，底部と体部の境が明瞭でなく丸味をもって立ちあがる。焼成あまく暗灰黄色を呈する。**14**は，須恵器の短頸壺である。口縁端部が丸味をもち，頸部からの立ちあがりやや内傾ぎみとなる。また，頸部から肩部にかけては緩やかにカーブするものと思われる。

Fgi. **13**—**3**，**4**は軒丸瓦である。共に表土出土資料であり，1/4個体程しか残っていない。**3**は灰色で焼成は甘い。外区外縁には凸線鋸歯文を巡らし，外区内縁には6個の珠文が残るほか，内区には複弁蓮華文が観察される。裏面の調整痕は不明であるが，製作にあたっての粘土の継ぎ目がよく観察される。**4**は淡赤褐色で焼成は甘い。瓦当面もかなり摩耗しているため，文様は外区内縁の珠文を除いて殆ど不明である。

以上の資料を含む軒丸瓦については，総括の章でふれる。

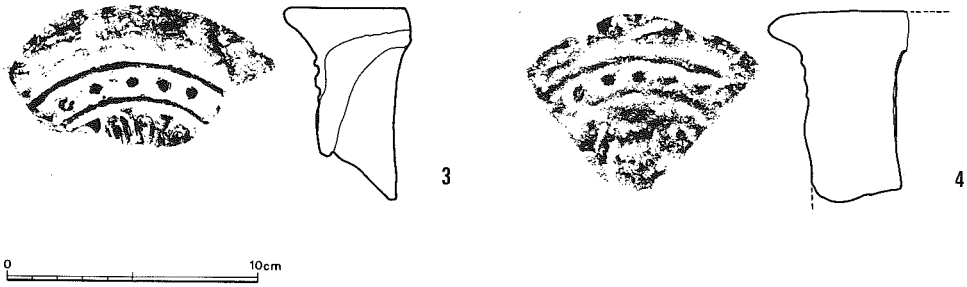


Fig. 13　ＴＰ11出土軒丸瓦実測図（1/3）

Fig. 14は何れもＴＰ11区出土資料である。

瓦については分類を含めてⅢ章で総括するのでここでは簡単に紹介するにとどめる。

5～**7**は玉縁丸瓦である。**5**は東瓦溜内出土資料である。丸縁部から欠損している。凹面には目の粗い布目を残す。凸面調整はヘラによるヨコナデを行う。側縁には凸面部に分割載面の破面が見られる。胎土には大きめの砂粒と若干の雲母を混入する。**7**は暗褐色で焼成は甘い。胎土に石英粒を含む。調整痕は不明である。**8**は平瓦である。赤褐色で焼成は良い。側縁部は両面に小さい面取りを行う。胎土は精選する。**9**は凸面に右撚りの縄目の叩きを持つ平瓦である。赤褐色で焼成は良い。側縁，端縁共に凸面部を面取りする。桶巻作りで,幅2.7cmの模骨痕が観察される。**10**は灰褐色で焼成は良。やはり桶巻作りで凹面には布目と模骨痕が明瞭である。凸面は櫛歯状原体による横方向のカキ目調整を行う。壱岐嶋分寺では，平瓦に対する調整ではこの種のものが最も多い。**11**はダイヤ形の叩きを持つ平瓦である。この種の叩きは数十点しか出土していない。暗黄褐色で焼成は甘い。**10**のカキ目と併用している。

12は隅切瓦であろう。平瓦を打ち欠いて三角形状に整える。暗茶褐色で焼成は良い。広端部の半径は20cm程であるから桶の大きさが推定される。

13，**14**は熨斗瓦である。**13**は丸瓦を転用する。２面を打ち欠いて形状を長方形にしている。**14**も同じく丸瓦に調整を加えて形状を整える。嶋分寺出土の熨斗瓦は全て他の種類の瓦の転用品である。

ＴＰ13区（Fig. 6）

ＳＢ１の南側に広がる区域に設定したトレンチである。現在タバコ畑となっており，小さな高まりを見せているが，壱岐では昔から畑地は殆どの場合周囲の土を中央部にかき集めた饅頭畑の体裁をとる。少しでも耕地面積を多くしようとの知恵であろう。現在は圃場整備がすすんでいる関係でこういう畑はすこしずつ姿を消している。

土層は３層に分かれる。約１m程で地山に達する。３層目の暗黒褐色中に瓦片や土器などを含むが遺構は判然としない。

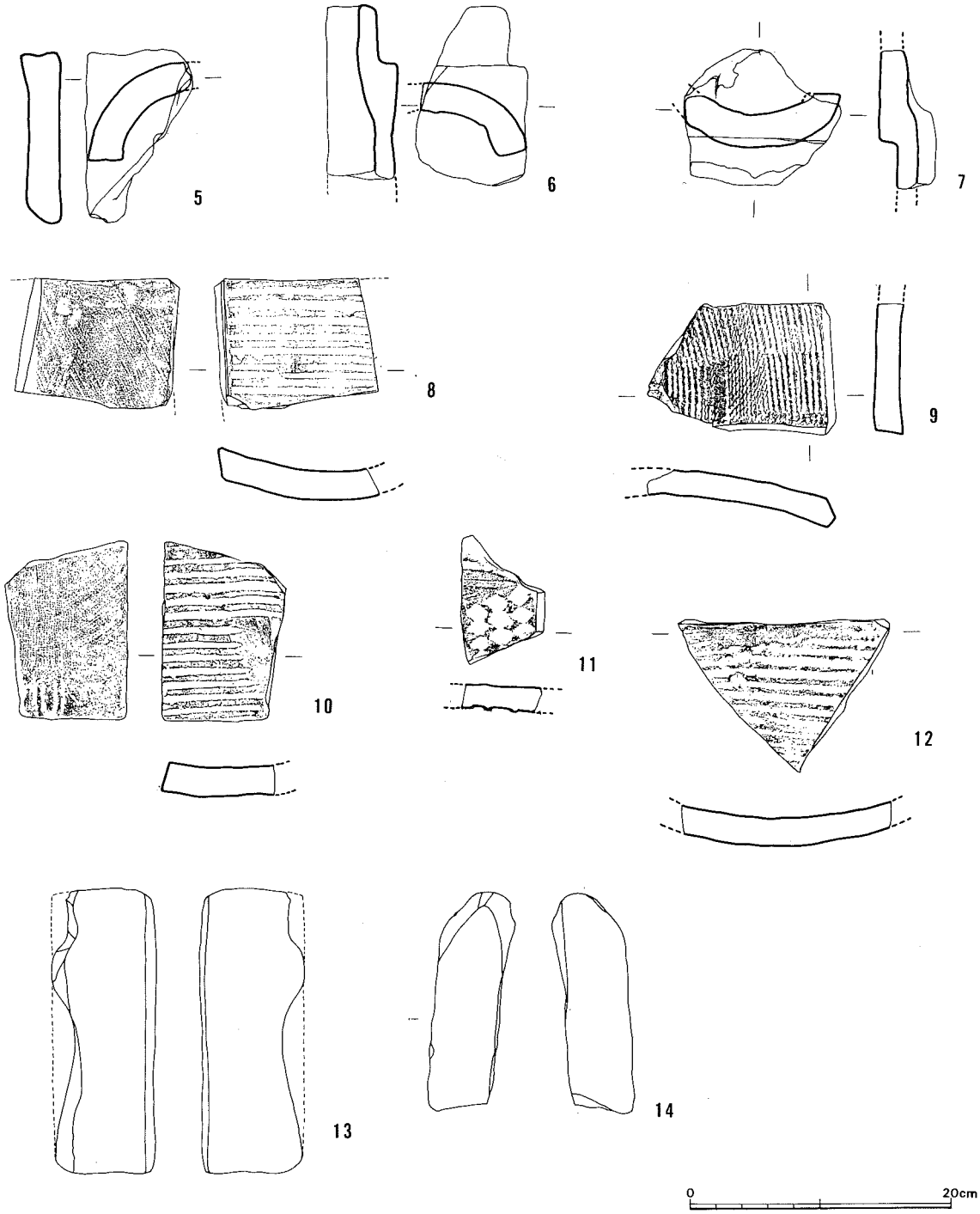


Fig. 14　TP11出土瓦実測図（1/5）

ＴＰ13区出土土器（Fig. 15）

1 は，土師器の皿でロクロ成形の切り離し。底部中央部がやや凹み底部端で接地する。底部と体部は丸味をもって立ちあがり，体部中位でやや外反する。口縁端部やや尖りぎみである。また，口縁部３か所に墨の付着がある。色調は内外面とも淡黄赤褐色をなす。**2** は，須恵器の蓋で天井部から体部に屈曲があり，口縁部で折りまげ口縁端部はにぶい稜をなす。**3** も天井から体部に屈曲し，口縁部でさらに折り曲げている。**2** より口縁部の丈が長くなる。口縁端部は丸味をもつ。焼成あまく淡黄灰色を呈する。**4** は，須恵器の皿で底部より丸味をもちながら体部へ移行し，体部上位で外反する。口縁端部は丸くおさめる。

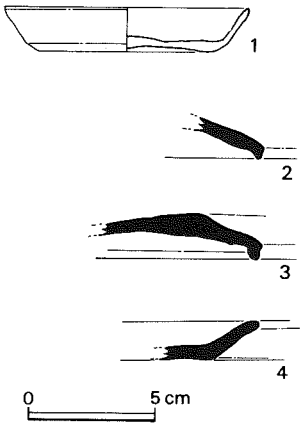


Fig. 15　ＴＰ13　出土土器

二　２次調査（ＴＰ14～ＴＰ19）

一次調査で確認した版築基壇を持つ建物を，塔の跡ではないかと考えた。位置的に平坦地のほぼ中央部にあることと，方位的にも軸線がほぼ真北を向くことがその主な理由であったが，とりあえずこの建物跡を中心としてトレンチを東西方向，南北方向にそれぞれ設定することとした。

ＴＰ14区（Fig. 16～Fig. 21）

ＳＢ２中心として西側に設定したトレンチである。土層は４層に分けられる。１層は表土。20cm程堆積する。２層は暗褐色土で近世から中世の遺物を多く含む。地点によって異なるが30cm～60cm程の厚みを持つ。３層は明茶褐色土で遺構はこの上面から掘り込まれる。４層は混風化礫明茶褐色粘質土で地山となる。**ＳＢ２**はほぼ東西に伸びる柱穴列で，この時点では柱の間隔が略２ｍの八間分が確認された。柱穴は径50cm前後，深さは35cm前後で統一している。柱穴内には根固めの石が多く認められる。このトレンチ内には更に多くの柱穴が認められるが相互の関連が不明であった。

おりから開かれた壱岐嶋分寺の調査指導委員会において全体的にトレンチを拡張してはどうかとの指摘がなされたため，結果的にこのトレンチは東西にそれぞれ５ｍ拡張をおこなった。

ＳＢ２出土土器①（Fig. 17）

1は，底部をロクロ切り離し後ナデ整形をした小型の皿である。色調は，内外面とも淡黄褐色を呈する。底部より膨らみをもって立ちあがり，中位より外反する。口縁端部は尖がりぎみである。内面は中央部にロクロ成形時の盛りあがりが残る。2は，断面に厚みのある高めの高台を有し，端部に丸味をもつ。外面の中央部に盛りあがりがある。色調は外面が赤褐色，内面が暗黄黒色を呈する。3は，2より幾分高い高台を有するが，断面の厚みは4㎜程度である。外面は淡黄褐色をなし内面は黒色を呈する。4は，高台が「ハ」の字状に張り，断面の厚みは3㎜程度である。高台から体部移行の部位で一旦直線的に延び，体部との境で湾曲して移行する。内外面の色調は暗黄黒色を呈する。成形は，ロクロ切り離し後に貼付高台としている。5は，口縁端部に丸味をもち，外面の口縁部下に6㎜程度の凹線が付されている。胎土粗く，色調は内外面ともに暗黄黒色を呈する。6は，土師器の高杯と思われるが，口縁部・高台ともに端部を欠く。丁寧なナデ整形を施す。内外面ともに黄赤褐色を呈する。7は，須恵器の蓋である。口縁端部が丸味をもって屈曲する。天井部ナデ整形を行っている。色調は，暗灰色を呈する。8も須恵器の蓋である。口縁部は，折りまげて端部がにぶい稜をなす。9は，扁平なつまみの中央部が宝珠の形状をとどめ盛りあがる。外面はヘラ整形にとどめる。色調は，明灰色を呈する。10は，高めの断面方形のつまみを貼付ており，9より一型式新しいものであろう。11は，杯身の小片である。口縁端部を丸くおさめる。成形はミズビキを行っている。12は，高台を貼付後体部をヘラ状工具により整形しており，底部から体部の立ちあがりに稜がつく。色調は，明灰色を呈する。

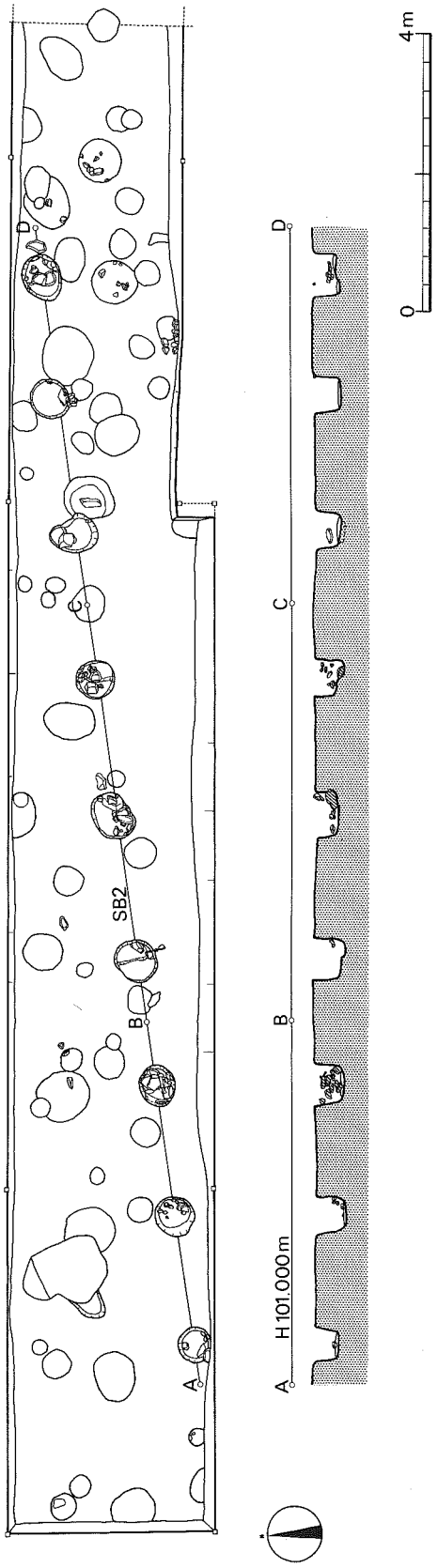


Fig. 16　ＴＰ14（ＳＢ２）平面実測図（1/50）

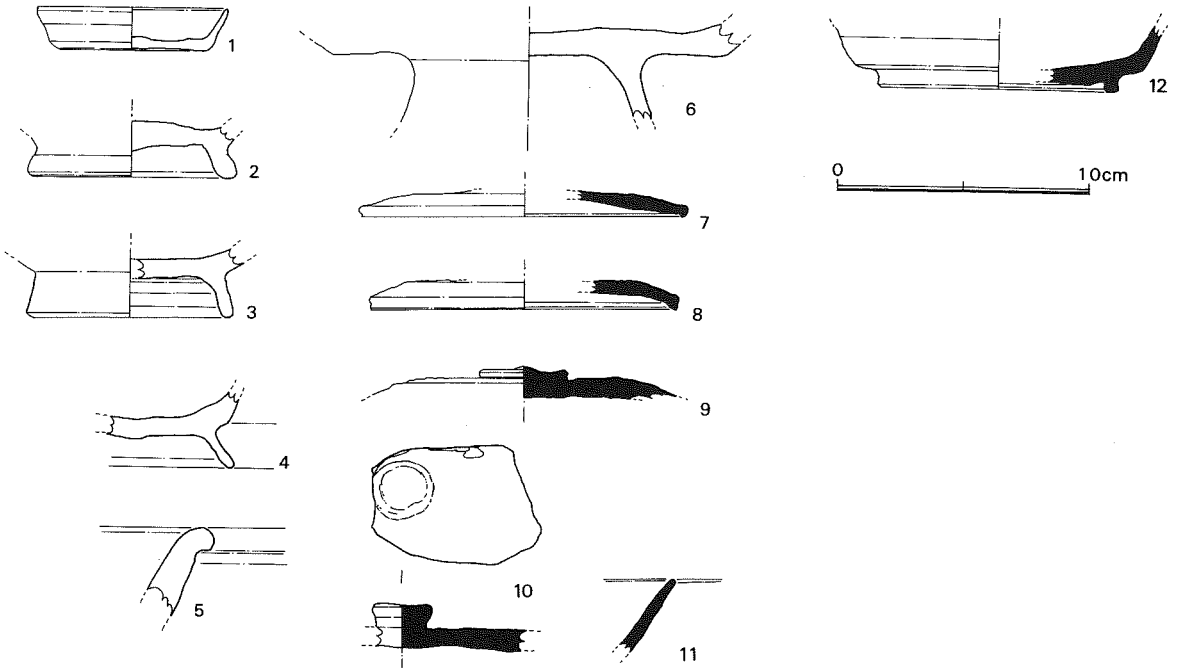


Fig. 17　ＴＰ14（ＳＢ２）出土土器実測図①（１/３）

ＳＢ２出土土器② (Fig. 18)

1 は，土師器高杯の脚部である。上部，下部ともに欠損しており全形を知りえない。**2** は，須恵器の杯身で底部と体部との境に稜がつき，湾曲しながら，体部中位よりやや外反する。端部丸くおさめる。内面に浅い沈線が４本入る。**3** は，高台が付くものであろうが，底部端の周囲が円形に剝落している。須恵器の壺である。外面の色調は暗茶色を呈し，内面灰色を呈する。また，内底面にはロクロ成形痕の盛りあがりが残る。器形は，底部から直線的に延び，体部中位で屈曲する。

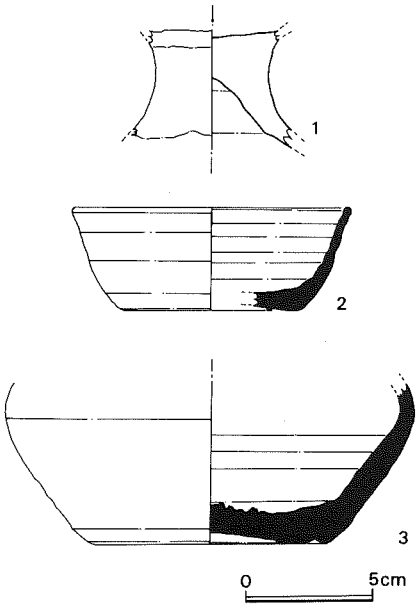


Fig. 18　ＳＢ２出土土器実測図②（１/３）

ＴＰ14西瓦溜出土土器（Fig. 19）

1は，須恵器の蓋で口縁部がほぼ直角に下方へ短く折りまがる。端部ににぶい稜をもつ。外面のロクロ痕をナデ消している。色調は，灰色を内外面ともに成す。**2**は，中央が凹んだ擬宝珠を有し，平坦な天井部から口縁部に向けて下方へ延びる。口縁部よりほぼ直角に折りまがり，口縁端部の断面に厚みをもつが，にぶい稜をなしている。色調は，焼成不良のためか内外面ともに淡黄灰色を呈している。**3**は，須恵器の杯身である。口縁部がやや外反し，端部丸くおさめる。色調は，内外面とも暗灰黒色を呈している。ミズビキ成形である。

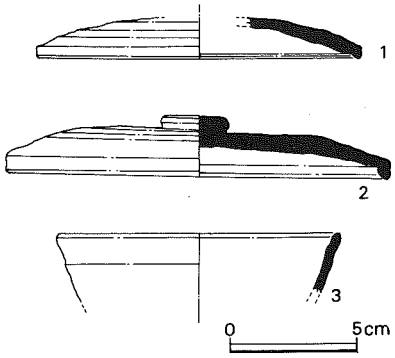


Fig. 19　ＴＰ14西瓦溜出土土器実測図（1/3）

ＴＰ14西瓦溜出土瓦（Fig. 20）

この地点からは，計140kgほどの瓦が出土した。その内訳は丸瓦約38kg，平瓦112kg程である。この内代表的な資料のみ図示する。**15・16**は丸瓦である。**15**は長さは完形で35.2cmである。赤褐色で焼成は良い。側縁部は凹凸面とも小さな面取りを行う。**16**は凸面にコヨナデ調整痕が顕著である。**17～19**は凸面がカキ目状調整をする資料である。**17**には桶巻作りの痕跡と粘土の継ぎ目痕が顕著である。淡赤褐色で焼成は甘い。**18**も桶巻作りで2.2cmの模骨幅が観察される。淡赤褐色で焼成良好。**19**の凸面調整原体は幅8.6cmに９本の櫛歯状単位を付けたものである。原体は数種類確認している。なお，カキ目状調整は必ず側縁に対して直角に行う。**20～22**は凸面に縄目圧痕調整を施す資料である。**20**は桶巻作りで，模骨幅は4.4cmである。凸面の調整には右撚りで一段無節の糸を巻き付けた叩板を用いる。明赤褐色で焼成は甘い。瓦中央部に径８mmの孔を穿っている。**21**は灰褐色で胎土に大粒の石英粒を含む。凸面の叩き原体は幅５cmである。**22**は暗灰褐色で焼成は甘く，軟質で瓦器のような感触である。胎土に石英粒を含む。凸面の叩き原体は幅５cmである。

23は熨斗瓦である。全体的に摩滅しているが，平瓦の２面に調整を加え長方形状に整える。長さは13cmである。

ＴＰ14　2・3層出土土器（Fig. 21）

1は，土師器の脚付皿で高台を有する。比較的高い高台を貼付しやや外反ぎみである。端部は丸味を帯びている。体部は，直線的に上方へ延び，口縁端部が尖りぎみとなる。**2**は，土師器の椀で高台と体部との境ににぶい稜をなし内湾しつつ上方へ延びる。内外面とも黄赤褐色を呈する。**3**は，底部に丸味をもち，体部との境に稜をなす。立ちあがり丸味をもち，色調は，**2**と同様である。**4**は，底部より丸味をもって体部に移行し，体部中位より外反する。口縁端部に丸味をもちロクロ成形痕がわずかに底部に残る。**5**は，外底部の中央部が凹み底端部で接地する。底部と体部ににぶい稜をなしやや膨らみをもって立ちあがる。色調は，淡黄色を呈する。**6**は，須恵器の蓋で，天井部にヘラによる

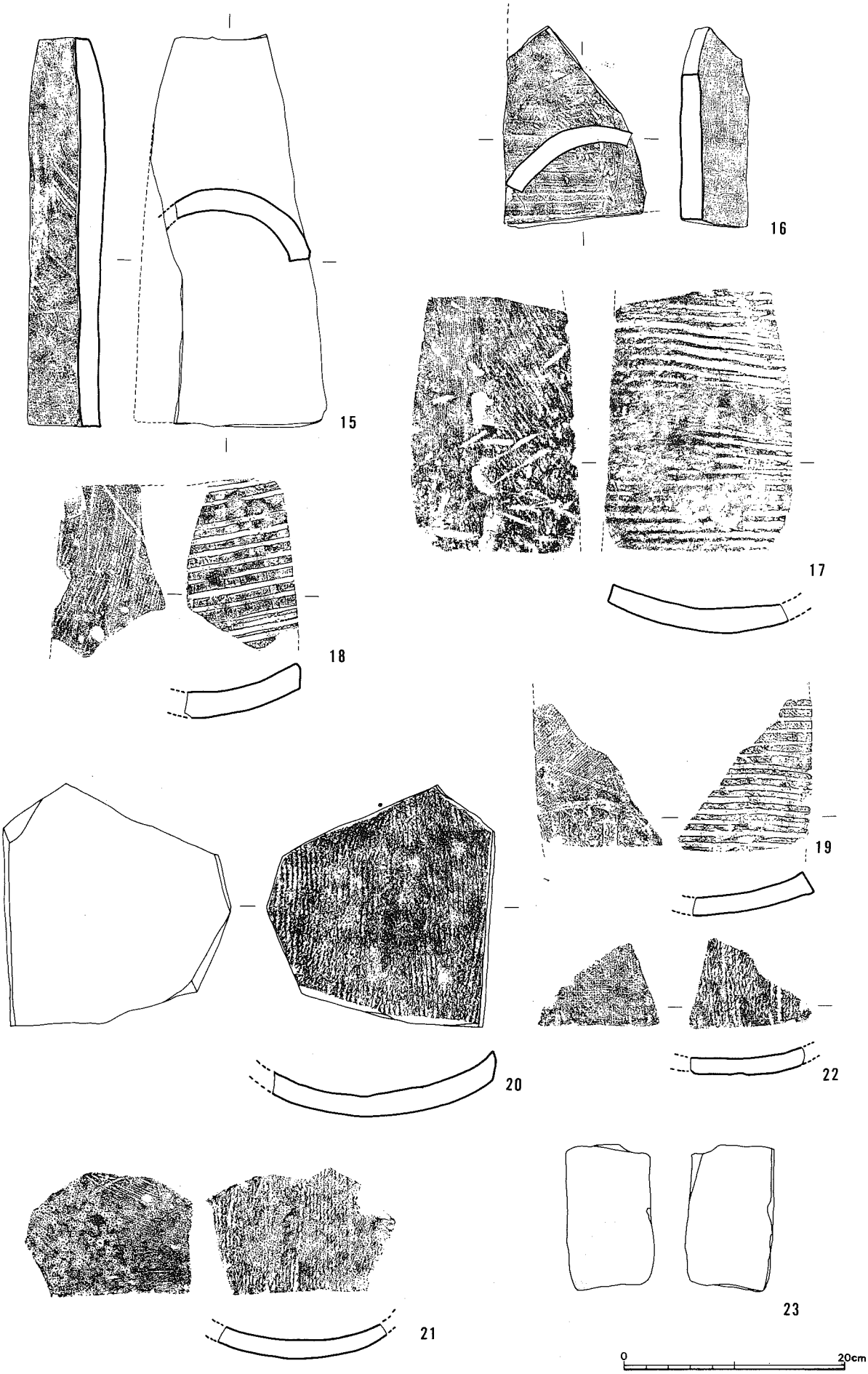


Fig. 20　ＴＰ14西瓦溜出土瓦実測図（1/5）

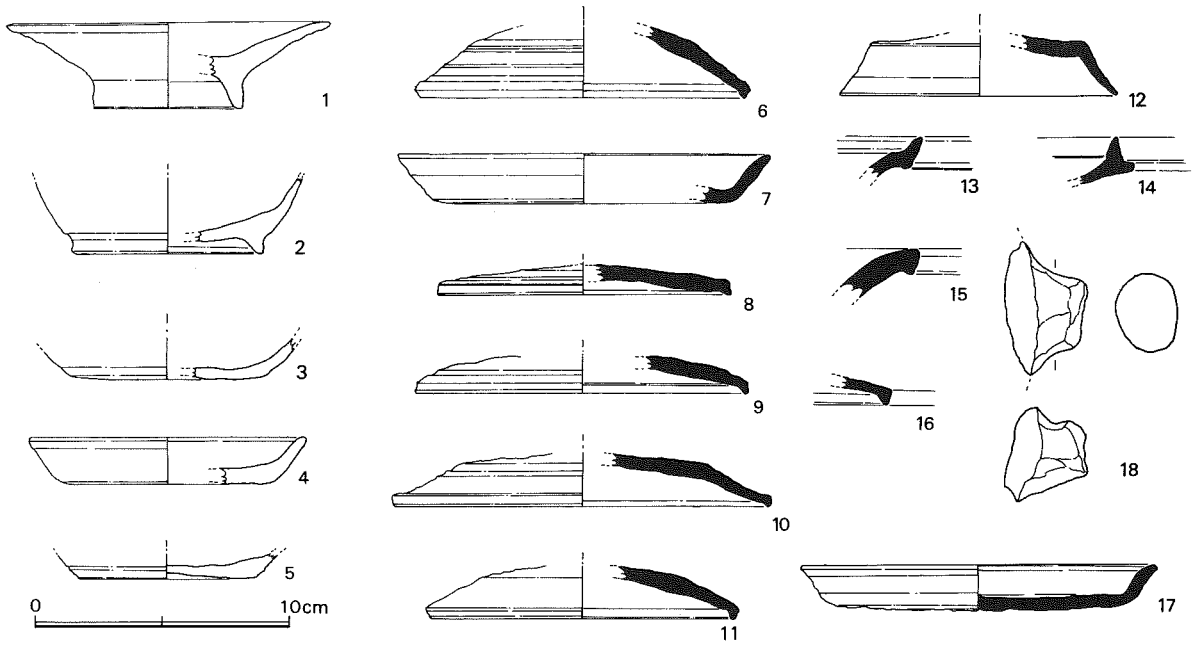


Fig. 21　ＴＰ14　２・３層出土土器実測図（１/３）

整形痕が残る。口縁端部はにぶい稜をなし，口縁部がやや膨らみをもつ。暗灰色を呈する。**7**は，底部から丸味をもって立ちあがり体部中位より外反する。口縁端部丸くおさめる。**8**は，天井部から平坦に口縁部まで移行し，口縁部を折りまげ端部が外反する。色調は，灰色を呈する。**9**は，天井部にヘラ調整痕が認められ，体部よりやや屈曲し口縁部を折りまげ端部が外反する。**10**は，平坦な天井部より体部で屈曲し，口縁部を若干折りまげる。端部はにぶい稜をなす。口縁部は熱によって変形している。**11**は，比較的丸味をもった天井部から体部でやや屈曲し，口縁部を折りまげる。口縁端部に丸味をもつ。色調は，暗灰色を呈する。**12**は，骨蔵器[註1]の蓋が考えられ，天井部から傾斜し体部で大きく屈曲し，口縁部へ外反して延びる。口縁端部は尖りぎみである。**13**は，口縁部を大きく外反させ頸部との境に稜をもつ。口縁端部を短く立てる。須恵器の瓶であろう。**14**は，杯身の受部にあたる。**15**は，口縁部より大きく外反し下端部に稜を有する。須恵器の甕形土器である。**16**は，口縁部で，折りまげ，断面三角形を呈する。蓋の小片である。**17**は，右回りのロクロ引きにより成形される。底部端に丸味をもって立ちあがり口縁部で外反する。**18**は，把手の欠損品で指による成形痕が残る。

註１　渋谷忠章・上野精志　「第７巻墳墓・九州」『新版仏教考古学講座〈全７巻〉』　雄山閣出版株式会社　1984

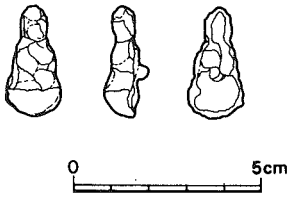


Fig. 22　ＴＰ14
２層出土銅製仏像（１/２）

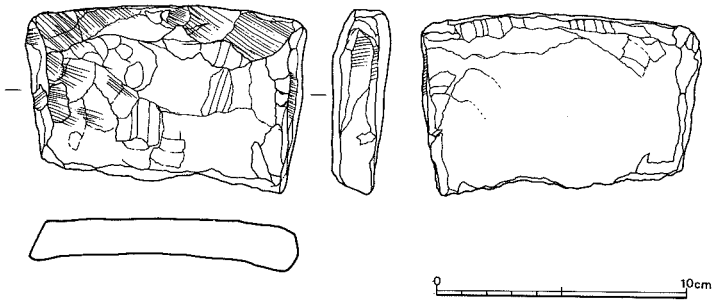


Fig. 23　ＴＰ14　２層出土滑石製品（１/３）

その他の出土遺物

Fig. 22は２層から出土した。銅製の仏像である。表面が摩滅しているため特長が良く分からない。高さは３cm，幅1.5cm，厚さ１cmで背面に突起が見られる。掛仏用のためのものか，光背との連結用突起であろう。

Fig. 23は滑石製品である。一部にススが付着していることから石鍋を転用したものであろう。未製品と思われる。用途不明である。

ＴＰ15区（Fig. 24）

ＳＢ１を中心として東側に設定したトレンチである。土層の堆積は薄く，20cm程で地山に至る部分もある。遺構としては，東端に溝状遺構（ＳＤ７）が確認された。撹乱が激しいが，推定幅は２m，深さは70cm程である。中央部には幅2.5mの瓦溜がある。中から軒丸瓦が出土した。西側には近世の土壙（ＳＫ１）がある。全体的に撹乱気味である。

瓦溜（Fig. 25）

調査した範囲では，38kgの瓦が出土したが，更に北側に延びているため全体は不明。瓦の堆積は薄く，一段か二段程度である。瓦の分布範囲もほぼ２m四方に納まる程度である。

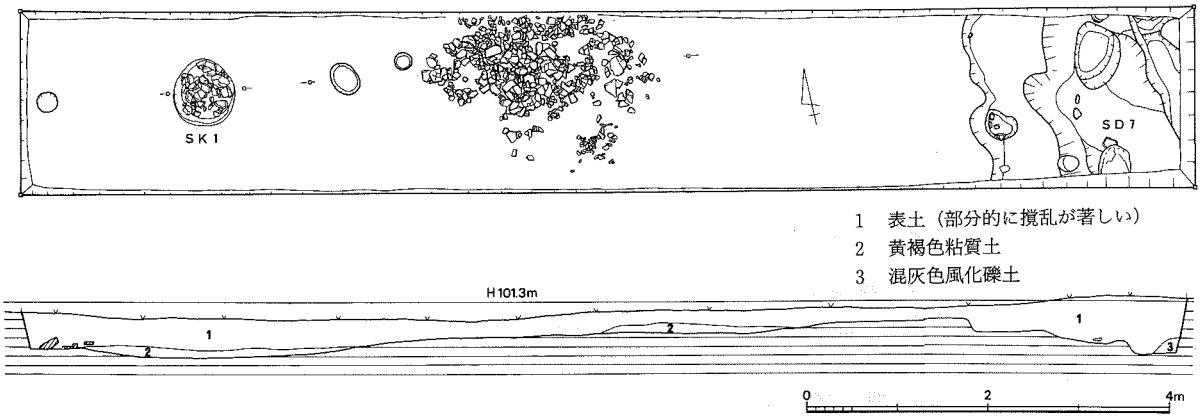


Fig. 24　ＴＰ15（ＳＤ７・ＳＫ１・瓦溜）実測図（１/80）

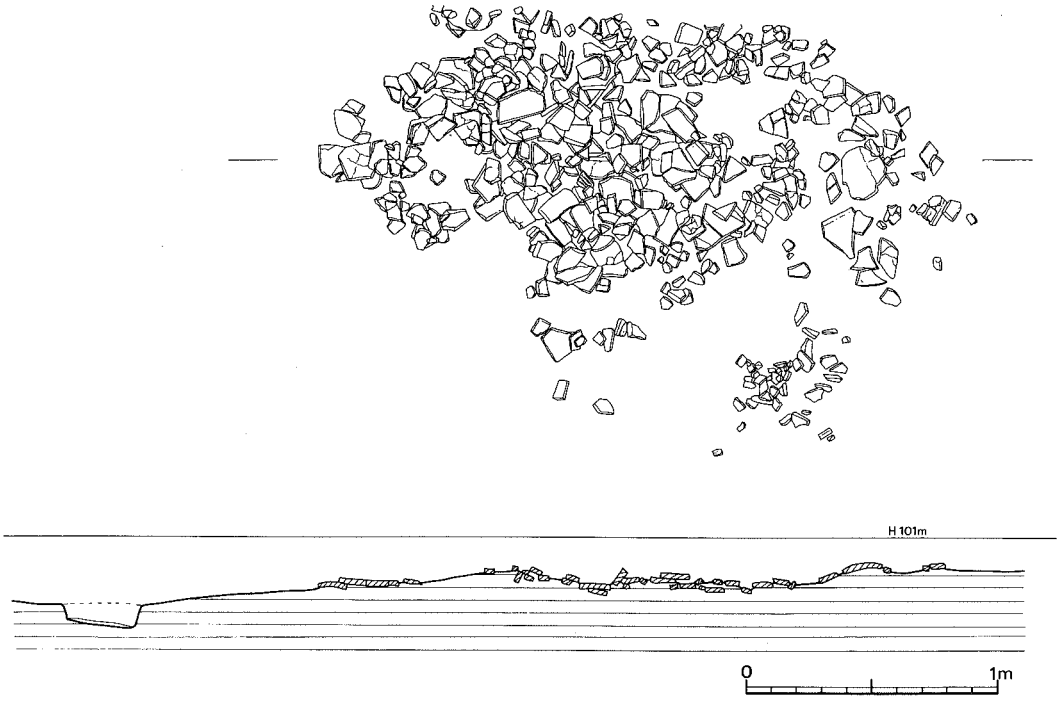


Fig. 25　ＴＰ15瓦溜実測図（１/30）

ＴＰ15瓦溜出土軒丸瓦(Fig.26)

外区外縁部を欠損するが，ほぼ全容が分かる資料である。灰白色で，焼成は甘い。胎土は比較的精選されている。中房には１＋６の蓮子を配し，内区には複弁八弁蓮華文を施す。外区内縁の珠文は24個であろう。

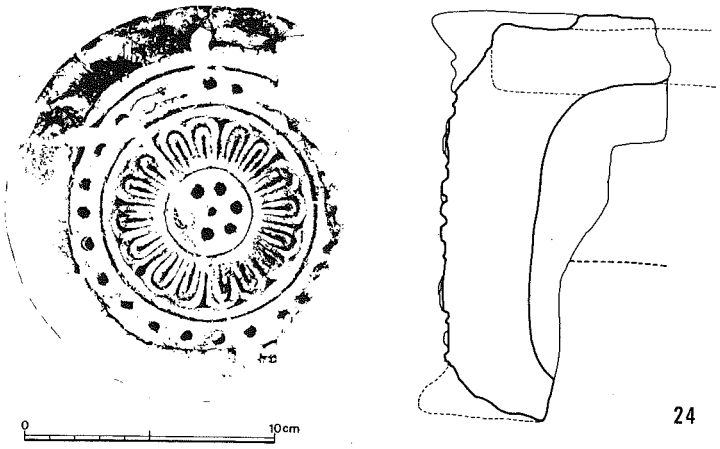


Fig. 26　ＴＰ15瓦溜出土軒丸瓦実測図（１/３）

裏面の調整痕は摩滅のためはっきりしないが，下半部には幅1.8cmの凸帯が半周している。丸瓦の接合にあたっては，裏面の瓦当外周よりやや内側に半円形の溝を掘って，そこに丸瓦を差し込んだものと思われる。所謂「一本造り」の可能性も考えられるが，瓦当面裏面に布目痕が観察されないことからも，通有な接合技法であろう。

ＴＰ15瓦溜出土平瓦（Fig. 27）

凸面にカキ目状調整痕を持つ平瓦である。灰褐色で焼成堅緻である。凹面には縦方向の糸切痕が顕著である。側縁は凸面側に大きな面取りを行うが，端縁はそのまま放置する。

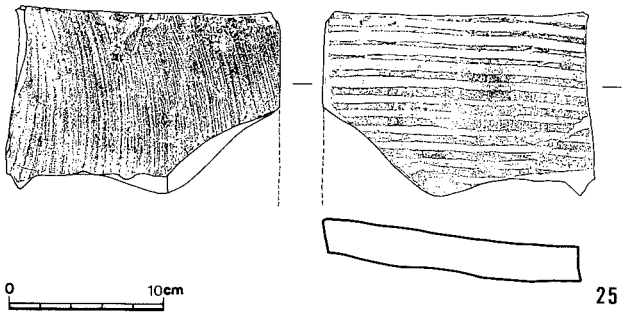


Fig. 27　ＴＰ15瓦溜出土平瓦実測図（１/５）

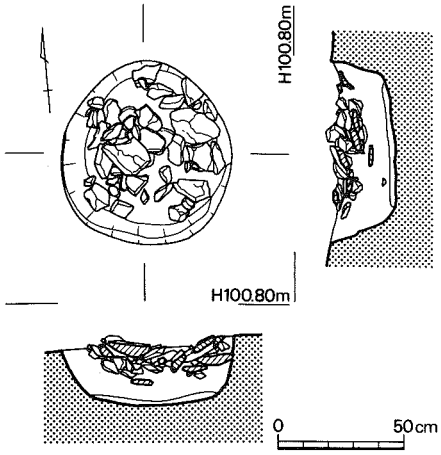


Fig. 28　ＴＰ15（ＳＫ１）実測図（１/30）

ＳＫ１実測図（Fig. 28）

ＴＰ15西側にあった円形土壙である。直径は略70cmで，25cmの深さを持つ。中には礫が充塡しているが，全て浮いた状態である。近世に属する土壙である。

ＳＫ１出土土器実測図（Fig. 29）

1 は近世の青磁鉢である。**2** は天井部中央部に小さな擬宝珠を付し，平坦な天井部から体部で屈曲し口縁部を折り曲げる。口縁端部は外反する。

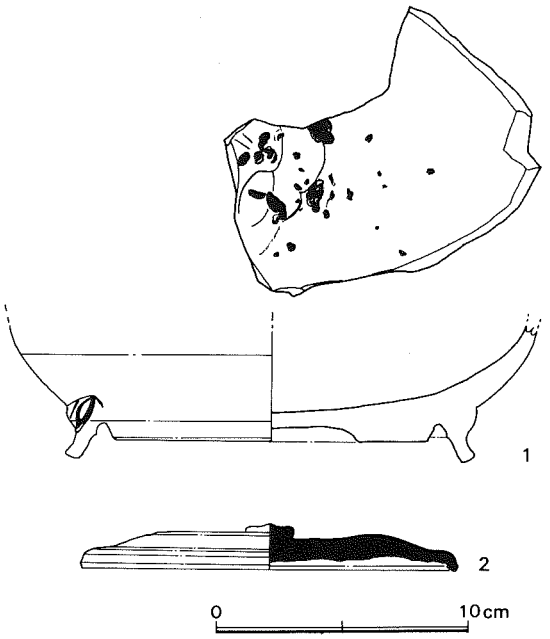


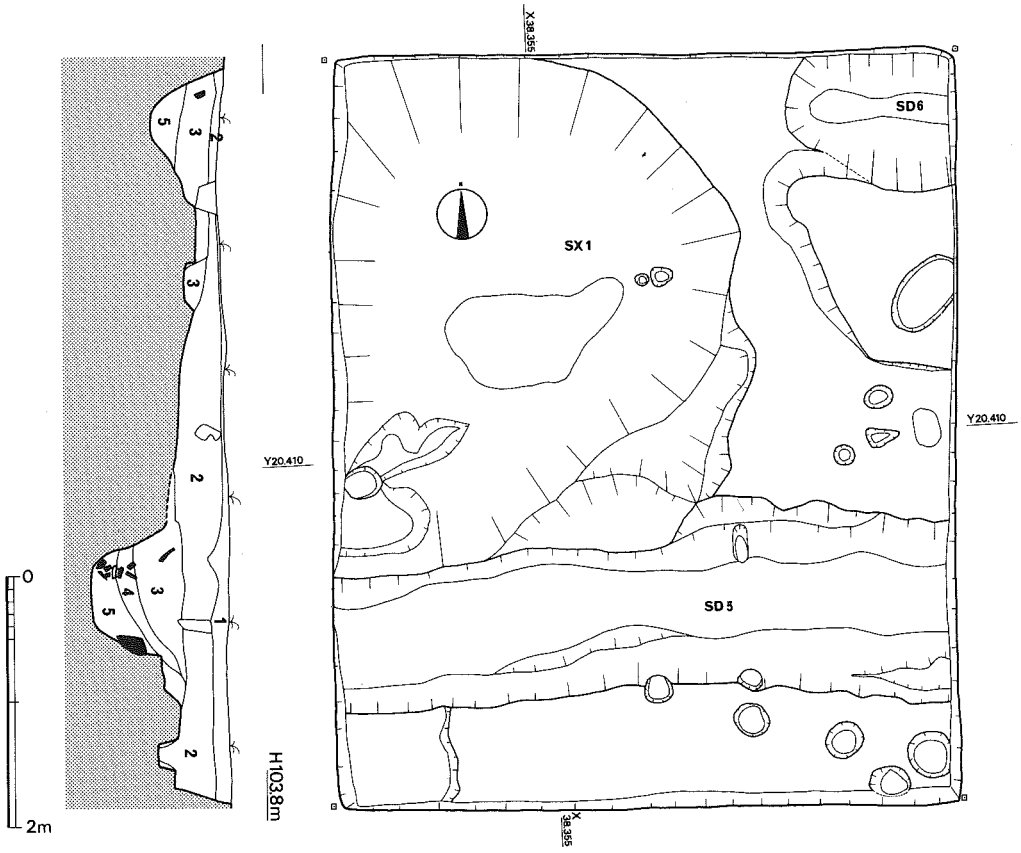
Fig. 29　ＴＰ15ＳＫ１出土土器実測図（１/３）

ＴＰ16区（Fig. 6・30）

一段高くなった標高103.5mの地点に設定したトレンチである。最近まで廃屋があった場所で，宅地にするため既に50cmから70cm程は削平されている。遺構としては，トレンチをほぼ東西に走る断面U字の溝（ＳＤ５・６）が２本と大きな不定形な落ち込み（ＳＸ１）を確認した。

ＳＤ５ は幅１m，深さ70cmでU字形をなす。溝内埋土には瓦片や土器片を若干含んでいる。**ＳＤ６** はトレンチ北側で検出した溝であるが，長さが１m程で西端になる。幅は１mで深さは40cmしかない。

ＳＸ１ は黒灰色の土が充塡した不明土壙である。この中には全く遺物が見当たらないため時期も性格も決定出来ない。



1　表土　　4　淡赤褐色土（粘性なし）
2　明茶褐色土　　5　淡茶褐色土（3と比較してやや粘性がある）
3　黄茶褐色土（さらさらしており粘性が無い）

Fig. 30　ＴＰ16（ＳＸ１・ＳＤ５・ＳＤ６）実測図（1/60）

ＳＤ５出土土器実測図（Fig. 31）

1 は須恵器の蓋。つまみ部の宝珠形が **3** と比較してやや尖りぎみであり，一型式前の段階と思われる。8世紀中葉頃であろうか。**2** も蓋で端部が下方へ短く屈曲し，先端はやや丸みを持った稜をなす。**3** も蓋であるが，端部で段を成し，下方へ短くのびる。3点のなかで最も新しい型式と思われ8世紀後半頃であろう。

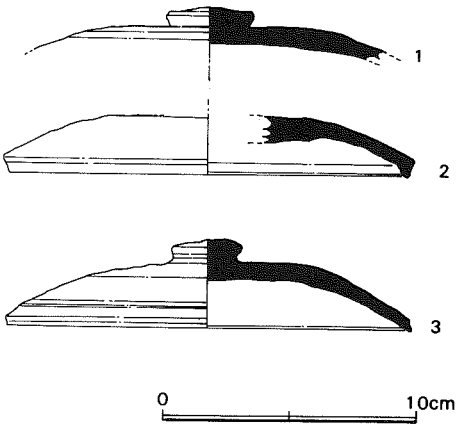


Fig. 31　ＴＰ16・ＳＤ５出土土器実測図（1/3）

ＳＤ６出土土器実測図（Fig. 32）

1 は土師器椀で，低い高台に内端部で接地し外端面が上がり気味である。底部から屈曲し浅い稜をなして体部へ移行する。色調は，内面が淡黄色，外面が淡赤褐色を呈する。

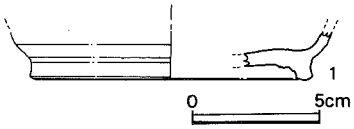


Fig. 32　ＴＰ24・ＳＤ６出土土器実測図（1/3）

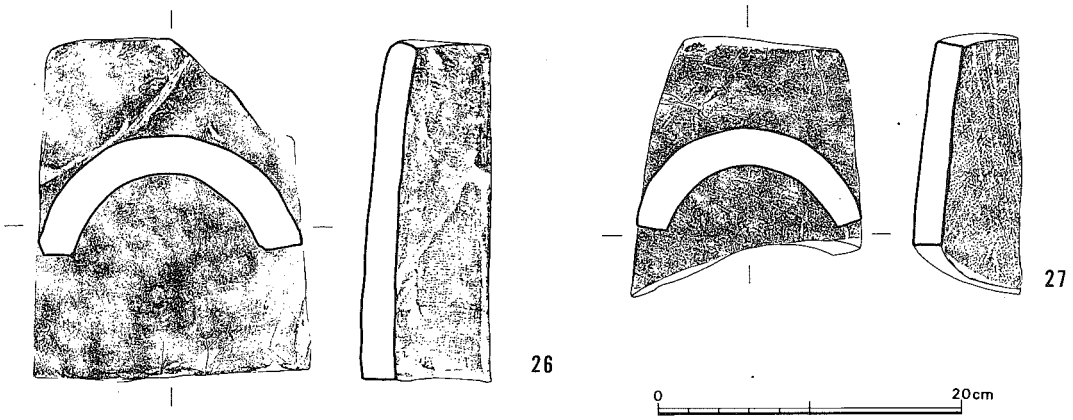


Fig. 33　ＴＰ16・ＳＤ５出土瓦実測図（１/５）

ＳＤ５出土瓦実測図（Fig. 33）

共に溝内出土の丸瓦である。

26は灰褐色をなす。焼成は良好である。凹面に粘土の継ぎ目を認める。凸面はヘラによるヨコナデ調整を行う。側縁は両面から小さな面取りを行う。**27**は赤褐色を呈する。焼成は甘い。側縁は特に面取りはしない。

ＴＰ16出土瓦実測図（Fig.34）

溝上部から出土した瓦である。共に凸面にカキ目調整痕を持つ。**28**は赤褐色で焼成は良好である。桶巻作りで，幅3.7cmの模骨痕が見られる。凸面調整原体は幅9.8cmで，８本の櫛歯を持つ。側縁は凸面部に僅かな面取りを施す。

29も同様な特長を持つ平瓦である。凸面調整は幅7.1cm，６本の櫛歯を持つ原体で行う。側縁はやはり，凸面部を面取りする。赤褐色で焼成は甘い。

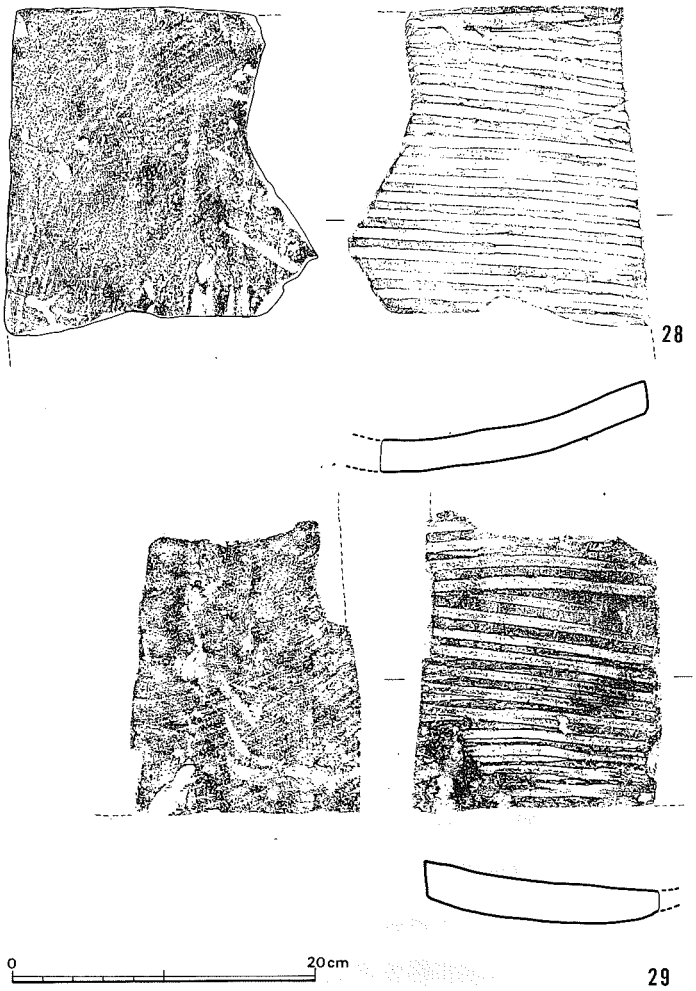


Fig. 34　ＴＰ16出土瓦実測図（１/５）

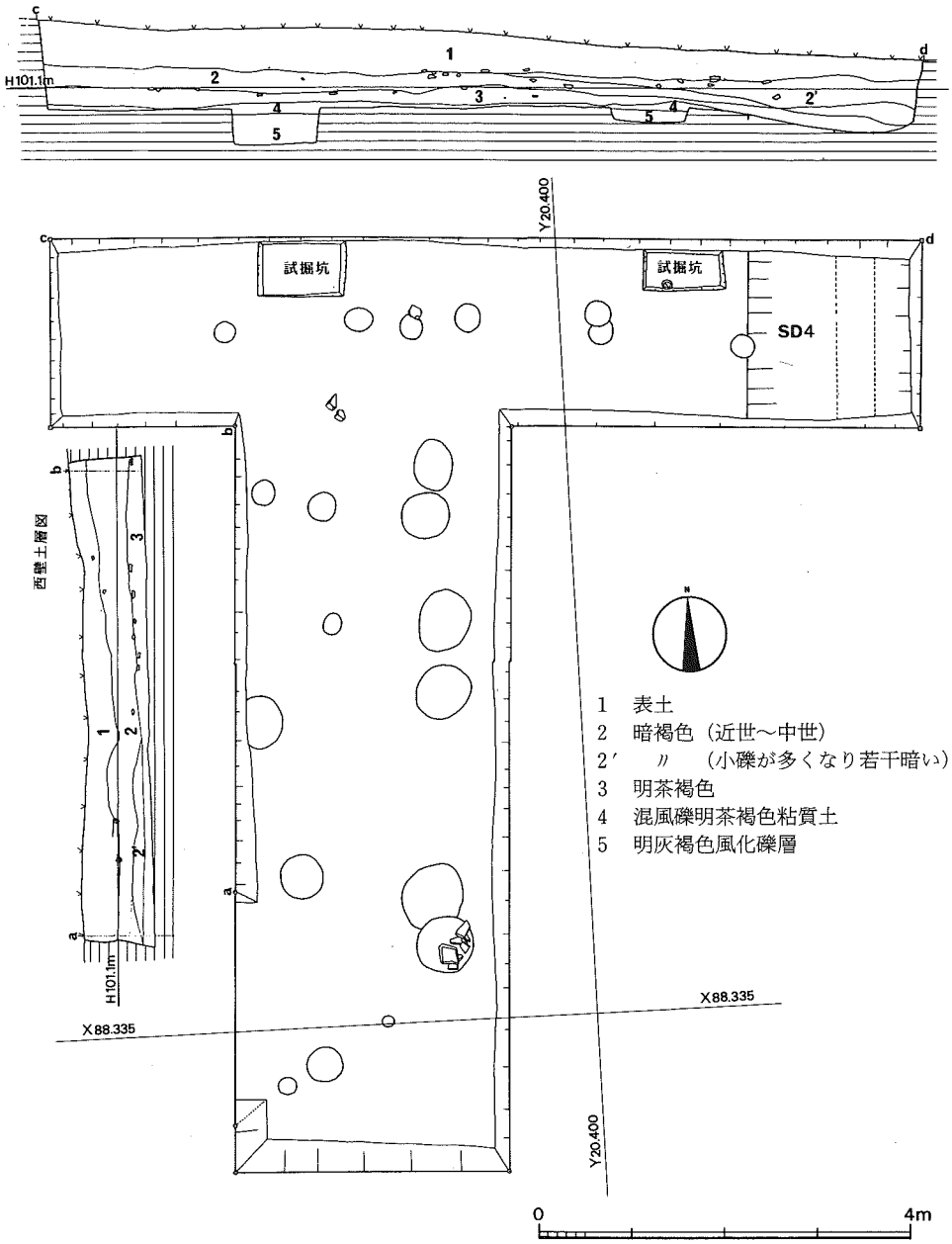


Fig. 35 ＴＰ17・ＴＰ18平面実測図（1/80）

ＴＰ17・18区（Fig. 35）

ＳＢ１の北側に設置したトレンチである。ＴＰ17は２×10m，ＴＰ18は３×８ｍで直交する。

不定形の柱穴が多く確認されたが，トレンチ内での柱穴間の脈絡がよく分からない。

４層は，地山の風化礫を含む明るい茶褐色粘質土で厚さは８cm程である。**ＳＢ１**で確認された版築に色調が似ており，一種の貼り床と思われる。

ＴＰ17の東側隅には溝が東西に走る。幅は不明であるが，深さは30cm程しかない。

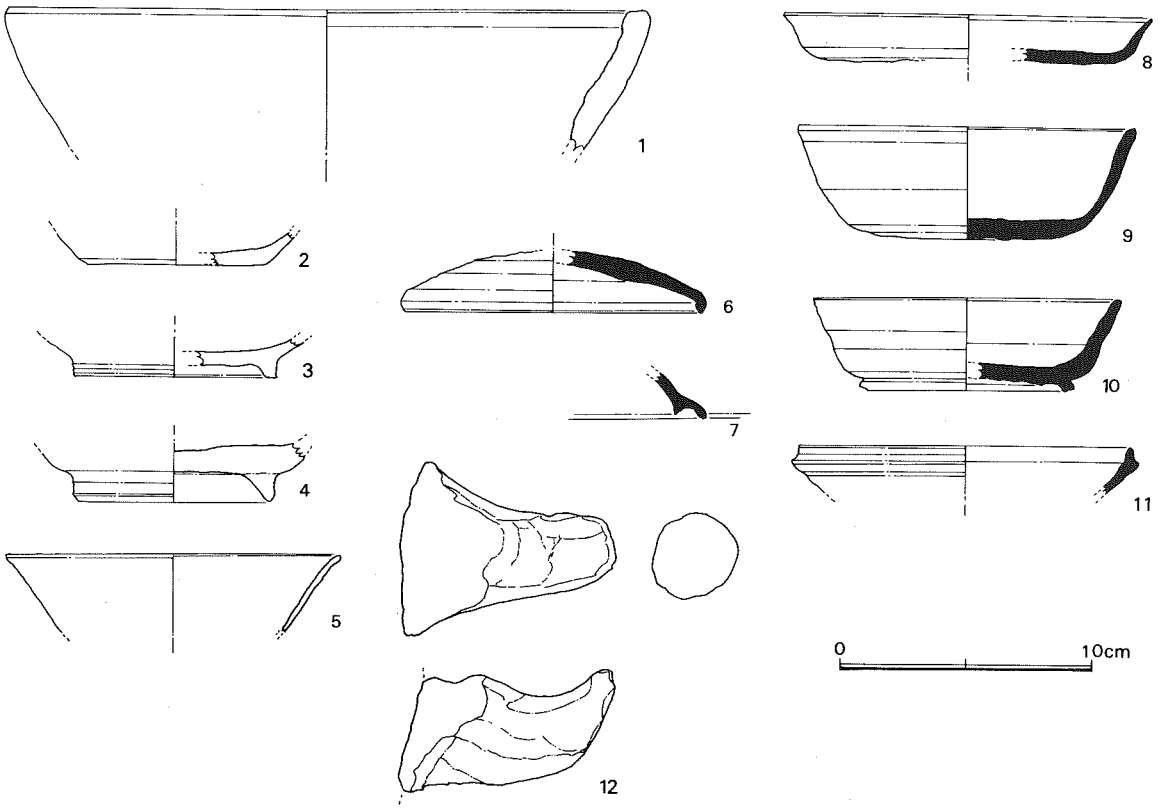


Fig. 36　ＴＰ17　２・３層出土土器実測図（１/３）

ＴＰ17区２・３層出土土器（Fig. 36）

1 は，鉢形土器の口縁部で，外面は暗灰白色を呈し内面は淡黄赤褐色を呈する。口縁端部が平坦となる。**2** は，土師器で平坦な底部より体部の境に稜をなして立ちあがる。色調は，明黄褐色を呈する。**3** は，椀形の土師器と思われる。低い高台は，両端で接地し，直立した状態より体部へ移行する。**4** は，貼付の高台とした椀形土師器であろう。風化のため土器表面がざらつく。**5** は，緑釉陶器椀で外面に一部淡黄緑色の釉がわずかに残る。器形は，口縁部で大きく外反する。胎土の色調は，にぶい灰白色を呈する。**6** は，天井部の断面に厚みをもち，口縁部で折りまげ口縁端部内傾する。**7** は，内面に比較的高いかえりを有する蓋杯である。７世紀後半の時期が想定される。**8** は，底部より丸味をもって立ちあがり，体部中位より外反する。口縁端部は比較的薄い。色調は，暗灰黒色を呈する。**9** は，底部ロクロ引きの後ヘラ切り離しを行った痕跡を留める。器形は，底部より湾曲して立ちあがり，口縁部よりやや外反する。口縁端部は，丸味をもつ。内面に一部墨の付着が認められる。**10**は，高台を有する身で断面「ハ」の字形をなし内端面で接地する。体部下より丸味をもって立ちあがり中位よりやや屈曲して外方へ延びる。口縁端部が丸味を呈する。**11**は，受部をもつ杯身である。立ちあがり受部とともに短い。色調は，焼成不良のため淡灰黄色を呈する。時期は，７世紀中葉～後半頃にあたる。**12**は，把手の部分である。

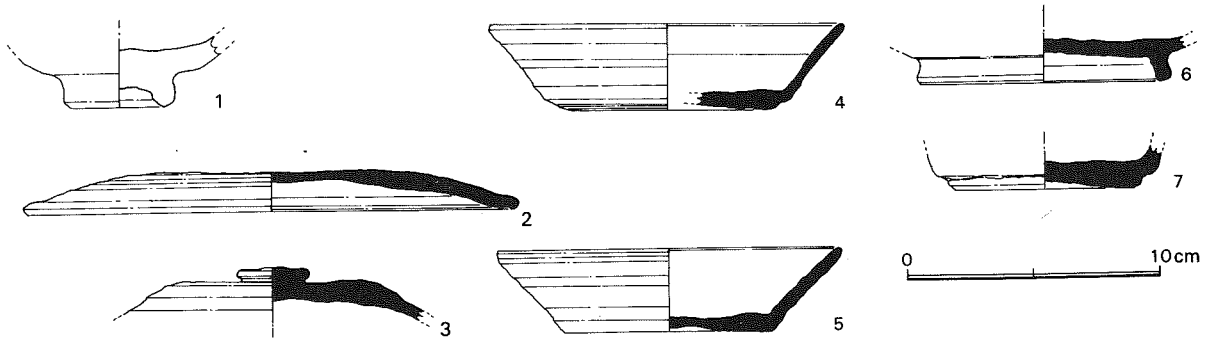


Fig. 37　ＴＰ18　２・３層出土土器実測図（１/３）

ＴＰ18区２・３層出土土器（Fig. 37）

1 は，青磁碗類の高台部で，釉は外面高台の内底見込みにまで施釉されている。色調は，青味がかった緑色を呈する。**2** は，出土遺物中もっとも大型の須恵器蓋で，平坦な天井部から体部でやや屈曲し口縁部を折り曲げ，口縁端部は，内傾して丸味をもつ。焼成不良のため淡灰黄色を呈する。天井部の中央に外方から中心に向かって，櫛状の工具で整形を施している。**3** は，中央部に扁平な宝珠状のつまみを有する須恵器蓋で，体部以下を欠く。焼成不良のため淡黄灰色を呈する。**4** は，平坦な底部より体部の境に膨らみをもって立ちあがり，外反して上方へ延びる。口縁端部は丸くおさめる。焼成不良のためか，灰黄色を呈する。**5** は，底部と体部との境に稜をなしそのまま外反して延びる。口縁部に丸味をもつ。**6** は，比較的高い高台を有する須恵器の杯身でやや丸味をもって内端で接地する。焼成良好で外面暗黒色を呈する。

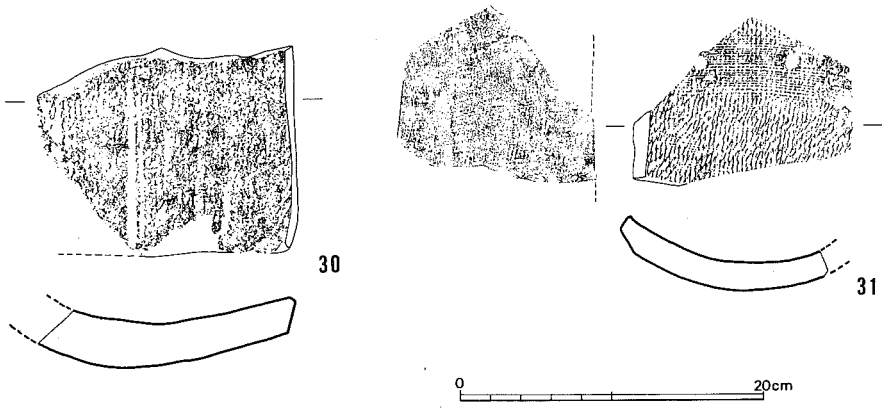


Fig. 38　ＴＰ17　２層出土瓦実測図（１/５）

ＴＰ17　２層出土瓦実測図（Fig. 38）

30は凸面に縄目の叩きを持つ平瓦である。灰褐色でやや軟質である。胎土に石英粒を含む。叩きの原体は幅4.7cmである。側縁は凸面を面取りしている。**31**も縄目を凸面に持つ資料である。灰白色で焼成は良好である。胎土は精選されている。凹面の布目の数は28×43で非常に密である。凸面は縄目の叩きの上にハケ目状の擦過痕が見られる。この種の調整は殆ど見かけない。

ＴＰ17　３層出土石製品（Fig. 39）

滑石製の石製品である。形状は楕円形を呈し，長さ10cm，幅7.5cm，厚さ1.5cm，重量は200ｇを測る。

側面には若干ゆるいカーブを持ち，上部に径１cmの孔が穿たれている。

カイロではないかとの教示を得た[註1]。

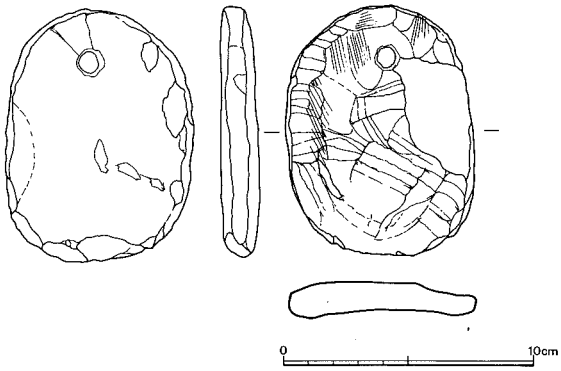


Fig. 39　ＴＰ17　２層出土滑石製品実測図（１/３）

ＴＰ18　２層出土軒丸瓦（Fig. 40）

32は灰白色で，焼成は甘く，軟質である。胎土には小石英粒を含む。

１/５個体ほどしか残っていないが，外区外縁には山形の凸線鋸歯文，内縁には３個の珠文が見られる。

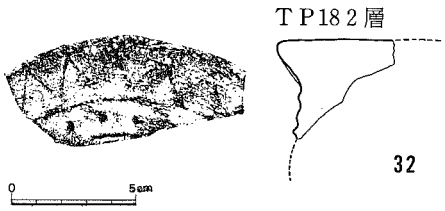


Fig. 40　ＴＰ18　２層出土軒丸瓦実測図③（１/３）

ＴＰ18　２層出土瓦（Fig. 41）

凸面に縄目の叩きを持つ平瓦である。明赤褐色で，焼成は甘い。長さは完形で，32cmである。全体としては３/４個体ほど残っている資料で，重量は1.5kg程ある。完形品は２kg位であろうか。桶巻作りで，3.7cmの模骨痕が観察される。側縁，端縁ともに凸面部を大きく面取りしている。叩きの原体は，右撚りで糸の間隔が２mm，幅６cmのものを使用している。長さは不明である。

ＴＰ18　３層出土瓦（Fig. 42）

34は茶褐色で焼成良好である。凸面はハケ目状擦過痕の上に深いカキ目を施す。凹面は糸切り痕が顕著で布目痕が殆ど見えない。側縁は凹面のみ小さく面取りを行う。

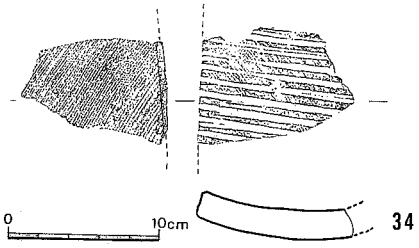


Fig. 42　ＴＰ18　３層出土瓦実測図（１/３）

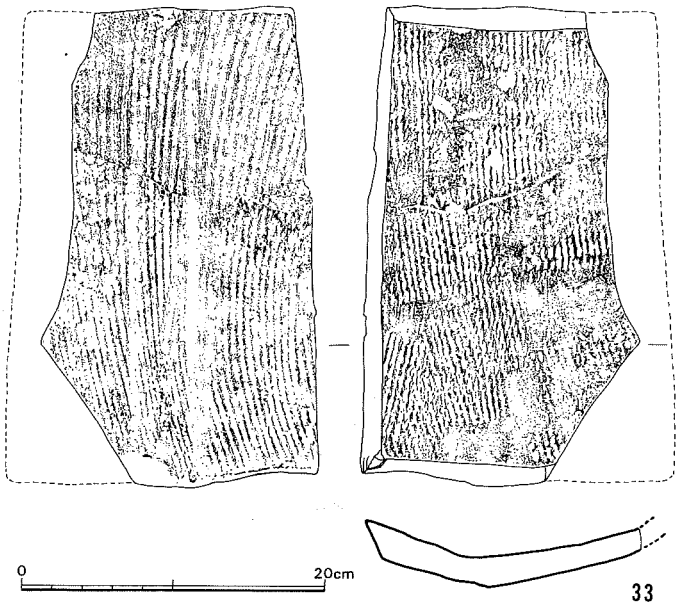


Fig. 41　ＴＰ18　２層出土瓦実測図（１/５）

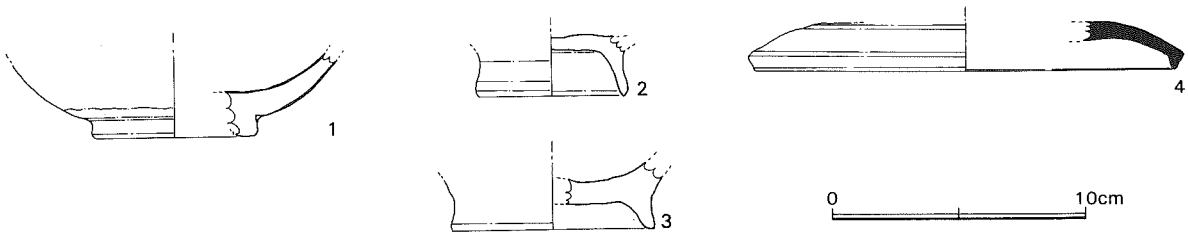


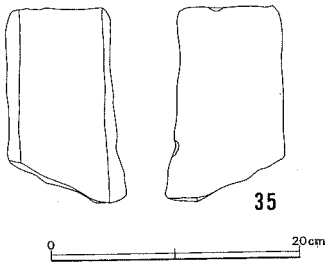
Fig. 43　ＴＰ19　２層出土土器（1/3）

ＴＰ19　２層出土土器（Fig. 43）

1 は，龍泉窯系青磁椀（Ｉ－１類）で内外面ともに無文のものである。高台断面は，四角形をなし高台部畳付は露胎である。**2** は，土師器の高台部である。上部から下部へ外方へ延びた比較的高い高台をなす。色調は，内外面とも淡黄褐色を呈する。**3** も，土師器の椀で高台を貼付けて **2** より断面厚めになっている。色調は，**2** と同様である。**4** は，須恵器の蓋である。口縁部を折りまげ端部が内傾する。色調は，内外面淡灰色を呈する。

ＴＰ19　２層出土熨斗瓦（Fig. 44）

35は熨斗瓦である。丸瓦を半截して転用する。色調は暗黄褐色で胎土に石英粒を含む。焼成は良い。凹面の布目は粗い。凸面調整は不明である。側面の凸面側には破面がそのまま残っている。



註１　奈良国立文化財研究所　宮本長二郎氏御教示

Fig. 44　ＴＰ19２層出土熨斗瓦実測図（1/3）

三　3次調査

1次，2次調査において検出した各遺構の内容を更に確認するためと，他の遺構を探す目的の調査である。

これまでの調査で，まず寺域の北側についてはＳＤ３またはＳＤ４が，また東側についてはＳＤ７のラインが考えられた。建物については版築基壇のＳＢ１とその西側にあるＳＢ２が検出されているが，この建物の相互関係については，方位とレベルについて差異が感じられた。このため，ＴＰ20とＴＰ21はＳＢ２の延長とＳＢ１との関係を見るため，その南北に設置した。

ＴＰ23は寺域の南限を見るため，そしてＴＰ24は寺域東限の延長を見るために南側タバコ畑に設定した。ＴＰ22とＴＰ26はＳＤ５の西側延長を，ＴＰ25とＴＰ27はＳＤ５とＳＤ６の延長を確認するために，一段標高の高い北側山林に設定したトレンチである。また寺域の西限を見るため忠魂碑の南側にＴＰ28を設定した。(Fig. 6)

ＳＢ２ (Fig. 6・Fig. 49)

ＴＰ14においてほぼ東西に延びる柱穴列を検出し，それをＳＢ２と呼称したが，その延長を見るためにトレンチの東西を拡張した。

その結果，当初の柱穴列の南側1.6mに同じ方位の柱穴列を確認した。柱穴内覆土の色調から見ても，ＳＢ２と同じ遺構とみて良い。この柱穴列は更に東西に延びる可能性がある。

ＳＢ３ (Fig. 6・Fig. 49)

ＳＢ２の1.3m北側にほぼ方位を一にした柱穴列である。柱間は2ｍで6間まで確認出来る。柱穴内覆土には地山である灰青色の風化礫を含み斑状の粘質土である。柱穴の大きさは，径が60cm～80cm前後で深さは最も深い柱穴で70cm程である。数ヵ所の柱穴は後世の柱穴によって切られている。

ＳＢ２の柱穴が3層上面で輪郭を確認できたのに対して，このＳＢ３は4層上面でその輪郭がとらえられたところから，ＳＢ２より一段階古い遺構であることは確実である。ただ，3層は僅か10cm程の厚みでしかないことから，その時間差は僅かであるものと思われるが，壱岐嶋分寺の創建時の遺構であることは間違いなかろう。柱穴内からの遺物は瓦片が出土したのみで，時期を示す土器は無い。

ＳＢ４ (Fig. 49)

ＴＰ21の北西で検出した柱穴列である。1.8m間隔で3間が確認出来る。柱穴の大きさは，径40cm前後で深さは30cmほどである。瓦溜を切っていることから，時期的にそれ以降の建物である。

ＳＢ５ (Fig. 49)

ＴＰ21の最も北側に位置する柱穴列である。

柱穴の間隔は2.1mと1.6mで2間が確認出来る。柱穴の大きさは，小さいものは45cm，大きいものは65cmを測る。深さは何れも20cm程である。ピット内から中世の壺底部が出土したことから，時期的には13世紀まで下る。やはり，瓦溜を切って掘られていることから，瓦溜の下限が推定出来る。

ＳＢ５出土土器（Fig. 45）

1は，須恵質の陶器でロクロ引きによって成形しており，内面の中央部が盛り上がる。底部は輪状の高台をなす。胎土は，緻密な粘土を使用し，外面は淡黄灰色をなし内面は淡黄色を呈する。輪入品と思われる。時期は13世紀中葉～13世紀末と思われる。

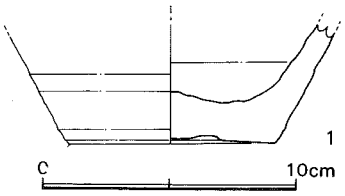


Fig. 45　ＳＢ５出土土器実測図

ＳＢ５出土玉縁丸瓦（Fig. 46）

36は色調は灰色で，焼成は甘く軟質である。胎土には粗い砂粒と石英を含む。全体的に摩滅しているため調整痕が不明であるが，凸面には縄目，凹面には目の粗い布目痕が観察される。

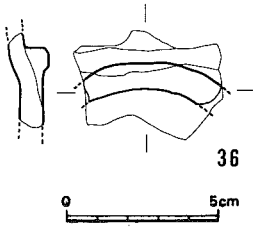


Fig. 46　ＳＢ５出土玉縁丸瓦（1/5）

ＴＰ21東瓦溜（Fig. 4）

ＴＰ21には２か所の瓦溜が検出されたが，東側の遺構は西側のものに比べて規模が小さい。トレンチの更に北側に延びているが，判明している限りでは，幅1.7m程度の集積である。この遺構から出土した瓦の量は，丸瓦９kg，平瓦10kg程度である。

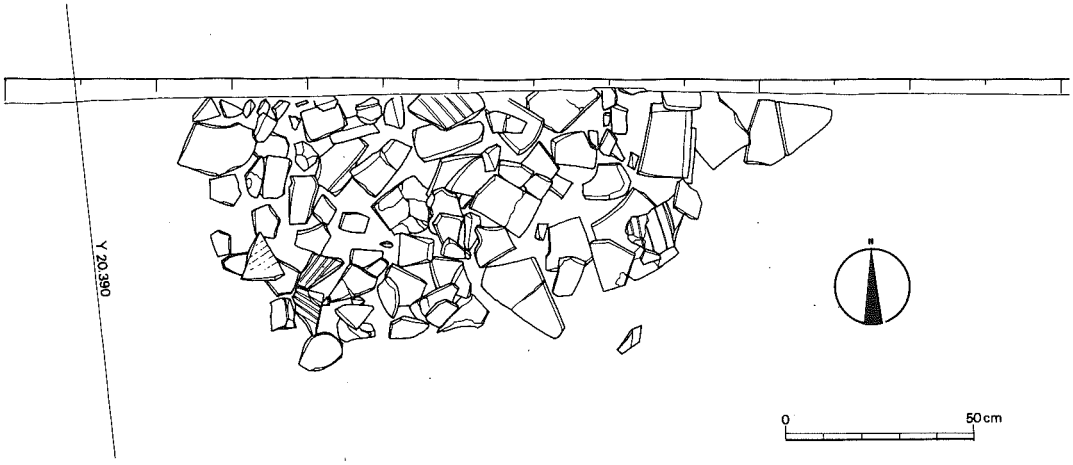


Fig. 48　ＴＰ21東瓦溜実測図（1/20）

ＴＰ20　３層出土土器（Fig. 48・49）

３層切り込みの Pit.10 から出土した須恵器である。底部のロクロ痕を丁寧にナデ，底部から体部の立ちあがりやや膨らむが体部の中位より外反する。口縁端部はやや角張った丸みをなす。色調は内外面ともに淡灰黄色をなす。

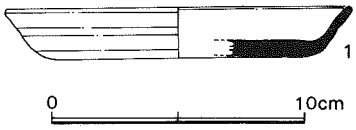


Fig. 48　ＴＰ20　pit.10出土土器（1/3）

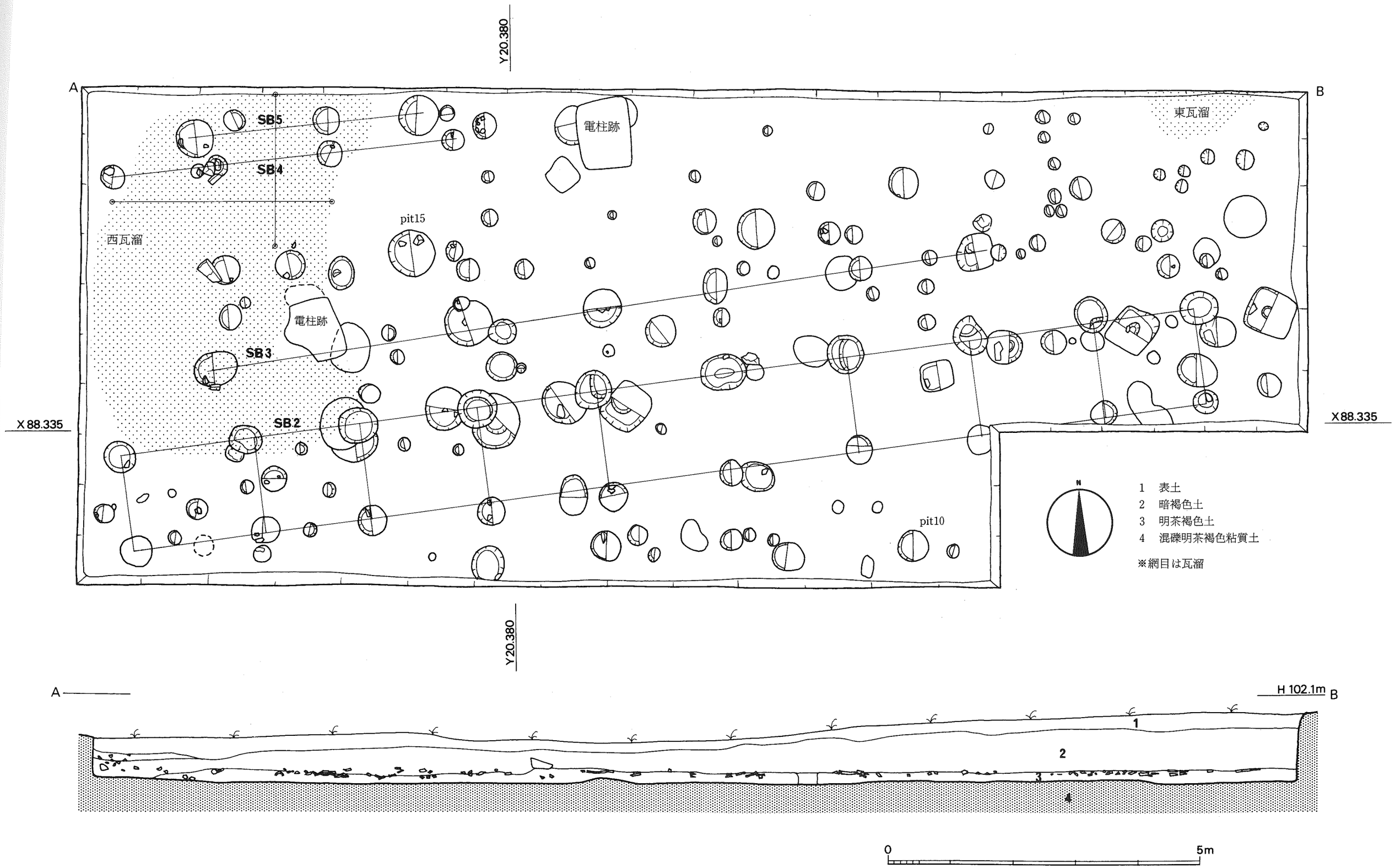


Fig. 45 ＴＰ14･20･21平面図及びＴＰ21北壁実測図（1/60）

ＴＰ20　3層出土土器（Fig. 50）

3層の西側瓦溜から出土した。**1**，**2**共に土師器の杯である。**1**は，底部にやや丸みをもって体部へ立ち上がる。風化が著しく成形は不明瞭であるが，ロクロ切り離しが僅かに認められる。色調は淡白黄色を呈している。**2**は，底部からの立ち上がりに膨らみをもち，内湾ぎみに口縁部に移行する。口縁端部やや尖りぎみである。色調は，内外面ともに黄赤褐色を呈する。

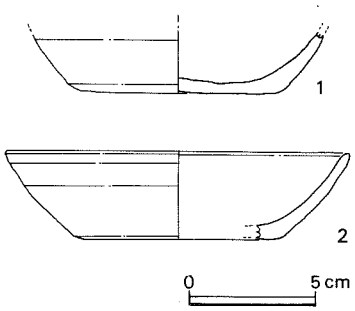


Fig. 50　ＴＰ20　3層瓦溜出土土器実測図（1/3）

ＴＰ21　pit. 15出土土器（Fig. 51）

1は，3層面から切り込んだＴＰ21の Pit.15 内から出土した。底部がやや下がりぎみに高台を貼付する。

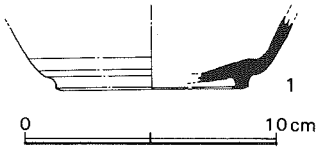


Fig. 51　ＴＰ21　pit. 15出土土器（1/3）

ＴＰ21　3層出土土器（Fig. 52）

1は，口縁部をほぼ直に折りまげ断面三角形の口縁端部をなす。器面は灰色の色調をなす。**2**は，内面全体が接地した平坦な蓋である。天井部に厚みがあり口縁端部はやや丸みを持つ。**3**は，口縁部から折りまげて，端部が内傾ぎみである。**4**は，体部との境近くに高台を有し，幅が広く中央部が凹んでいる。立ち上がりは，丸みをもつ。色調は，暗灰色を呈する。**5**は，杯身の口縁部片で，口縁部で外反し，端部は丸くおさめる。

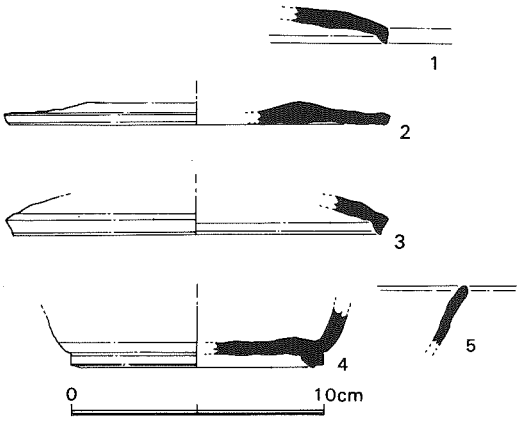


Fig. 52　ＴＰ21　3層瓦溜出土土器実測図（1/3）

ＴＰ21西瓦溜（Fig. 53・54）

この遺構から，約640kgの瓦が出土した。内訳は丸瓦が304kgで残りが平瓦となる。瓦溜は，一部を後世の柱穴によって切られているが，ＴＰ14，ＴＰ21区の西側をほぼ全面に覆っている。瓦の堆積は全体的には特に厚くはないが，一部意識して置いた感じの完形の丸瓦からなる集積が見られる。瓦溜は，更に北側に広がっているが，全容は分からない。

ＴＰ21西瓦溜出土土器①（Fig. 55）

1～**4**・**20**は，青磁片である。**1**は，同安窯系青磁椀（Ｉ－１類）に比定され器形は体部から口縁部へ内湾ぎみに延びる。内面上位に浅い沈線が２本入り，外面に細かい櫛目を内面には片彫り風の沈線文様を施している。**2**は，青磁皿類にあたるもので内面は黄白色の釉を施し，外面には高台畳付部をのぞいて，緑黄色の釉がかかる。**3**は，体部下にわずかに釉が残り，内面は輪状にカキ取っている。釉の色調は，黄緑色を呈する。高台は，直立している。胎土の質が粗悪であることから南方系の所産

Fig. 53　ＴＰ21西瓦溜（上部）実測図（１/60）

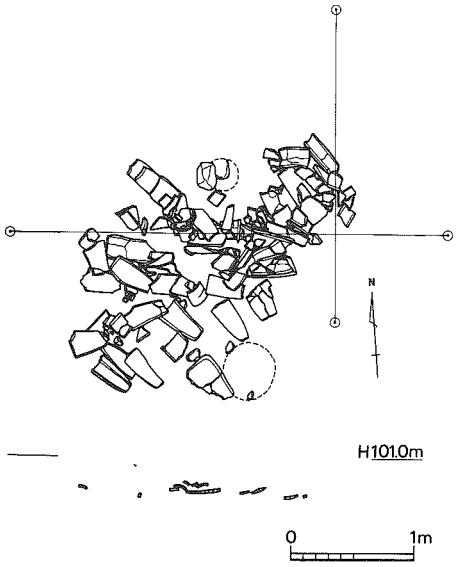


Fig. 54　ＴＰ21西瓦溜（下部）実測図（１/60）

と思われる。**4**は，白磁椀（Ⅶ類）にあたり，内面見込みに草花文を描く。器形は，低い高台から内湾ぎみに丸味をもって体部へ移行する。色調は，灰黄色を呈する。**5**は，土師器の椀と考えられ，高台径12cmを測る。高台端部にやや厚みをもつ。内外面ともに赤褐色を呈する。**6**は，土師器の皿で，底部端に厚みがありやや内湾しながら口縁部へ移行する。口縁端部は，尖りぎみで色調は内外面ともに暗黄赤褐色を呈する。時期的には８世紀後半～９世紀初頭頃であろう。**7**は，土師器椀の底部で，丸味をもって体部へ移行する。色調は赤褐色を呈する。**8**は，甕形土器で肩部から口縁部が屈曲し，口縁端部に丸味をもつ。外面に櫛目が残る。内面は，風化が進行し詳細については不明である。**9**は，須恵器の蓋の口縁部を折りまげ口縁端部がやや外方に向く。色調は，外面が暗灰黒色をなし，内面は灰色を呈している。**10**も須恵器の蓋にあたり，平坦な天井部から体部でやや屈曲する。口縁部は丸味をもって折りまげ，ほぼ直下に端部が位置する。色調は，淡灰色を呈する。**11**は，約１/２程現存し，天井部につまみを有しない。天井部は平坦となし，体部から下方へ屈曲させている。口縁端部はやや丸味をもって内傾する。**12**は，比較的器高が高い。口縁端部は明瞭な折りまげをなさず，丸味をもつ。**13**は，焼成不良のため，外面が暗茶色を呈し，内面は明灰色を呈している。ヘラ切りの底部より屈曲して立ちあがる。**14**は，小型で長円形の肩部から体部にかけて二条の沈線を付している。頸基部が狭

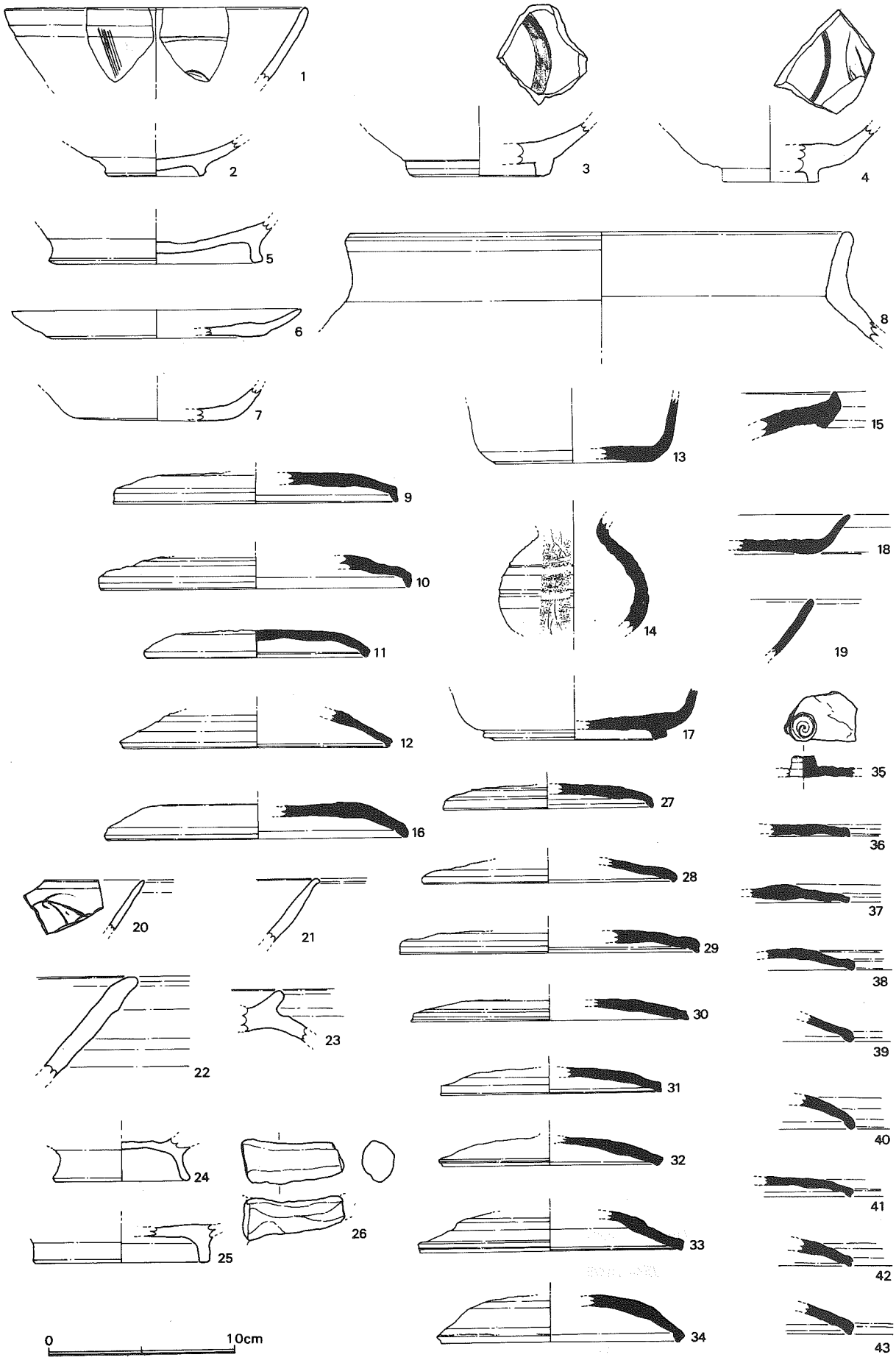


Fig. 55　ＴＰ21西瓦溜出土土器実測図①（１/３）

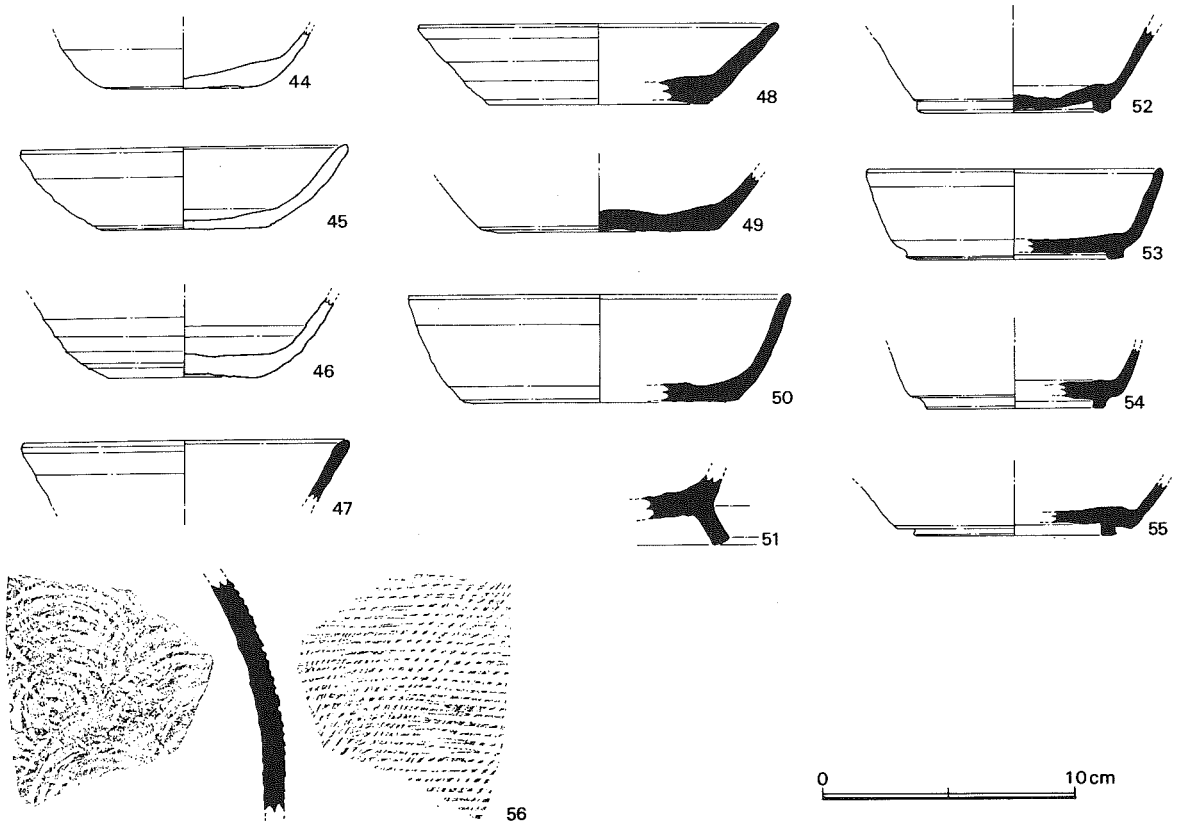


Fig. 56　ＴＰ21西瓦溜出土土器実測図②（1/3）

くなる。須恵器の瓿であろう。**15**は，甕形の須恵器で波状文を頸部外面に施す。**16**は，２・３層の中間層より出土した遺物で，平坦な天井部から体部が屈曲し，口縁部で折り端部に丸味をもつ。**17**は，高台を付した杯身で底部より丸味をもって立ちあがる。高台は，内側端部が接地する。色調は，外面が灰黒色で内面は暗灰色を呈する。**18**は，須恵器の皿である。焼成不良により色調が淡灰黄色を呈する。器形は，平坦な底部から丸味をもって立ちあがり口縁部でやや外反する。端部丸くおさめる。**19**は，須恵器杯身の口縁部片で体部より緩やかに内湾し口縁部へ延びる。端部丸くおさめる。**20**は，青磁片で３層より出土している。内面に草花文の片彫を描く。器肉薄く，口縁端部は，尖りぎみである。同安窯系青磁である。**21**は，緑釉陶器で淡黄褐色の胎土に薄く全体に緑色の釉がかかる。体部上位でやや屈曲し，端部を丸くおさめる。**22**は，鉢形土器で外面ににぶい稜がつく。器形は，口縁部で外反し，端部は丸くおさめる。色調は内外面ともに淡灰黄赤褐色を呈する。**23**は，甕形土器と思われるが，口縁上方がやや凹み端部を丸くおさめる。頸部から胴部への移行部分は丸くなる。**24**は，ロクロ成形が底部にありこれに高台を貼付ける。また高台は上方から下方へ外反し，端部丸くおさめる。土師器の椀形土器である。**25**は，ほぼ直立した高台を有する。土師器の椀形土器である。色調は，淡赤褐色を呈する。**26**は，甕形土器に付随する把手の部分で，端部を欠損する。**27**は，須恵器の蓋である。右回りのロクロ成形を行っている。天井部と体部の屈曲があまりなく，口縁部で折りまげる。端部に丸味をもって外方へ延びる。色調は，外面が暗灰黒色を呈し，内面は，灰色を呈する。**28**は，器高が**27**

より高くなり，口縁端部が短く内側へ屈曲する。**29**は，平坦な天井部より体部にかけ，屈曲し，口縁部で折りまげる。口縁端部は，にぶい稜をなす。**30**は，平坦な天井部より長めの体部がやや屈曲し口縁部との境に稜をなす。口縁端部は外方へ延びる。**31**は，小型の蓋で体部が屈曲し，口縁端部やや外方へ延びぎみである。**32**は，天井部から丸味をもって口縁部へ移行し，口縁端部やや扁平ぎみである。**33**は，天井部と体部に稜をなし，口縁端部に膨らみをもつ。断面四角形をなす。**34**は，天井部から体部が丸味をもち器高はＴＰ21の３層の西瓦溜出土遺物でもっとも高い。口縁部は内側に屈曲し端部はにぶい稜をなす。**35**は，ボタン状のつまみを有する須恵器の蓋である。**36**は，天井部から口縁部までほぼ平坦に移行し，口縁端部で屈曲し外方へ延びる。**37**は，天井部内面に火膨れ部がみられ，体部で稜をなし口縁端部が扁平となる。**38**は，天井部が平坦をなし体部から屈曲して口縁部に延びる。口縁部は丸味をもってやや外方へ延び端部がにぶい稜をなす。**39**は，口縁部に丸味をもち，内外面の色調は暗灰黒色を呈する。**40**は，**39**と同様に口縁部に丸味をもつ。**41**は，平坦な天井部から体部へ移行し，口縁部に稜をもつ。**42**は，体部から口縁部が屈曲し，口縁端部ににぶい稜をなす。**43**は，口縁部で折りまげ，口縁端部ににぶい稜がつく。焼成あまく淡灰色を呈する。

ＴＰ21西瓦溜出土土器②（Fig. 56）

44は，土師器の杯である。平坦な底部より丸味をもって立ちあがり体部でやや内湾する。**45**はやや丸味をもった底部より内湾して外方へ延びる。底部と体部の境ににぶい稜を有する。口縁端部は丸味をもつ。**46**は，ロクロ成形の底部をヘラ状のもので押えた痕跡が残る。やや上げ底の底部より丸味をもって立ちあがり，体部には成形時の稜が４本入る。色調は，内外面ともに黒色を呈している。**47**は，須恵器の杯の口縁部にあたり体部より外方へ延びている。端部を丸くおさめる。内外面の口縁部周辺に墨の付着が認められる。**48**は，須恵器の杯で底部と体部の境に浅い段がつく。立ちあがりは，やや内湾し体部中位より外方へひらく。色調は，淡灰色を呈する。**49**は，ロクロ成形を行い底部端に浅い段がつき，やや膨らみをもって立ちあがる。**50**は，ロクロ成形で，底部端は丸味をもって立ちあがり内湾ぎみの体部から口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。**51**は，長い高台を有し，上部から下部へ外反する。色調は，淡灰色で焼きがあまい。**52**は，すぼまりぎみの底部端に高台を有す。また，立ちあがりが直線的である。**53**は，低い高台を有し丸味をもって立ちあがり，体部上位でやや屈曲する。口縁端部は丸味をもつ。**54**は，高台がやや内側にあり，底部からの立ちあがり稜をなして立ちあがる。**55**も高台が内側にあり，底部から稜をなして直線的に立ちあがる。**56**は，須恵器の甕の胴部片である。外面には，平行条線文叩きを行い内面は青海波文の当て板痕がつく。

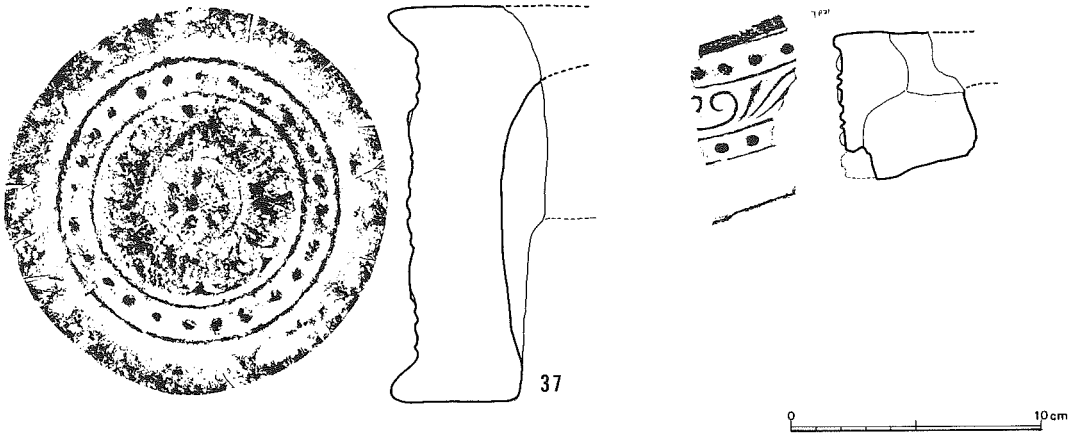


Fig. 57　ＴＰ21出土軒丸瓦・軒平瓦実測図（1/3）

ＴＰ21西瓦溜出土軒丸瓦・軒平瓦（Fig. 57）

37は瓦当面はほぼ完形の資料である。淡橙色を呈し，焼成は甘い。胎土は比較的精選している。全体的に摩滅が激しく，文様が不鮮明である。直径は15.5cm。中房径は3.5cmで１＋６の蓮子を持つ。弁区の径は8.3cmで中に複弁８弁の蓮華文を配する。外区内縁には24の珠文を巡らせ，外区外縁は凸線鋸歯文で囲む。裏面下半部には幅1.8cmの凸帯が半周する。調整痕は摩滅のため不明。

38は軒平瓦である。僅か１点だけの発掘資料である。灰白色で焼成はやや甘い。胎土には細かい粘土を使用する。中心飾から右側へ延びた唐草の第２支葉と第３支葉の部分にあたる。瓦当面の下部を欠損する。上面はヨコ方向のナデが観察されるが，粘土接合部を境に布目痕が残る。下部は幅1.5cmの段顎で，ヨコナデ調整を行う。且つて表採された２点の資料と同一の范から作られたものである。

ＴＰ21西瓦溜出土瓦（Fig. 58～Fig. 65）

Fig. 58～Fig. 63は丸瓦である。行基瓦と玉縁丸瓦の内，完形品と特長的な資料を図示した。丸瓦の完形資料を見ると，その長さは３種類に分かれる。37cm以上のもの，35cm～37cmのもの，そしてそれ以下のものである。何れも一括資料であるから同時期に使用されたものであろう。

39～**41**は最も長いタイプである。凸面にはヘラによるタテ方向調整を行う。**44**は凹面に布目綴じ痕がある。**45**の凹面には分割部分と思われる縦筋が残っている。**56**の側縁に残る凸面側の破面と合わせて，丸瓦分割にあたって，あらかじめ凹面側に切目を持つ例であるが，一方，**47**，**48**，**51**，**53**，**72**には逆に凹面側に分割時の破面が残っており，分割にあたっては凹凸両面から行う方法があったことを伺わせる。**51**は完形品である。長さ35cmで，焼成堅緻で茶褐色を呈する。広端部径は19cm，狭端部径は12cmを測る。この狭端部径は12cm前後が一般的なようである。また丸瓦の半径は広端部で８cm，狭端部で４cmである。丸瓦の製作にあたっての円筒の大きさを復元する資料となる。円筒貼りつけは，糸でタテ方向に切った粘土板を用いる。凸面調整はヘラによるヨコナデである。

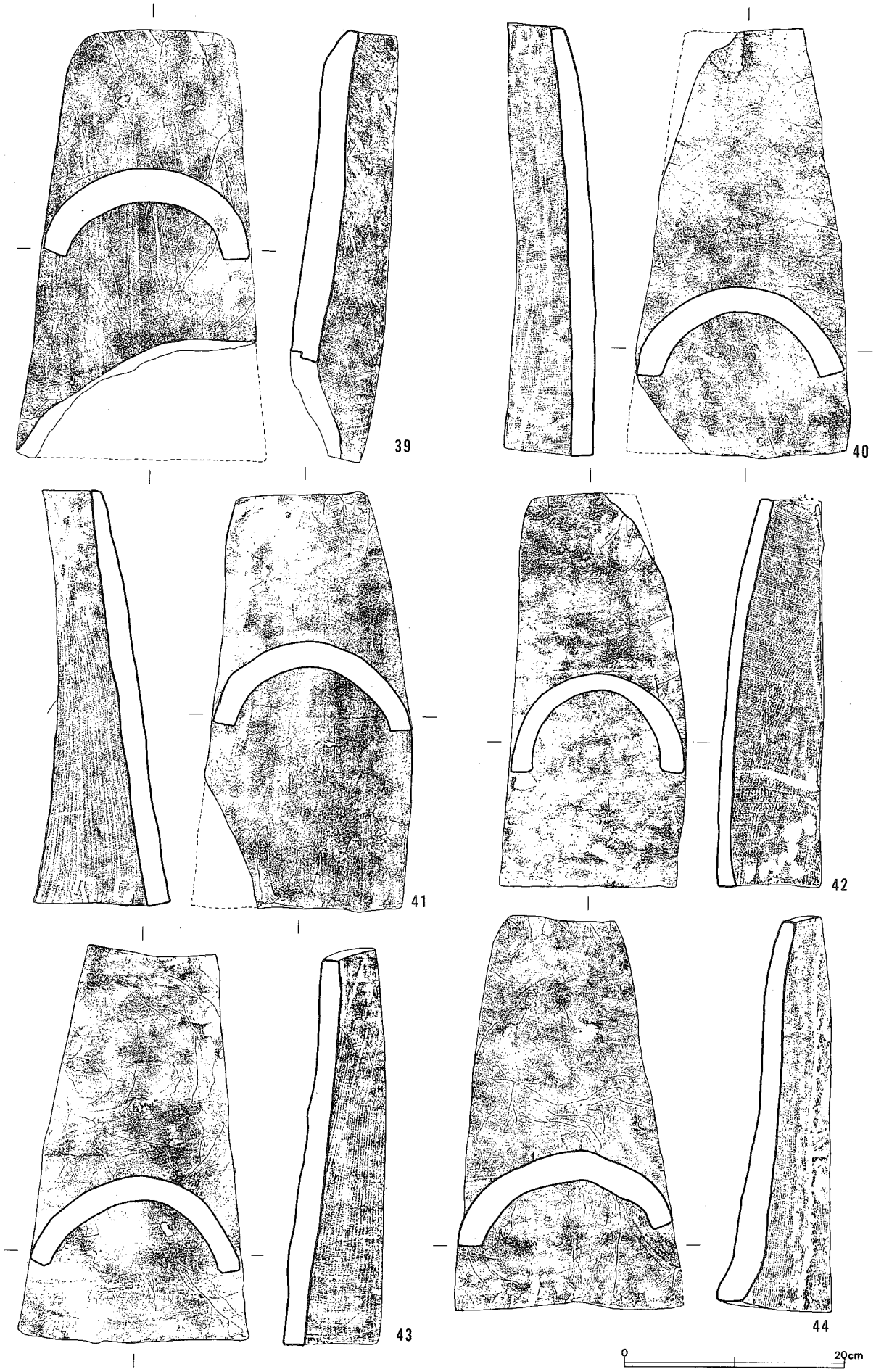


Fig. 58　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図①（1/5）

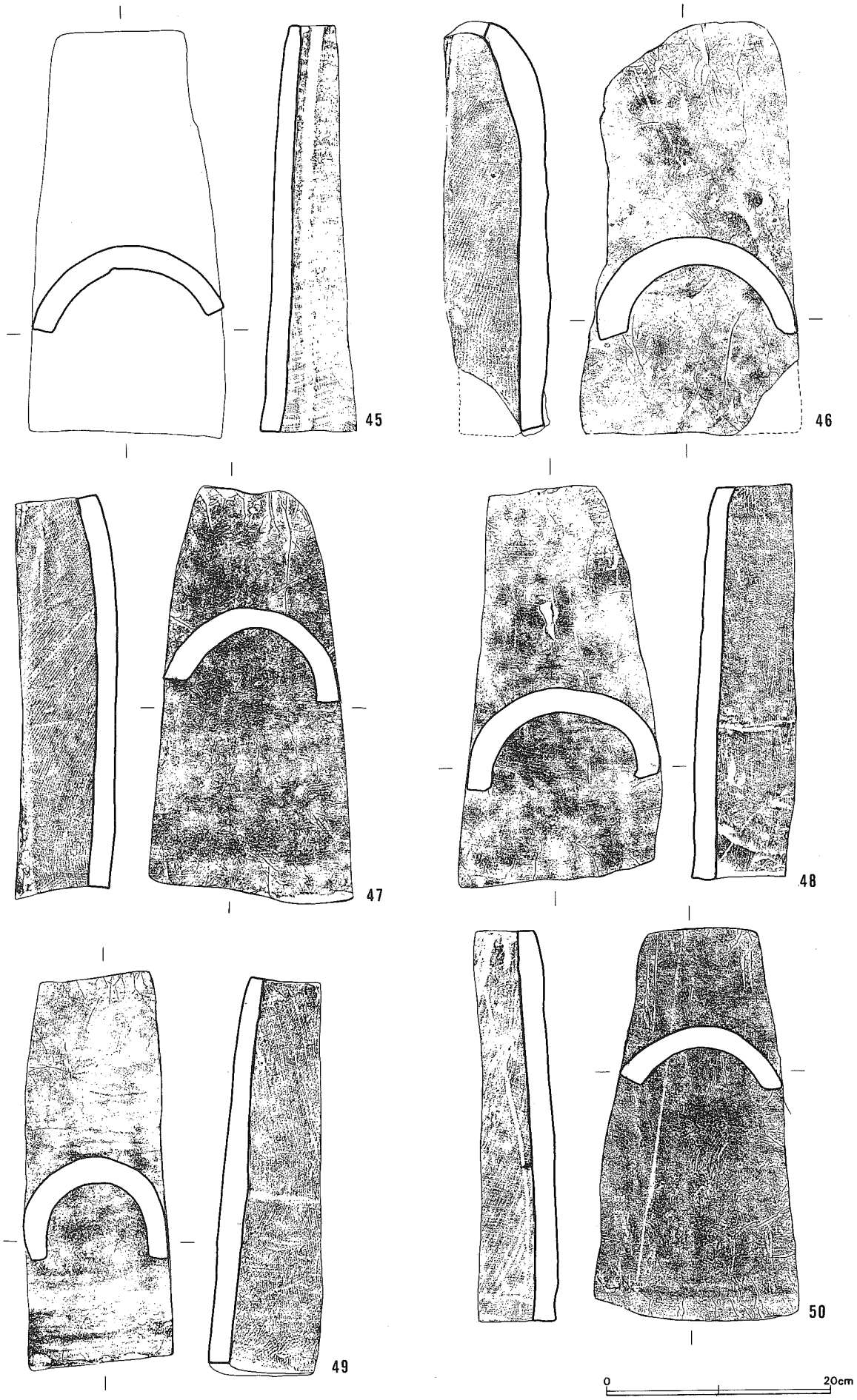


Fig. 59　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図②（1/5）

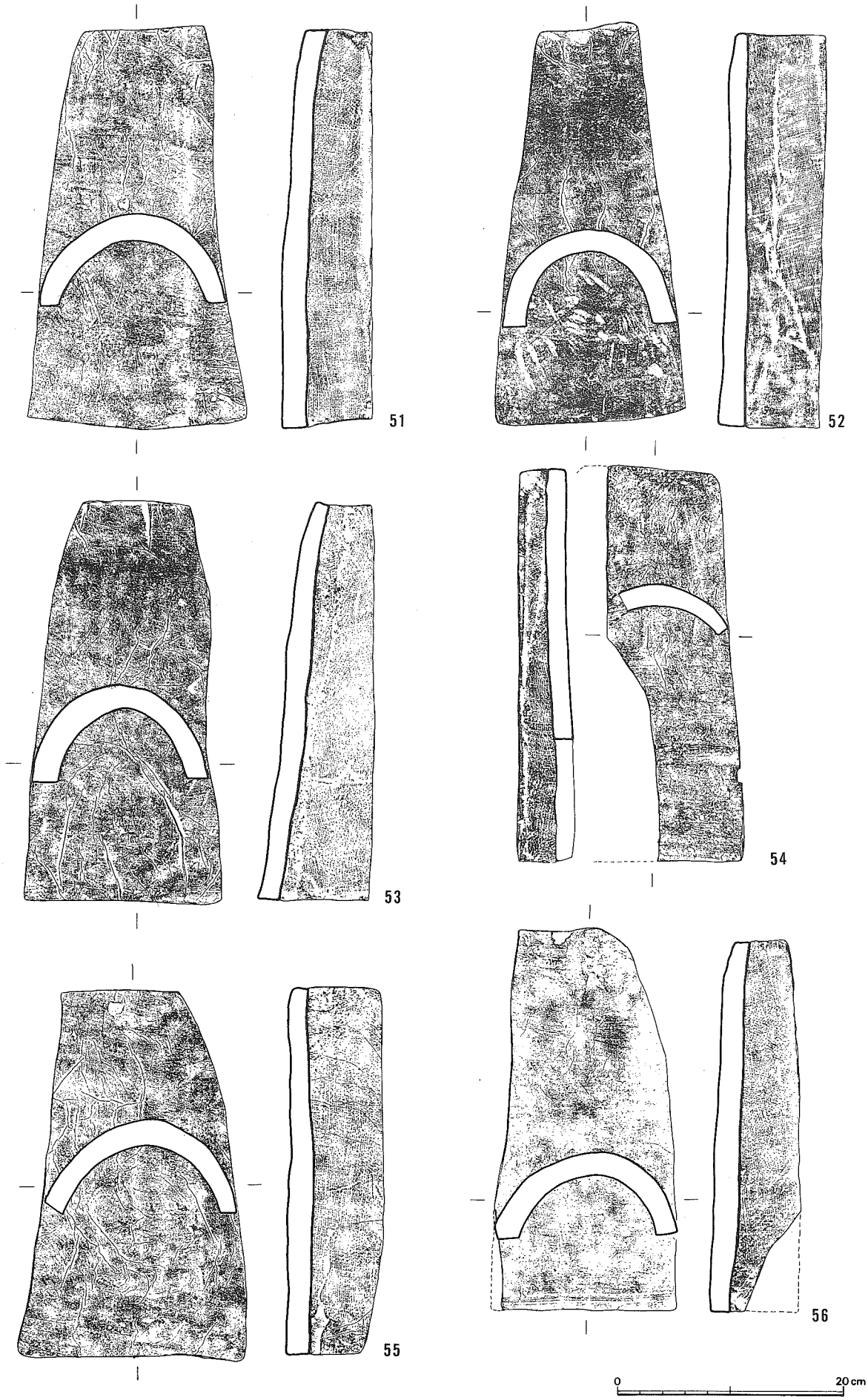


Fig. 60　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図③（1/5）

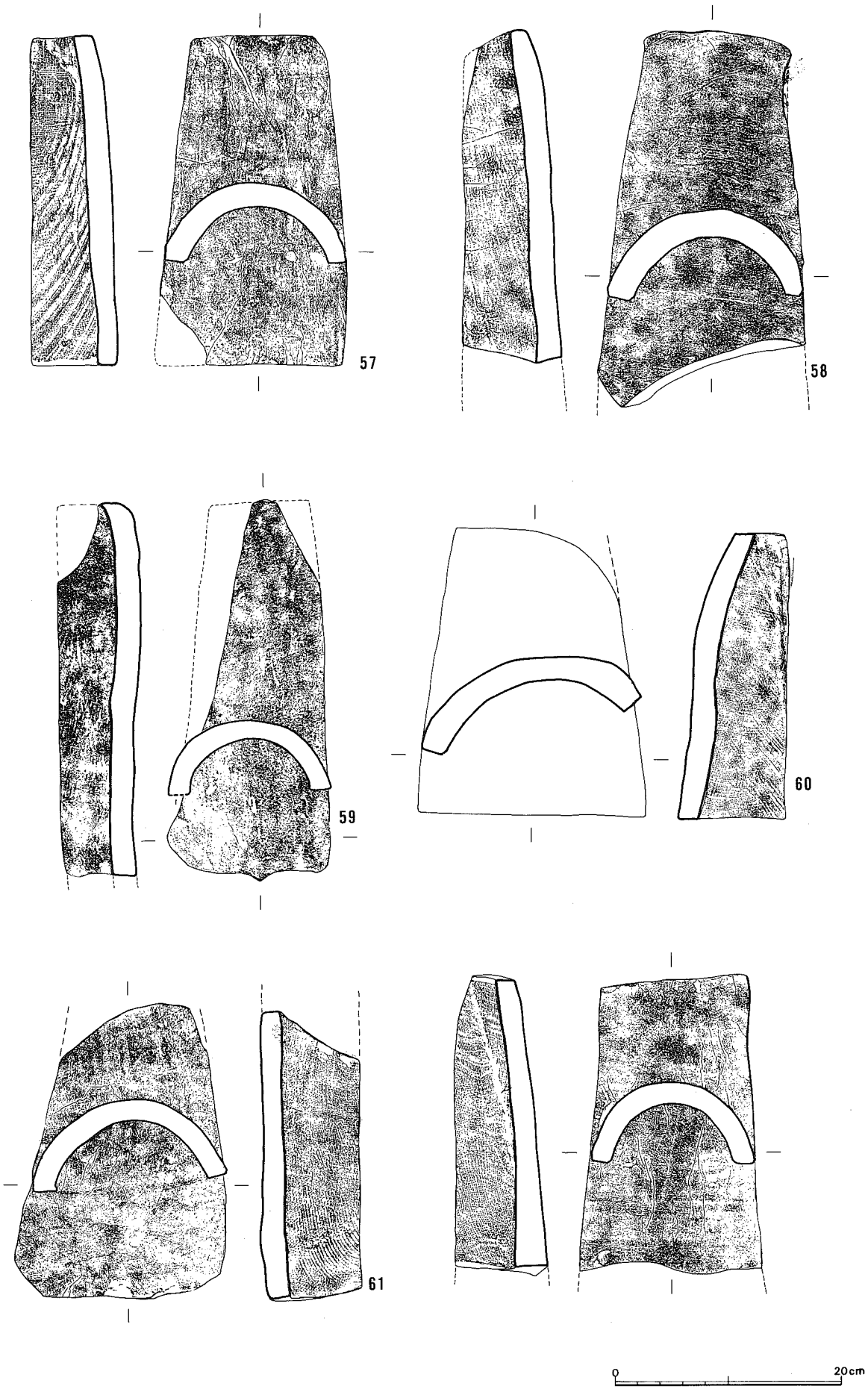


Fig. 61　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図④（1/5）

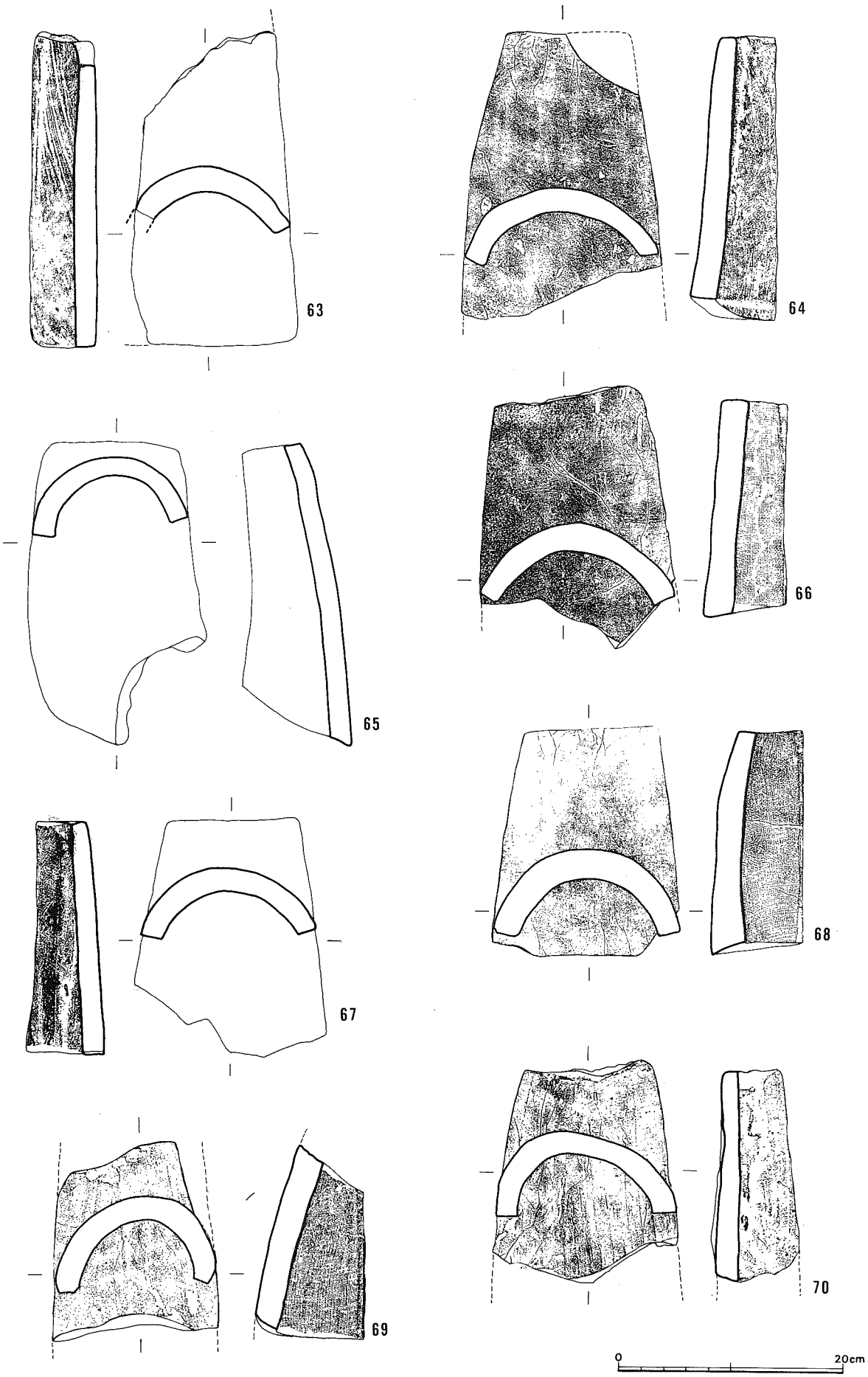


Fig. 62　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図⑤（1/5）

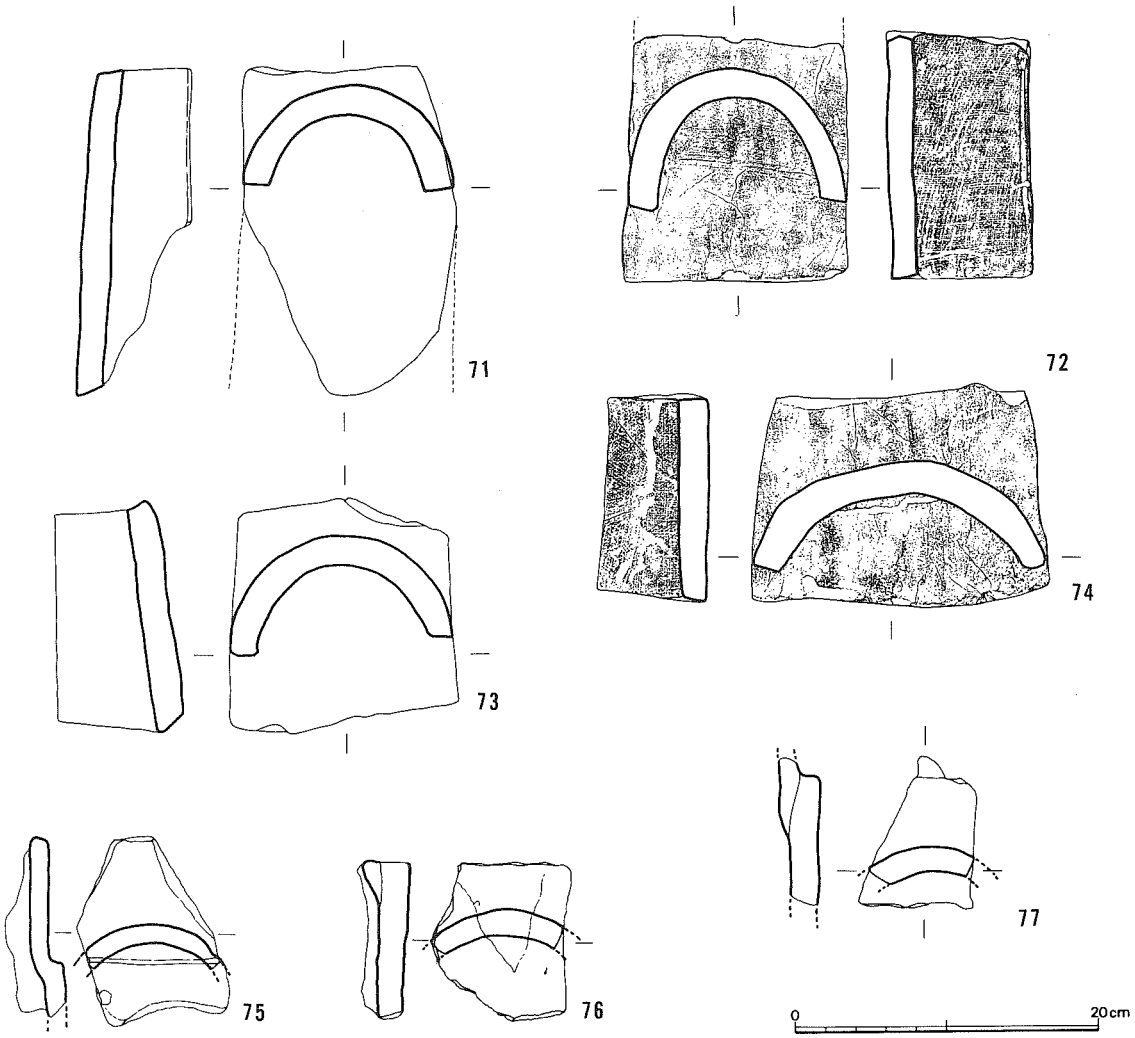


Fig. 63　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図⑥（1/5）

75～77は玉縁丸瓦である。本遺跡から出土した玉縁丸瓦は全ての資料が破片であるため全容が不明である。

75は淡黄灰色で焼成は甘く，軟質である。全体的に摩耗が進み，調整痕が不明瞭である。玉縁の段は直立で８cmの長さを持つ。76は玉縁接合部から欠損する。暗灰色で焼成は甘く軟質である。凸面には縄目圧痕，凹面には目の粗い布目痕が残る。77は黄灰色で焼成は甘く軟質である。胎土に石英と金雲母を含む。玉縁の段は直立である。

ＴＰ21の瓦溜からは，以上のように基本的に行基瓦と玉縁丸瓦が出土したが，簡単にその比較をしておくと，行基瓦は全体的に焼成が良好であり，色調は茶褐色か灰褐色を呈する。厚さは2.1cm程に統一されており，胎土も比較的精選されている。これに対して玉縁丸瓦は何れも焼きが甘く軟質である。凸面調整には縄目の叩きを使用することと，凹面に布目痕が残ることは共通するが，布目は目が粗く，造りが粗雑である。また，胎土には石英粒や大粒の砂粒を含む資料が一般的で，単に形態的な相違ばかりでなく，この両者には技術的にも系統が異なるものと思われる。製作に時間差があるのであろう。

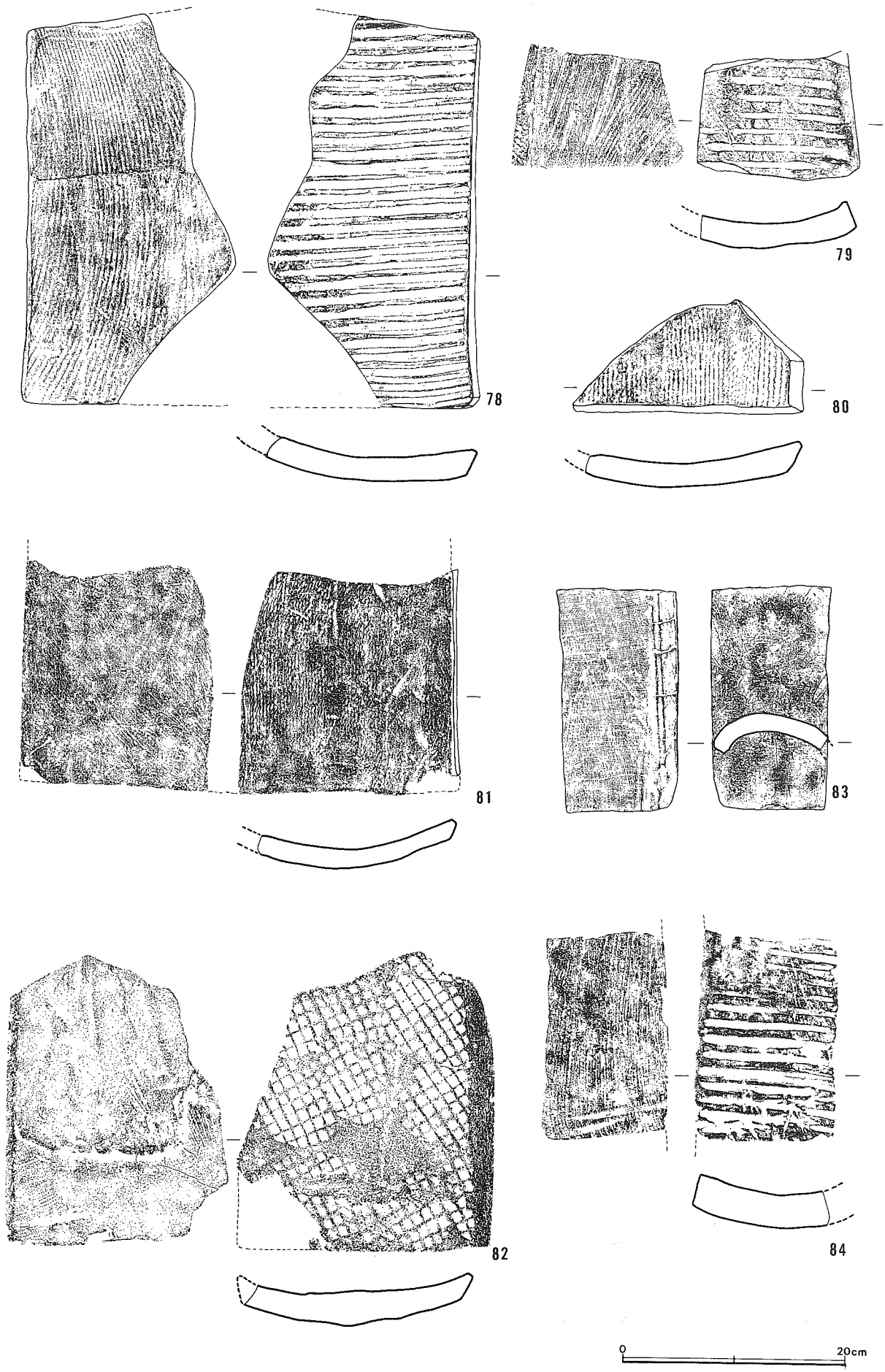


Fig. 64　ＴＰ21西瓦溜出土丸瓦実測図（1/5）

Fig. 64—**78**は凸面にカキ目を持つ平瓦である。全体的に平瓦は残りが悪く，全容が知れる資料が殆ど無いが，これは2/3個体程残っている資料である。長さは34cmで厚さは2.3cm，幅は推定23cm位であろう。重量は現状で2.1kgであるから本来は2.5kg位であろうと思われる。色調は明赤褐色で焼成はやや甘い。桶巻作りで模骨幅は3.7cmである。凸面調整は幅14cm，12本の櫛歯状原体を使用する。凹面は縦方向の糸切り痕が明瞭で，3cm平方あたり23×25の糸数を持つ布目圧痕が観察される。側縁は凸面側を大きく面取りするが，端縁部は特に調整しない。

79も凸面にカキ目調整を行う資料である。破片であるため法量が不明であるが，厚さは2.6cmである。色調は暗赤褐色で焼成は良い。桶巻作りで，幅4.3cmの模骨痕が残る。側面の凹面側には明瞭な分割時の破面が観察される。

80，**81**は凸面に縄目の叩きを持つ。**80**は赤褐色で焼成は甘い。厚さは2.3cmである。凸面の調整には2種類の叩き原体を使用している。側縁は凸面側を大きく面取りしている。**81**灰色を呈する。焼成は甘く，全体的に摩滅している。桶巻作りで，模骨の幅は3.8cmである。凹面には縦方向の糸切り痕がよく観察される。側縁は凸面側を大きく面取りしている。

82は凸面に格子の叩きを持つ資料である。本遺跡では，この格子目叩きは殆ど見られない。これまで調査した範囲では出土総量も僅か22kg程にしかすぎない。全体の1％弱である。

色調は灰白色で焼成は甘い。長さは不明であるが，幅は22cm程であろう。凸面には方1cmの斜格子の叩きを施す。叩きの原体は幅6.1cm，長さ8.1cmである。凹面には，粘土の継ぎ足し痕がよく残る。凹面の曲率からすると，平瓦製作にあたっての桶型の直径は広端部で40cm程が考えられる。

83～**86**は丸瓦や平瓦を調整転用した熨斗瓦である。**83**は丸瓦を丁度半截した大きさである。長さは20cm，幅は11cmにしている。赤褐色で焼成は良好である。側縁は凹凸両面から小さな面取りを行う。凹面には粘土の継ぎ目が明瞭である。

84は凸面にカキ目を持つ平瓦の周囲に調整を施して形状を整える。長さは19cm，幅は13cmである。赤褐色で焼成は良い。側縁は特に面取りをしない。

85は丸瓦を転用する。長さ22cm，幅10cmである。灰褐色で焼成は良好である。凸面はヘラによる縦方向のナデ調整を行う。凹面には縦方向の糸切り痕が顕著である。また布目の経緯本数は3cm平方あたり27×22でかなり密である。

86は平瓦を転用する。淡黄灰色で焼成は甘く軟質である。長さは22cm，幅は8cmである。凸面には縦方向のナデが観察される。

ＴＰ21　2層出土平瓦（Fig. 66）

87は2層出土平瓦である。凸面に縄目を持つ。赤褐色で焼成はやや甘い。全体が直線的で，殆どカーブが見られない。凹面は摩滅のため，布目が僅かに観察されるだけで，製作技法がよく分からない。粘土板一枚作りの資料であろうか。側縁は凸面側をヘラ削りによって大きく面取りする。縄目叩きは長さ8.3cm，幅4.3cmの叩き板に2mm間隔に右撚りの糸を9本巻き付けた原体を使用している。

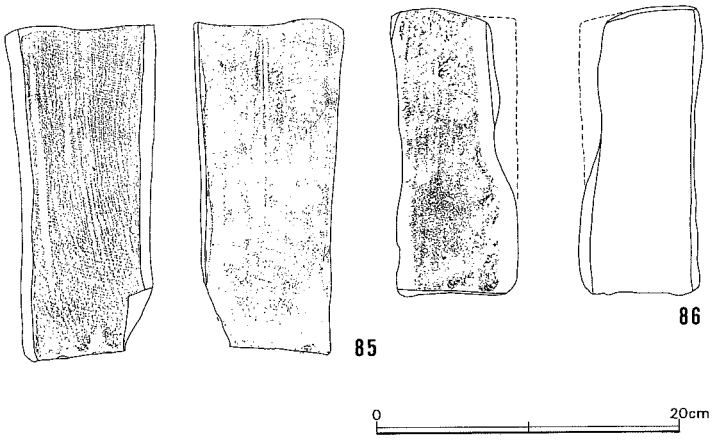


Fig. 65　ＴＰ21西瓦溜出土熨斗瓦実測図（１/５）

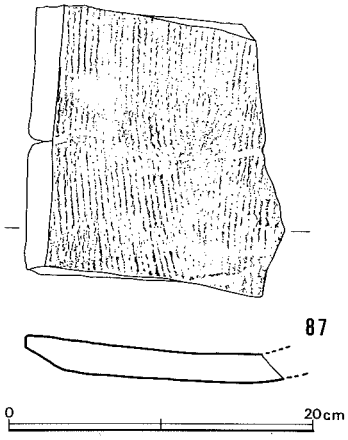


Fig. 66　ＴＰ21西瓦溜出土平瓦実測図（１/５）

ＴＰ21西瓦溜出土遺物（Fig. 67）

１は砥石である。使用の結果，撥形を呈している。目の細かい砂岩製で，欠損した下部の縁に縦方向に７条の使用痕が残る。現状でタテ12cm，ヨコ12cm，厚さは4.5cm，重さは800ｇである。

２は滑石で作った石製品である。石鍋を転用したものと思われるが，目，口，背鰭を意識すると，一見して魚の形を想起させる。

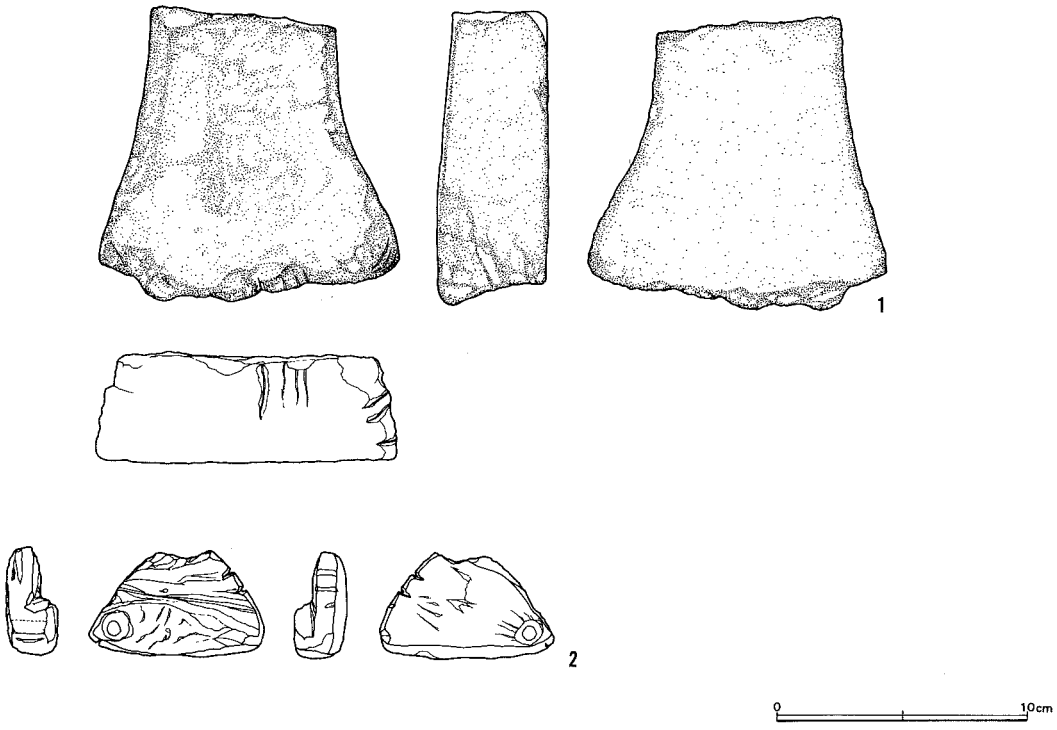


Fig. 67　ＴＰ21西瓦溜出土遺物実測図（１/３）

ＴＰ22は寺域北限を示す溝，ＳＤ５の西側延長を見るために設定したトレンチであったが溝はこの地点まで続いていない。

ＴＰ23は寺域南限を示す何らかの遺構を確認するため，南側のタバコ畑に南北に長く設定してみたが，期待された遺構らしきものは検出できなかった。

88は表土出土資料である。平瓦で暗赤褐色を呈し，焼成は良好である。凸面にはハケ目状の擦過痕のうえにカキ目を施す。凹面には糸切り痕が顕著である。側縁は特に面取りをしていない。

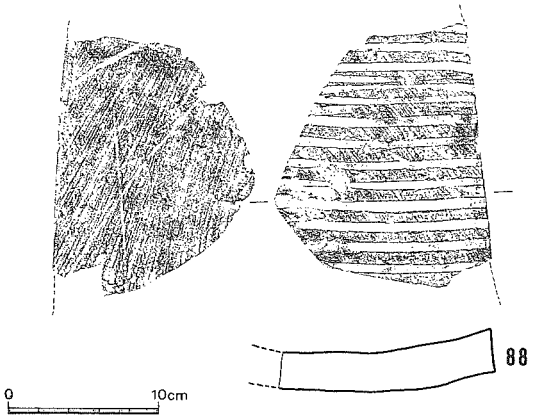


Fig. 68　ＴＰ23出土瓦実測図（1/5）

ＴＰ24平面図（Fig. 6・Fig. 69）

寺域の東限を見るため設定した南北に長いトレンチである。

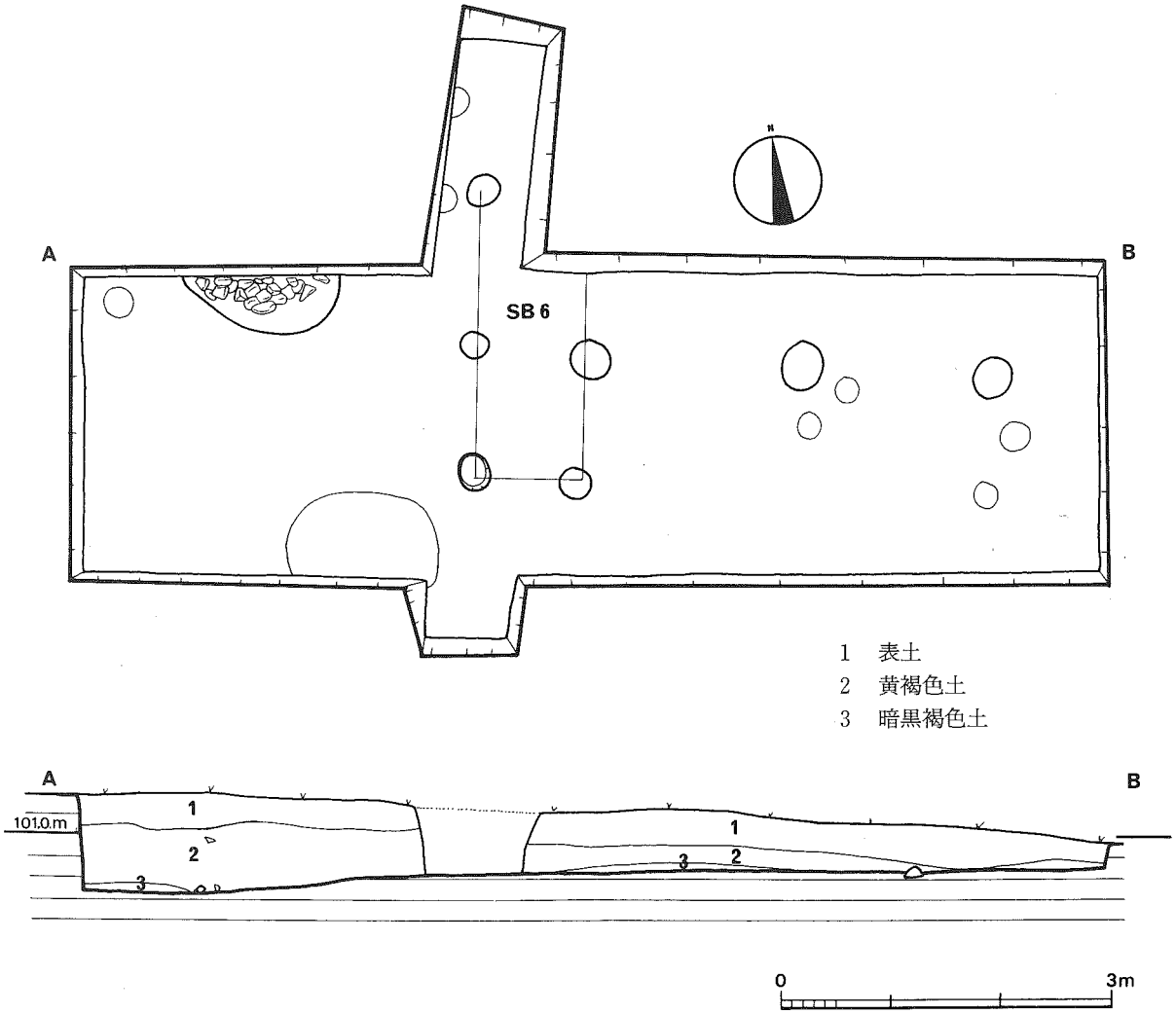


Fig. 69　ＴＰ24（ＳＢ６）実測図（1/60）

土層の堆積は，西に厚く，東に薄い。これは調査経過の項でも説明したように，且つて壱岐では畑地を作る際には，耕地表面積を増やすために周囲の土を中央部にかき集めて饅頭の形にすることが多かった。この畑も同様である。従って，より中央に近い西側は堆積が厚く，周辺にあたる東側は土をかき取られているため堆積土が薄くなることになる。

遺構は3層を切り込んで作られている。柱穴は，14個程検出したが，このうち建物跡として確認できるのは南北に長い一棟である。1間×2間の小さい建物で，柱穴の間隔は南北列は1.2m，東西は1.1m程しかない。**ＳＢ６**と呼称した。なお，トレンチ西側に直径1.5m程の土壙があり，中には瓦片が集積してある。

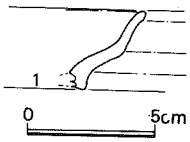


Fig. 70　ＳＢ６出土土器実測図（1/3）

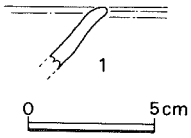


Fig. 71　ＴＰ24　2層瓦溜出土土器実測図①（1/3）

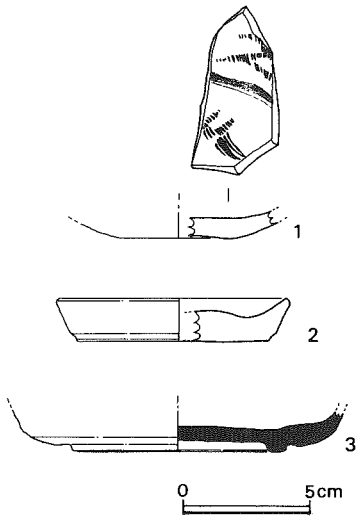


Fig. 72　ＴＰ24　2層瓦溜出土土器実測図②（1/3）

ＳＢ６出土土器（Fig. 70）

土師器の杯で，底部から中位までが外反し，中位で屈曲して口縁部へ移行する。口縁端部は，丸くおさめる。風化が進行し，成形不明瞭である。色調は淡黄褐色を呈する。

ＴＰ24　2層瓦溜出土土器①（Fig. 71）

1は，白磁碗（Ⅶ類）の口縁部片である。体部より外反ぎみに口縁部へ移行する。

ＴＰ24　2層瓦溜出土土器②（Fig. 72）

1は，同安窯系青磁（Ⅰ－1類）の皿片で，内面見込みにヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有す。外面体部には施釉されていない。**2**は，糸切り底の底部を有する土師器の皿である。底部と体部の境に稜をもって立ちあがり体部上位で外反する。口縁端部は丸味をもつ。**3**は，低い高台を有し，底部と体部の境に稜をなし丸味をもって立ちあがる。焼成不良のためか淡黄灰色を呈した須恵器の杯身である。

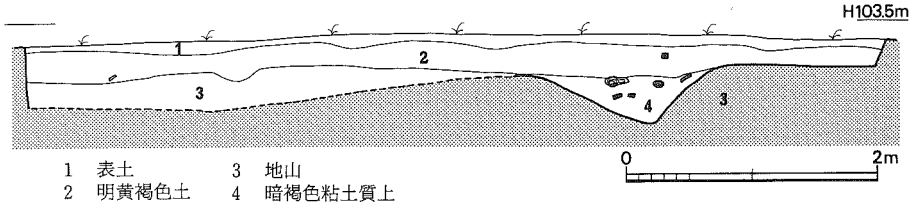


Fig. 73 ＴＰ25西壁断面図（1/60）

ＴＰ25 (Fig. 6・Fig. 73)

ＳＤ５と**ＳＤ６**の東側延長を見るため設定したトレンチである。その結果，**ＳＤ６**については，幅1.4m，深さ0.4mの断面が浅いＶ字形の溝を確認できたが，**ＳＤ５**の延長の痕跡はなかった。**ＳＤ５**は20m程の長さでしかないことになろう。**ＳＤ６**の東側については，**ＳＤ27**まで延びていることは確認できるが，その先は崖によって切られているため判然としない。

ＴＰ26 (Fig. 6・Fig. 74)

ＳＤ５の西側延長をみるためのトレンチである。その結果，幅1.5m，深さ0.8mの断面Ｕ字形の溝を確認した。２層には小さな瓦溜があり，溝内には瓦片に混じって，３層中は小さな玉石が集中していた。**ＳＤ５**はこの先７ｍ西側にはすでにその痕跡はない。

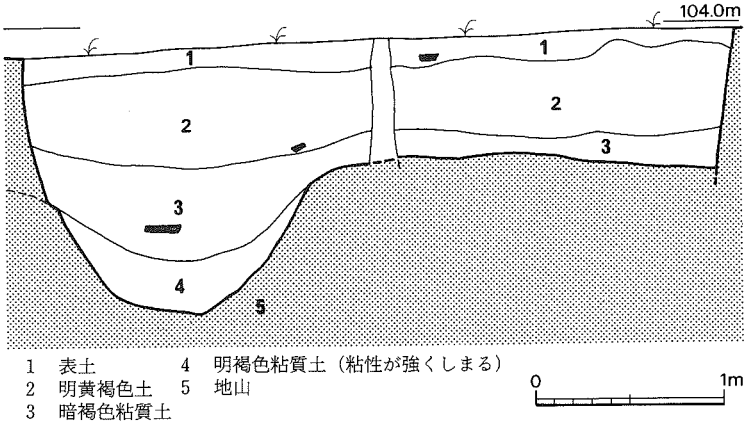


Fig. 74 ＴＰ26西壁断面図（1/40）

ＴＰ26　２層瓦溜出土土器(Fig. 75)

１は，青味を帯びた白色を呈する白磁Ⅲ類である。高台部付近にも一部釉がかかる。

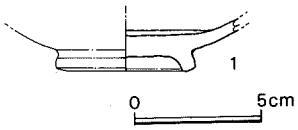


Fig. 75 ＴＰ26　２層瓦溜出土土器実測図（1/3）

Tab. 5 出土土器観察表

Fig 遺物番号	遺構番号	出土区（層位）	口径	器高	底径・高台径(cm)
Fig. 7					
1	S B 1	国分寺 TP11礎石附近	13.6	1.75	10.8
2		国分寺 TP11礎石附近			7.7
3		国分寺 TP11礎石周辺			6.4
Fig. 8					
1	S D 2	国分寺 TP11北拡H			8.1
2		国分寺 TP11北拡 2層			5.7
3		国分寺 TP11北拡 2層			
4		国分寺 TP11北拡 2層			
5		国分寺 TP11 S D 2			9.3
6		国分寺 TP11 S D 2			
7		国分寺 TP11北拡 2層			
8		国分寺 TP11北拡 2層			
9		国分寺 TP11 S D 2			
10		国分寺 TP11北拡 2			8.0
Fig. 11	T P 11				
1	東瓦溜	国分寺 TP11東瓦集積内			
2		国分寺 TP11東瓦集積内			8.5
Fig.12	T P 11				
1	出土遺物	国分寺 TP11東拡張			6.3
2		国分寺 TP西拡H			5.1
3		国分寺 TP11東拡 2層			6.5
4		国分寺TP11北東隅 2層			6.2
5		〃			7.6
6		国分寺 TP11東拡 2層			7.3
7		国分寺TP11北東隅 2層			7.2
8		国分寺TP11北東隅 2層	14.8	3.9	8.5
9		〃	13.8		
10		国分寺 TP11 H			9.0
11		国分寺TP11北東隅 2層			6.7
12		国分寺 TP11東拡 2層			7.8
13		国分寺TP11北東隅 2層			7.3
14		国分寺 TP11東拡 2層	9.0		
Fig. 15	T P 13				
1	出土遺物	国分寺 TP13 H	9.6	1.75	6.5
2		〃			
3		〃			
4		〃			
Fig. 17					
1	S B 2	2国分寺 TP14 P-1	7.5	2.7	5.6
2		2国分寺 TP14 P—2			8.2
3		2国分寺 TP14 pit 5			8.2
4		2国分寺 TP14 pit 5			
5		3国分寺 TP14 pit25			
6		2国分寺 TP14 pit 9			
7		2国分寺 TP14P—7	12.7		
8	〃	2国分寺 TP14P—6	12.1		
9	〃	3国分寺 TP21-pit 3			
10	〃	3国分寺TP14-pit 4脇			
11	S B 2	2国分寺 TP14-pit 4			
12	〃	2国分寺 TP14-P-9			9.6
Fig. 18					
1	S B 2	国分寺 TP14-P-1			
2	〃	国分寺 TP14-P-3	11.55	4.1	7.4
3	〃	国分寺 TP14-P-2			9.15
Fig. 19	T P 14				
1	西瓦溜	2国分寺TP14W拡瓦溜	12.6		
2	〃	2国分寺TP14W拡瓦溜下	15.0		
3	〃	2国分寺TP14W拡瓦溜	11.0		
Fig. 21	T P 14				
1	出土遺物	2国分寺TP14W拡 2層	12.3	3.45	5.8
2		2国分寺 TP14E拡 2層			7.6
3		〃			5.3
4		2国分寺TP14W拡 2層	10.7	1.85	7.3
5		2国分寺 TP14 3層			6.9
6		2国分寺 TP14 2層	12.8		
7		〃	14.7	1.95	10.1
8		2国分寺TP14W拡 3層	11.5		
9		〃	13.0		
10		〃	14.7		
11		〃	12.0		
12		2国分寺 TP14 2層	10.9		
13		〃			
14		〃			
15	出土遺物	2国分寺 TP14 2層			
16		2国分寺TP14W拡 3層			
17		〃	14.0	1.9	11.1
18		2国分寺 TP14 2層			
Fig. 29					
1	S K 1	国分寺 TP15-pit 2			16.3
2		2国分寺 TP15-H下	14.4	1.8	
Fig. 31					
1	S D 5	3国分寺TP26 pit 1			
2		2国分寺 TP16 H中	15.85		
3		2国分寺 TP16-P-1	16.1	3.4	
Fig. 32					
1	S D 6	3国分寺 TP16溝			11.2
Fig. 36	T P 17				
1	出土遺物	2国分寺 TP17 2層	25.4		6.9
2		〃			
3		2国分寺 TP17 3層			8.0
4		〃			7.7
5		〃	13.3		
6		〃	11.6		
7		〃			
8		〃	14.5		
9		〃	13.3		6.4
10		〃	12.1		7.75

Tab. 6 出土土器観察表

Fig 遺物番号	遺構番号	出土区（層位）	口径	器高	底径・高台径 (cm)
11		〃	13.2		
12		〃			
Fig. 37	T P 18				
1	出土遺物	2国分寺 TP18 3層			4.4
2		2国分寺 TP18 2層	19.3		
3		2国分寺 TP18 3層			
4		〃	14.0	3.5	7.8
5		〃	13.6	3.3	8.2
6		〃			10.1
7		〃			7.1
Fig. 43	T P 19				
1	2層瓦溜	3国分寺 TP19 2層瓦溜			6.6
2		3国分寺 TP19 2層瓦溜			6.0
3		3国分寺 TP19 2層瓦溜			8.1
4		〃	16.7		
Fig. 46	S B 5				
1		3国分寺 TP21-P20			8.2
1	TP20 3層	2国分寺 TP20-P-10	13.5	2.0	9.5
Fig. 49	T P 20				
1	3 層	3国分寺 TP20 3層瓦溜			7.9
2		〃	13.6	3.5	8.4
Fig. 51	T P 21 pit 15				
1		3国分寺 TP21 pit5			7.6
Fig. 52	T P 21 3層				
1	出土遺物	3国分寺 TP21 3層			
2	出土遺物	3国分寺 TP21 3層			
3		〃			
4		3国分寺 TP21北壁3層			9.9
5		3国分寺 TP21 3層			
Fig. 55	T P 21 2・3層				
1	西瓦溜	3国分寺 TP21 2層瓦溜	16.2		
2		〃			5.4
3		〃			6.5
4		〃			4.7
5		〃			11.4
6		〃	15.4	1.5	11.4
7		〃			8
8		〃	26.9		
9		〃	15.1	1.5	10
10		〃	16.5		
11		3国分寺 TP21 3層上瓦溜	11.75		
12		3国分寺 TP21 2層瓦溜	14.1		
13		〃			8.9
14		〃			
15		3国分寺 TP21西瓦溜			
16		〃	15.9		
17		〃			9.9
18		〃			
19		〃			

Fig 遺物番号	遺構番号	出土区（層位）	口径	器高	底径・高台径 (cm)
20		3国分寺 TP21 3層瓦溜			
21		〃			
Fig. 55	T P 21 2・3層				
22	西瓦溜	3国分寺 TP21 3層瓦溜			
23		〃			
24		〃			7.0
25		〃			9.5
26		〃			
27		〃	11.2		
28		〃	13.5		
29		〃	15.0		
30		〃	14.7		
31		〃	11.8		
32		〃	11.5		
33		〃	14.1		
34		〃	12.7		
35		〃			
36		〃			
37		〃			
38		〃			
39		〃			
40		〃			
41		〃			
42		〃			
43		〃			
44		〃			6.7
45		〃	12.9	3.3	6.6
46		〃			5.95
47		〃	13.0		
48		〃	14.2	3.2	8.7
49	西瓦溜	3国分寺 TP21 3層瓦溜			7.9
50		〃			10.0
51		〃			
52		〃			7.6
53		〃	11.5	3.6	8.6
54		〃			6.9
55		〃			7.9
Fig. 70	S B 6				
1		3国分寺 TP24-pit16			
Fig. 71	T P 24				
1	2層瓦溜	3国分寺 TP24 2層瓦溜			
2		〃	9.0	1.7	7.5
3		〃			8.4
Fig. 72	T P 24				
1	2層瓦溜	3国分寺 TP24 2層瓦溜			
Fig. 75	T P 26				
1	2層瓦溜	3国分寺 TP26 2層瓦溜			5.5

III 総　括

一 遺構（Fig. 76）

本書で報告する遺構は第１次調査から第３次調査分までであるが，これまで確認した全調査区の遺構の出土状態はFig. 76のとおりである。

まず，建物跡からみるとＳＢ１～ＳＢ６までが確認出来る。ＳＢ１は版築を施した基壇を持つ。6.6m四方で，一尺を0.3mで計算すると22尺四方となる。基壇上には明治時代まで個人宅があり，現存礎石はその当時家の束柱石としても利用されていたという。近世の掘建柱跡や電柱跡があるのもうなづける。基壇には北東隅の現存礎石１個以外には礎石は見あたらない。表土から15cm程で版築上面にあたることから耕作時に除去したものであろう。しかし，礎石を取り除いた跡と思われる円形のピットの輪郭が５個残っている。当初この建物については，規模や位置的に見ても「塔」[註1]である可能性が考えられたため，その後の調査は塔を東側に持つ伽藍配置を想定して実施したが，結果的に思うような成果は得られなかった。時期的にはＳＢ１そのものからは遺物の出土は無いため，周辺から出土した土器を参考にすると，ＳＤ２内からは８世紀後半から10世紀にかけての資料が出土し，礎石周辺からは９世紀後半から10世紀にかけての遺物が出土している。遺物から判断すると，８世紀後半に作られ，10世紀には破棄されたことになる。

ＳＢ２は９間の長さを持つ柱穴列であるが，東西の延長が今一つ明らかでない。形からすると回廊であろうが，ＳＢ１とは直接結びつかない。出土遺物は８世紀後半から９世紀初頭にかけてのものであり，その時期の建立が考えられる。

ＳＢ３は遺構内からの遺物の出土はないが，ＳＢ２より下の層で確認したことから，一時期遡る可能性が強い。恐らく創建時の遺構であろう。

ＳＢ５は瓦溜を切って建てられている。柱穴内からは13世紀後半の遺物が出土したことから，中世に属する建て物跡である。

ＳＢ６は南北に長い小さな建て物であるが，柱穴横の瓦溜からは11世紀から12世紀にかけての白磁や，12世紀から13世紀にかけての土師器や輸入陶磁器が出土している。

ＳＤ５は断面Ｕ字形のしっかりした溝であるが，中から出土した須恵器は８世紀中頃から後半の特長を備えている。やはり創建時の遺構であろう。

ＳＤ７とＳＤ８はそれぞれ寺域の東限と西限であろうと思われるが，直接的な遺物の出土がないので時期を捉えることができない。

ＳＫ１は円形の土壙であるが，出土遺物は須恵器と近世陶磁器であった。覆土の色調や固さから見ても後者の時期に属することは確実である。

註１　奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏から，塔としては規模が小さすぎるのではないかとの御教示を得た。

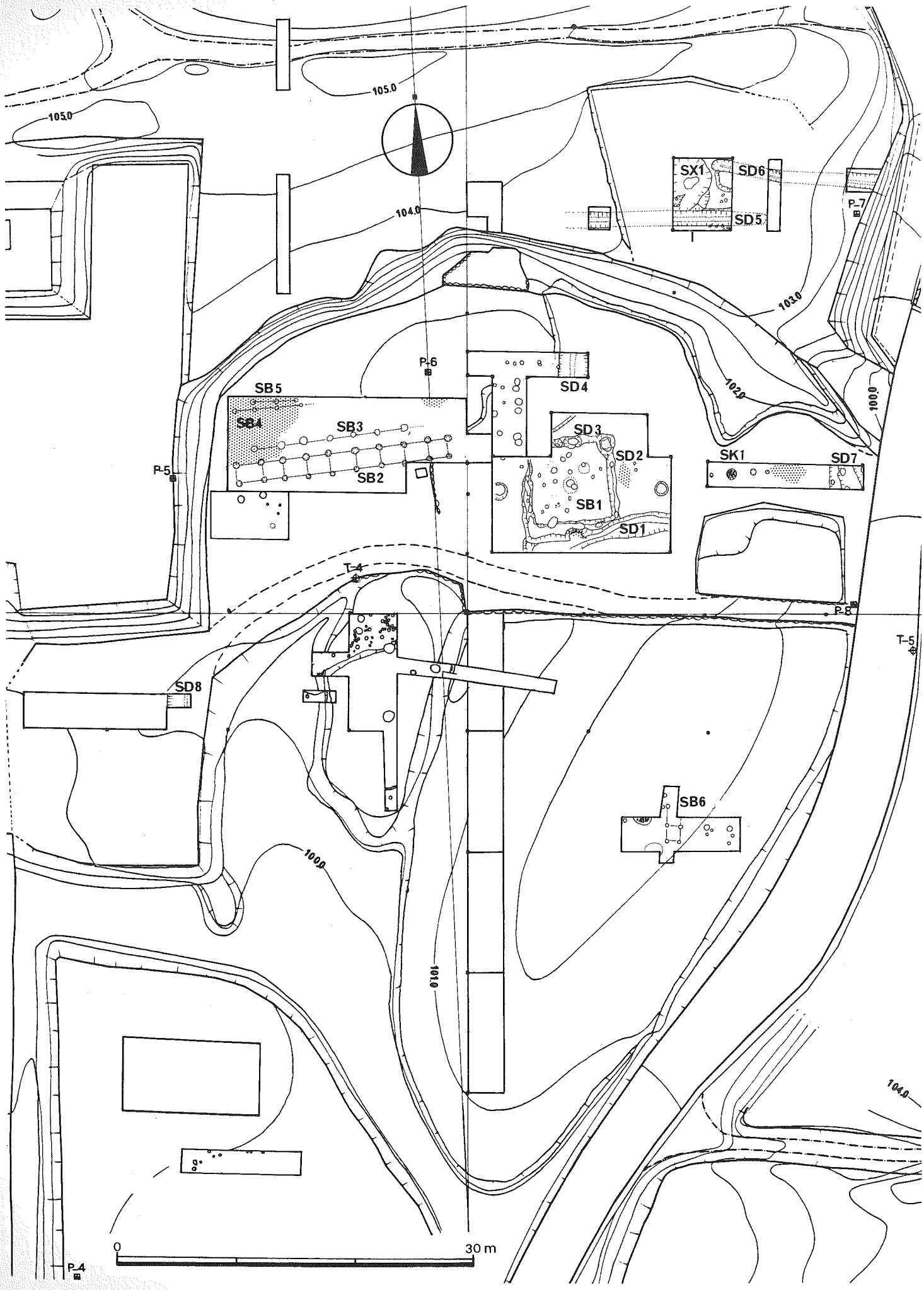


Fig. 76　遺構配置図（1/400）

二　土　器

遺構及び土層より出土した主な遺物には，須恵器・土師器・青磁類があるがいずれも時期的な幅があり，中世代に奈良時代から平安時代にかけての遺構を破壊した形跡が遺物の混在状況から判断された。このため遺物が包蔵された遺構・土層から総体的に時期設定をせざるを得なかったが，出土遺物の概略説明を以下加えることとする。

ＳＤ２からは，須恵器の蓋・身の出土があり，８世紀中葉から８世紀後半にかけての時期の資料が遺構よりの出土では古く，次いで９世紀から10世紀にかけての５の高台付の土師器椀及び越州窯系青磁椀類が混在してII層より出土している。ＳＤ５より出土した遺物には，３（８世紀後半）の時期に新たに遺構に手が加わったものと思われ，上層より出土の２が口縁端部に１形式古い形態を残している。ＳＤ６からは，土師器椀類の底部片が出土しているが，体部の形状が不明なため時期を明確にしえない。ＳＢ１からは，３点図化し，２・３の９世紀後半から10世紀にかけての土師器椀と１の12世紀代と思われる土師器皿の出土があった。ＳＢ２は，８世紀中葉から９世紀初頭ころの須恵器の資料と10世紀前半代の土師器の出土があり，この遺構が10世紀代までは存続していたことが窺われる。ＳＢ５は，柱穴内より輸入陶器が出土しており同様の資料が今福遺跡で出土している。ＳＢ６は，土師器の資料で器形から10世紀初頭と思われる。類似の資料に周防鋳銭司跡出土の遺物がある。ＳＫ１は，表土から８世紀後半の須恵器蓋の出土があるが遺構からは近世の青磁が出土している。

次に，瓦溜より遺物が出土した地区は，８か所あがっていてこれらについて概観すると，８世紀中葉から後半の須恵器が主体に出土している。ＴＰ11・14は８世紀中葉から後半にかけての須恵器が出土している。ＴＰ19には，II層の瓦溜より12世紀中葉から13世紀の青磁碗類及び10世紀初頭から前半代の土師器椀が混在している。表土からは，８世紀中葉の須恵器が出土している。このことから，中世の頃になんらかの撹乱を受けたものであろう。ＴＰ20からは，２点の土師器杯をあげ，ともに８世紀代をあてている。ＴＰ21は遺物がもっとも集中する地区で，８世紀中頃よりやや古期の資料が数点認められるものの遺物の主体は，８世紀中葉から後半にかけての須恵器がその多くを占めている。しかしこの地区にも中世の撹乱がおよんでおり３層より同安窯系青磁片が出土している。ＴＰ20・pit.10からは，８世紀前半頃の須恵器身が出土し，ＴＰ21・pit.15からは，８世紀中葉頃の高台付の須恵器身が出土している。

ＴＰ24の瓦溜からは，11世紀中葉から12世紀初頭にかけての白磁碗片が出土している他12世紀末から13世紀の糸切り底の土師器皿２及び同安窯系青磁１が出土している。

ＴＰ26の瓦溜には，内面見込にも施釉された高台付の白磁皿が出土している。

堆積土層からの出土遺物では，ＴＰ11では，10の須恵器底部に糸切り痕を残す資料が出土しており９世紀前半以降に撹乱を受けている。ＴＰ13の遺物は，表土より出土の遺物である。須恵器については，８世紀中葉の時期が考えられる。ＴＰ14は，７世紀中葉から10世紀代にかけての資料が出土しているがこの調査区においても２・３層の遺物が逆転している。ＴＰ17の３層出土遺物にあっても時期幅があり７世紀後半より12世紀前半までの資料がある。ＴＰ18には，８世紀後半からの須恵器が出土

している。また，時期に不明の青磁が3層より出土している。ＴＰ21・3層より8世紀中葉から8世紀末にかけての須恵器蓋の出土があった。

以上が，各地区での出土遺物に関する概略であるが，遺構及び層序より出土した遺物に中世の資料が混在しており，遺構に属する時期を明確決定できないのが現状であった。しかし，当地が国分寺跡であるとすれば，開始期が8世紀中頃より10世紀前半代頃までは，存続していた可能性が出土遺物から判断されるのではなかろうか。

註1　須恵器の年代については、以下の2文献を併用した。
・川述昭人・森田　勉「須恵器について」『牛頸窯跡群II』大野城市大字牛頸所在窯跡群の調査福岡県文化財調査報告書第89集福岡県教育委員会　1989
・中村　浩編集『陶邑II』大阪府文化財調査報告書第29　大阪府教育委員会　1977

註2　横田賢次郎・森田　勉「《研究ノート》大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『研究論集2』九州歴史資料館　1976

註3　白磁青磁類に関する年代及び形式については以下の文献に従った。
横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」―型式分類と編年を中心として―『研究論集4』九州歴史資料館　1978

註4　宮崎貴夫「III歴史時代の土器・陶磁器・滑石製容器について」『今福遺跡III』県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第三冊長崎県文化財調査報告書第84集長崎県教育委員会　1986

註5　吉瀬勝康「周防における古代・中世土器の様相」―10世紀から13世紀を中心に―『中近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会　1988

三　瓦

出土瓦の観察結果については表に記載したが，使用した語句は，奈良国立文化財研究所[註1]，及び佐原[註1]真の論文に従う。

1　軒　丸　瓦

軒丸瓦は全部で10個出土した。かつて表採してある資料が１個あるから今のところ全部で11個ということになる。ただし，完形品は無く，また全容が分かる程の大きさを持つ資料も殆ど無い。

出土状況は僅かにＴＰ21西瓦溜から出土した１点を除いて他は表土資料のものが大部分を占めており，確実な遺構からの出土例に乏しい。色調は赤褐色を呈するものと灰色を呈するものがある。胎土は比較的精選されているが焼成は甘い。

本遺跡出土の軒丸瓦については，九州で一般的な老司系の瓦ではなく，平城系のものであるとの教示を得ていたが[註2]，奈良国立文化財研究所小沢毅氏に実見していただいたところ文様の配置とともに范傷の位置が一致することから平城宮6284Ａ型式と同范であることが確認出来た[註3]。

軒丸瓦は全て同じ范木から作られていることから，軒丸瓦の種類としては一種類であるが，瓦当に取り付ける丸瓦の位置は二種類が確認[註4]された。すなわち，平城宮6284Ａ型式は**37**(Fig. 57)とは丸瓦との取り付け位置は同じであるが，**24**(Fig. 26)とは180°異なる。范木が方形であったことを示すものとして注目されるが，それにしても取り付け位置をしめす何らかの印はすでに無くなっていたのであろうか。

瓦当の裏面下半は平城宮資料が，平坦であるのに対して，本遺跡例は半円周状に1.8cmの凸帯が巡っている。このような製作技法は老司Ｉ式軒丸瓦の特長と[註5]されており，太宰府はもとより，筑前，肥後，豊前等でも広く出土している[註6]。このような製作技法の違いは製作にあたった工人が，平城宮資料のそれとは異なることを示していよう。壱岐嶋分寺の軒丸瓦は，范木のみが平城宮から運ばれて作られたものと思われる。

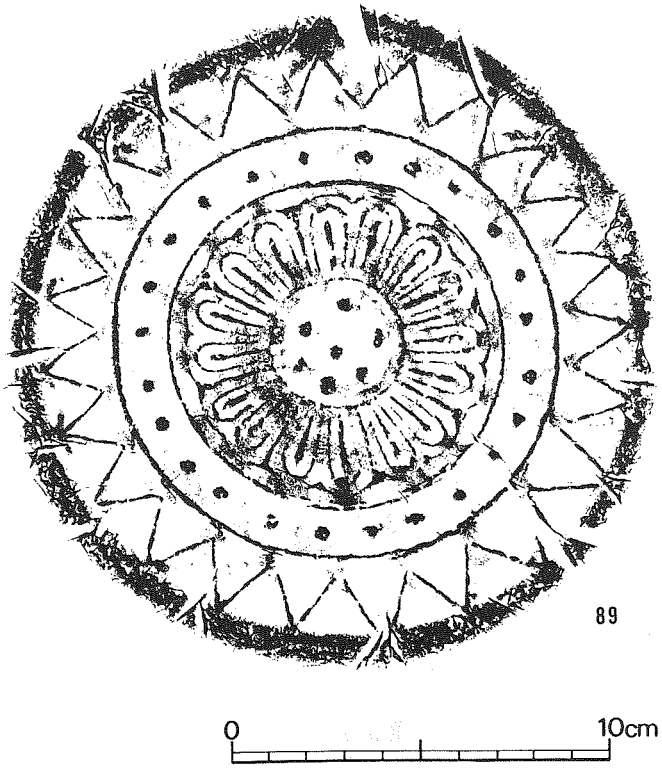


Fig. 77　平城宮出土6284Ａ型式軒丸瓦

2　軒　平　瓦

軒平瓦は僅か1点のみの出土である。これまでに2点が知られているから都合3点出土したことになる。

軒平瓦も1種類で，これまでの表採資料と文様も完全に一致する。瓦当紋様は軒丸瓦6284Aとセットになる6664C型式に近いが唐草の末端の処理の違いと，段顎の形態の相違から同范ではないとの教示を得た[註7]。しかし，平城宮様式であることは，軒丸瓦，軒平瓦の范木がセットして壱岐にもたらされていることになり，平城宮との直接的な関係が考えられる。

3　丸　　瓦

丸瓦は行基瓦と玉縁丸瓦の2種類に分かれる。但し，玉縁丸瓦の出土は極めて少なく，全出土量も僅か1.7kgでしかない。

①　行基瓦

全体で492kg程出土しているが，その70%はＴＰ14，ＴＰ20，ＴＰ21の瓦溜からの出土である。以下観察結果にもとづいて特長を述べておく。

行基瓦の大きさ

ＴＰ21西瓦溜下層の完形一括出土資料の観察結果では，まず長さは34cm以下のもの，35cm～37cmのもの，そしてそれ以上のもの3種類に分けられる。重量は2kgのもの3個，2.3kg～2.6kgのもの12個，そして2.7kgのもの1個となる。平均は2.5kgである。これが本遺跡出土行基瓦の一般的な大きさと思われる。

色調と胎土及び焼成

色調は大きく赤褐色系統と灰褐色系統のものに分けられるが，同じ瓦でも凹面と凸面で同様な色を呈する例がある。焼成は堅緻なものとそうでないものがあるが，概して赤褐色系統の資料は焼成が甘い。なお焼成時に変形したと思われる資料もかなり混じっている。胎土は比較的精選されており，後述する玉縁丸瓦とは全く異なる。

成形技法

製作にあたっては，粘土を円筒に巻き付け，然る後縦に分割半截して仕上げている。材料である粘土は，瓦凹面に残る縦方向の糸切り痕から，粘土紐ではなく，粘土塊から薄く縦切りした粘土板であることがわかる。なお，凹面には粘土の継ぎ目が観察される資料が見受けられるが，その頻度はあまり多く無い。このことによって，巻き付ける粘土板は一枚である可能性が強いが，板が薄いために二重に巻きつけている例がある。

粘土を巻きつけた後の調整は，凹面は布目をそのまま残すが，凸面はヘラによるナデ消しのため，叩き調整痕が不明である。

丸瓦は両端の大きさが異なるが，粘土を巻き付ける円筒が円錐形をしているのに起因する。瓦の広端部半径は，7.5cmが最も多く，狭端部半径は4.5cm～5cmが最も多い。瓦の焼成時の収縮率を計算に

入れなければ，円筒の直径は上部狭端部で10cm前後，下部の広端部で15cm前後の円錐形をしていることが推定される。

分割方法

円筒形に仕上げられた瓦の分割にあたっては，あらかじめ凹面側に刃物によって分割面をつけるのが一般的であるとされる[註8]。しかし，本遺跡の出土資料では，そのような資料もあるが，むしろ凹面側に破面を残す例が多い。(PL. 26) つまり，凸面側にあらかじめ分割線を入れておく方法があったことを示している。同じような例が熊本県平原瓦窯址で報告[註9]されている。

なお，分割は2分割である。

側縁調整

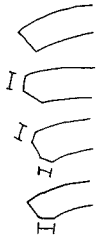
分割後の側縁は殆どの場合ヘラ削りによって調整を行う。調整方法は4種に分類出来る。

a　単に分割に際して残る破面を削っただけのもの

b　分割面の凸面側を面取りするもの

c　分割面の凹凸面側に面取りするもの

d　分割面の凹面側を面取りするもの



以上である。ただ，丸瓦の面取りは後述する平瓦の場合と大きく異なり，分割面そのものを大きく変えるのではなく，単に縁取りといった感が強い。丸瓦は色調的に赤褐色系統と灰褐色系統の2種類があることは前述したが，ちなみに，観察出来た305個の行基瓦の側縁処理をみると，

	a	b	c	d
赤褐色系統	84	12	78	24
灰褐色系統	50	8	84	15

となっている。灰褐色系統のものが僅かであるが，面取りをしない傾向が見られる。

凹面調整

凹面には殆どの場合布目痕が明瞭に残り，特に調整を行った形跡はない。布綴じ痕もよく残っている。観察出来る範囲では布目の経緯本数を数えてみると，Fig. 78のようになる。本文及び観察表では側縁部に平行する側をタテ，端縁に平行する側をヨコとよんでいる。なお数は3cm平方内の本数である。タテは18本～23本，ヨコは18～26本までの資料が最も多い。

ここでも一応赤褐色系統のものと灰褐色系統のものに区別して図示しておく。あまり有意差は見られないが，赤褐色系統のものには，2つの纏まりが見られるようである。

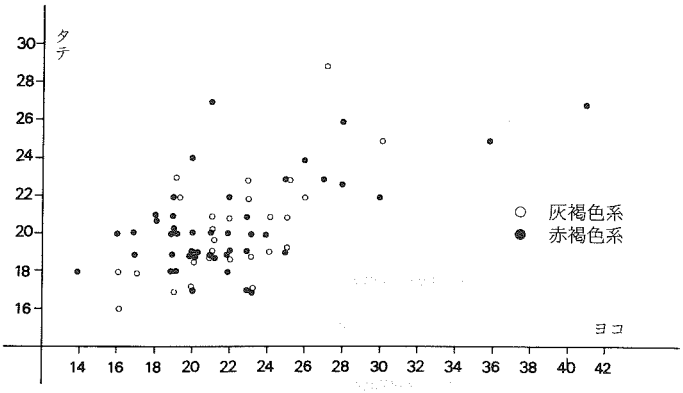


Fig. 78　行基瓦布目経緯本数

② 玉縁丸瓦

前述したように、全体で僅か1.7kgしか出土していない。何れも灰色系統で焼成は甘く、軟質である。胎土には石英粒や砂粒を含む。

製作にあたっては，やはり同筒形をなす成形台を利用しているが，玉縁部を細く作っておいて，段のみにあらためて粘土を加えて成形している。凹面の布目は概して粗である。

13世紀代に比定されるＳＢ５の柱穴から出土した玉縁丸瓦が同じ特長を持つところから考えると，中世に属する資料の可能性が高い。

4 平　　瓦

平瓦は全部で1,455kg出土している。このうちには，破片という理由のものもあるが，全体が摩滅しているために文様が不明となっている資料も500kg含まれる。

出土区別でいくと，ＴＰ11区からは710kgで全体の48％を占める。次がＴＰ14，ＴＰ21区の瓦溜であり，440kgで30％の順となる。

平瓦は主に凸面の調整痕から次のIII類に分類出来る。

Ｉ類　凸面のカキ目状の調整をおこなうもの

II類　凸面に縄目の叩きがあるもの

III類　凸面に格子の叩きがあるものとダイヤ型の叩きがあるもの

これらの資料の内，最も出土量が多いのはＩ類であり，617kgで平瓦出土総量の42％をしめる。次がII類で315kgで21％の比率である。III類は19kgで僅か1.3％の比率でしかない。

以上のことを前提として丸瓦と同じように平瓦の特長を述べておく。

平瓦の大きさ

完形品が出土していないため全容は分からない。比較的大きな破片から推定すると，Ｉ類の資料で長さ33cm，推定重量2.5kgのものがある。II類の資料では長さ32cm，推定重量2kg，III類の格子の叩きを持つもので，長さは不明ながら幅22cm，推定重量２kgの資料がある。それぞれに大幅な時期差が無ければ，長さ32cm前後，幅22cm前後，そして重量は２kgから2.5kg程度の大きさが一般的であったと思われる。

色調・胎土・焼成

色調的には赤褐色系統のものと灰白色系統のものが認められる。前者が圧倒的に多い。ちなみにＩ類では，その比率が最も顕著であり，617kgの出土中，灰白色の資料は10％に満たない。II類は18％，そしてIII類は15％である。

胎土は，石英粒を含む資料が２，３見られるが，概して精選されている。

焼成は全体的に甘いのが多く，特にそれは赤褐色を呈する資料に多い。

成形技法

平瓦の成形は凹面に模骨痕が見られる資料が多いところから所謂桶巻技法による方法が一般的であったと思われ，明確な一枚作りの資料は少ない。

桶に巻く粘土は，丸瓦の場合と同様に粘土板を用いている。その厚さは2.1cm前後が最も多いようである。これは丸瓦でも同様である。7分から8分というのが厚さの尺度であろうか。

粘土の継ぎ目痕は丸瓦の方に好例があるが，佐原氏のいうZタイプ，つまり狭端部を上にしたとき継ぎ目の形がZの字をしている資料が多い。平瓦では観察出来る資料が少ないが，やはり同様の傾向がある。

模骨幅は1.8cmから4.4cmのものまで数種類確認できるが，最も多いのは3.7cmのものである。

分割方法

完形品が無いため，何等分に分割したのかの資料に乏しいが，凹面のカーブから推定した桶の直径には40cm位のものがあり，それによると4分割された可能性が高い。

側縁調整

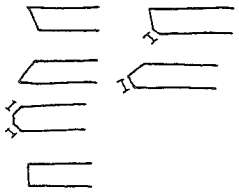
分割後の側縁調整は，丸瓦と異なりかなり丁寧である。ここでも調整方法を次の4種に分類する。

a　基本的に分割面をそのまま残すか，凹面側を小さく面取りする。

b　分割面の凸面側を大きくヘラ削りする。

c　分割面の凹凸面に小さな面取りを行うもの。

d　側縁が鉛直方向に向くもの。



これを種類毎に分類してみると以下のようになる。

	a	b	c	d
I類（赤褐色系）	56	37	7	2
II類（赤褐色系）	3	80	0	0
（灰白色）	2	32	0	0

I類とII類では側縁の処理が大きく異なることが一目瞭然である。時期差であろうか。8世紀中頃に比定されるＳＤ５(Fig. 34)において，すでにI類は出土している。側縁処理が多様さを持ち，なおかつ，分割面をそのまま側縁として大きく変化させない段階を古期とするなら，この遺跡ではI類の出現が早いことになる。ただ，この種のカキ目文様とも言うべき調整方法はあまり類例が無く，管見にふれる例では，熊本県鞠智城跡や大分県法鏡寺跡[註10]・嘘空蔵寺跡[註11]などで散発的に少量出土している程度であり，その系統を知りえない。

凸面調整

I類　カキ目の原体は幅7cmから14cmくらいの板に5本から12本の櫛歯状の抉りを施したもので，側縁に対して必ず直交して調整を行っている。

II類　縄目は全て叩きによってついた調整痕である。全ての資料が一段無節の右撚りの縄目である。叩きの原体の幅は5cm位のものが最も多いが，長さは不明なものが多い。なお，胎土に石英粒を含む

資料は特に焼成が甘く，時期的な差が感じられる。

III類　方1cmの斜格子叩きを持つ資料が数点出土しているが，数量が少ないため，内容は良く分からない。

凹面調整

焼成が甘く，摩滅しているもの以外の資料には，凹面には布目が残るが，この部分に特に再調整をした痕跡は無い。

丸瓦と同じように，観察出来る資料について布の経緯本数を図示しておく（Fig. 79）。

平瓦I類は赤褐色系統のものと灰褐色系統のものに有意差は認められない。

平瓦II類は赤褐色系統の資料が少ないのであまり比較にならないが，灰色系統の資料は，目が粗いものと密なものとにはっきり分かれる。目の粗い資料は，胎土に石英粒を含み，焼成が甘いタイプのものが多い。

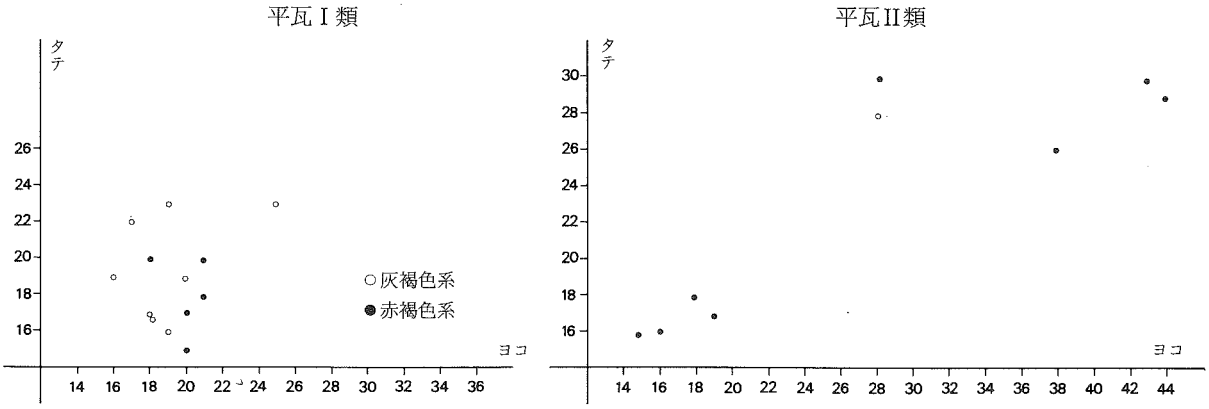


Fig. 79　平瓦I類・II類布目経緯本数

註1　佐原　真　「平瓦桶巻作り」　考古学雑誌　第58巻第2号　1972
　　奈良国立文化財研究所　『瓦編　I　解説』　奈良国立文化財研究所基準資料I　1974　他
註2　九州歴史資料館　石松好雄氏（現福岡県文化課）の御教示による
註3　小沢氏からは，このほか瓦の見方等について種々御教示をいただいた。
註4　小沢氏御教示
註5　石松好雄　「老司式軒丸瓦について」　九州歴史資料館研究論集　8　1982
註6　九州歴史資料館編「九州古瓦図録」　柏書房　1981
註7　小沢氏御教示
註8　森　郁夫　「瓦」考古学ライブラリー43　ニュー・サイエンス社　1986　他
註9　熊本県教育委員会　「平原瓦窯址」　熊本県文化財調査報告　第40集　1980
註10　7世紀代に比定される。熊本県教育委員会「鞠智城跡」熊本県文化財調査報告　第59集　1983
註11　宇佐市教育委員会　「法鏡寺跡・嘘空蔵寺跡」1973

Tab. 7 出土瓦地区別総量

分類	丸瓦			平瓦								計 (kg)
	玉縁	行基		I類		II類		III類		不明		
出土区	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	
TP-11 H		62.3	5.3	68.4	3.7	44.9	6.0	3.1	1.0	102	25.2	321.9
11 II 層		0.3		1.0		0.4				0.3		2.0
11 III 層				0.2								0.2
11 北拡張 H		40.0	6.9	60.9	8.3	27.4	6.5	1.1		24.1	4.4	179.6
11 北拡張 II 層		16.4	1.8	19.1	1.2	14.1	0.8	0.3		10.4	1.4	65.5
11 北瓦集積一括		2.7	0.1	2.9		0.5	0.3			1.1	0.3	7.9
11 西張張 H	1.1	55.0	3.9	50.1	4.9	37.3	4.3	2.3	0.4	49.6	4.9	213.8
11 西拡 II 層				0.7								0.7
11 東拡張 H		2.7	0.7	1.9		1.6				3.6	3.3	13.8
11 東拡張 II 層		10.5	0.5	20.6	1.2	9.1	0.4	0.7	0.1	13.9	2.0	59.0
11 東瓦集積一括		9.5	3.1	18.2	3.8	4.0	0.6	0.2		7.2	2.1	48.7
11 北東隅		0.5	0.2			0.8						1.5
11 東北隅 II 層		0.3		2.0						1.9	0.1	4.3
11 SD 1		0.3		0.2		0.2				0.5		1.2
11 SD 2		11.5	0.5	15.9	1.4	7.4	0.6			7.7	1.1	46.1
11 SD 3		1.4	0.5	1.6	0.1	0.7	0.6			0.8		5.7
11 SD 4				1.2		0.3				0.2		1.7
11 瓦溜		1.1		2.1		0.2				2.8	0.1	6.3
11 礎石周囲		2.3		4.2	0.2			1.9	0.4	6.1	0.9	16.0
11 電柱跡				0.5								0.5
11 P11 一括				0.3				0.1		0.3	0.2	0.9
	1.1	216.8	23.5	272.0	24.8	148.9	20.1	9.7	1.9	231.2	46.0	997.3
TP-12 H		0.3	0.1	0.3	0.1	0.1		0.1		7.4	1.6	10.0
TP-12 II 層		0.1	0.2		0.1			0.1		0.8	0.3	1.6
北 II 層		1.2	0.2	2.2	0.6	0.7				1.9	0.5	7.3
北拡張 II 層				0.1						0.3	0.1	0.5
地山直上		0.3	0.2	0.9		0.3				1.6	0.5	3.8
		1.9	0.7	3.5	0.8	1.1		0.2		12.0	3.0	23.2
TP-13 H		0.6		1.1	0.1	0.2				5.3		7.3
II 層		0.5										0.5
pit 4		0.3				0.6						0.9
pit 1				0.2		0.2				0.3		0.7
		1.4		1.3	0.1	1.0				5.6		9.4
TP-14 H		0.6		1.7		0.2				1.4	0.7	4.6
表土中		0.6		0.6		0.1		0.1		1.7	2.4	5.5
II 層		1.2		2.5		2.7	0.4			2.7	1.6	11.1
II 層瓦溜		0.7		3.1	0.3	1.2	0.2			3.1	0.3	8.9
III 層		7.5	0.1	4.5	0.4	2.2	0.9	0.1		5.3	0.1	21.1
IV 層		0.6		2.1		0.6				0.2		3.5
瓦溜		0.7		0.3						0.4		1.4
東拡張 H		0.7		0.2		0.1	0.2			0.5	0.1	1.8
東拡張 II 層		0.7	0.2	2.3	0.5	0.7	0.2			0.9	0.1	5.6
東拡張 III 層		1.1		3.4	0.3	1.5	0.6			2.1	0.2	9.2
西拡張 H		1.4	0.4	0.9	0.2	0.6		0.4		0.5	0.2	4.6
西拡張 II 層		1.9		3.6		1.5	0.7			1.6	0.4	9.7
西拡張 III 層		0.5		1.3		0.3	0.4			0.1	0.3	2.9
西拡張瓦溜		30.0	2.8	32.0	1.5	18.8	4.5	0.5		14.3	2.2	107.0
西瓦溜		5.8	0.9	10.2	1.3	3.8	0.1	1.8		8.5	0.7	33.1
北壁瓦溜		1.0	0.9	0.3				0.2		0.1		2.5
進入路瓦溜		0.1		1.1	0.8							2.0
K		1.6		3.3		2.9	0.3			0.8		8.9

Tab. 8 出土瓦地区別総量

分類	丸瓦			平瓦								計 (kg)
	玉縁	行基		I類		II類		III類		不明		
出土区	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	
pit 1		0.4		0.6						0.2	0.1	1.3
pit 2				0.1		0.1	0.1			0.3		0.6
pit 4			0.2	0.2		0.2				0.6	0.1	1.3
pit 5										0.2		0.2
pit 6						0.1				0.1		0.2
pit 9										0.1		0.1
pit 23				0.3								0.3
pit 24		0.1										0.1
pit 26		0.6	0.9	0.4	0.9	1.2	0.9					4.9
pit 29		0.2					0.1					0.3
pit 33		0.3										0.3
pit 36		0.1										0.1
pit 40		0.4		0.2		0.2						0.8
pit 41										0.1		0.1
pit 43		0.1		0.3		0.3		0.1		0.1		0.9
pit 44				0.4								0.4
pit 46					0.1					0.1		0.2
pit 47		0.9	0.2							0.1		1.2
pit 48		0.1		0.1	0.1					0.1		0.4
		59.9	6.6	76.0	6.4	39.3	9.6	3.2		46.2	9.5	256.7
TP -15 H		4.1	0.7	13.5	1.5	0.4				4.4	0.8	25.4
瓦溜		3.9	0.2	20.2	2.4	1.6				8.0	1.3	37.6
II層		1.0		0.2		0.2				1.2		2.6
SD 7		0.4		0.4						0.3		1.1
東拡張溝中		0.3		0.2						0.3	0.9	1.7
		9.7	0.9	34.5	3.9	2.2				14.2	3.0	68.4
TP -16 H		0.9		2.7	0.3	0.4				2.6	0.5	7.4
II層				0.3						0.3	0.2	0.8
SD 3		2.0		1.7	0.3					1.8	0.1	5.9
		2.9		4.7	0.6	0.4				4.7	0.8	14.1
TP -17 H						0.2				0.2	0.5	0.9
II層		4.6	0.6	5.2	0.7	3.5	0.4	0.6		10.2	2.6	28.4
III層		2.6		4.5		1.8	0.2			4.8	1.3	15.2
SD 2		0.6		1.5	0.5					1.2		3.8
		7.8	0.6	11.2	1.2	5.5	0.6	0.6		16.4	4.4	48.3
TP -18 H		0.4		1.4	0.1	0.2	0.4			40.4	0.1	3.0
II層		6.1		7.1	0.2	3.9	0.4			5.1	1.1	23.9
III層		7.3	0.5	9.4	1.0	4.4				9.1	1.4	33.1
IV層				1.5		0.3				0.1		1.9
		13.8	0.5	19.4	1.3	8.8	0.8			14.7	2.6	61.9
TP-19 II層		0.9		41.1		0.4				2.1	1.6	6.1
埋土				0.1		0.1				0.4	0.3	0.9
		0.9		1.2		0.5				2.5	1.9	7.0
TP-20 II層瓦溜		0.2	0.1	0.9	0.1	0.1				1.4		2.8
III層瓦溜		3.8	0.2	6.0	0.7	3.0	2.0	0.7		2.2	0.4	19.0
西瓦溜				0.1		0.1						0.2
pit 10					0.1							0.1
12		0.1		0.1	0.1					0.1		0.4
31		0.1		0.1	0.3	0.1				0.1		0.7
32		0.1		0.1		0.1					0.1	0.4
34		0.1		0.2						0.1		0.4

Tab. 9 出土瓦地区別総量

分類	丸瓦			平瓦								計 (kg)
	玉縁	行基		I類		II類		III類		不明		
出土区	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	
		4.4	0.3	7.5	1.3	3.4	2.0	0.7		3.9	0.5	24.0
TP-21 II 層瓦	0.6	2.0		2.3	0.5	1.4	0.3			1.6	0.9	9.6
III 層瓦		1.2	0.3	18.5	3.4	1.8				0.5		15.7
II 層瓦溜		11.5	3.7	14.9	1.0	6.1	1.3			13.3	2.1	53.9
III 層瓦溜		17.5		2.7	0.1	6.6	1.3	0.4		10.7	1.6	40.9
H 西瓦溜		1.6	0.2	1.1		1.2				4.3	6.5	14.9
東瓦溜		9.5		9.0	0.5	0.3				2.6	0.3	22.2
瓦溜		0.1		0.3								0.4
pit 18		0.2								0.1		0.3
西瓦溜		130	91.2	80.1	8.6	37.4	12.9	1.8	0.5	24.0	4.5	391.0
	0.6	173.6	95.4	128.9	14.1	45.8	15.8	2.2	0.5	57.1	159	558.9
TP-23 II 層瓦		0.1		0.2		0.1				0.4		0.8
		0.1		0.2		0.1				0.4		0.8
TP-24 II 層瓦		0.2		0.1		0.1	0.1			0.6		1.1
		0.2		0.1		0.1	0.1			0.6		1.1
TP-25 H 西瓦溜		0.6		0.4						1.3	1.1	3.4
ミゾ		0.1		0.1						0.1		0.3
		0.7		0.5						1.4	1.1	3.7
TP-26 II 層瓦溜		0.1		0.2						0.1		0.4
SD 3		0.4	0.3	1.3	0.2	0.2	0.1			0.7		3.2
		0.5	0.3	1.5	0.2	0.2	0.1			0.8		3.6
合計	1.7	492.2	128.8	562.4	54.7	266.2	49.1	16.6	2.4	413	88.7	2078.4

Tab. 10 丸瓦Ⅰ類観察表（行基瓦）①

単位cm，kg

図番号	出土区	粘土継目	糸切方向	布目糸数 縦	布目糸数 横	縁処理 側	縁処理 端	瓦径 厚	瓦径 長	瓦径 幅	重量	円筒径 広端	円筒径 狭端	色調	焼成	胎土	凸面調整	備考
Fig. 14 13	TP11北H					b		1.9			0.4			赤褐色	甘い		ヨコナデ	熨斗瓦
〃 14	TP11北H								16.8	6.4				〃	甘い			〃
Fig. 20 15	TP14西瓦溜	無	縦	24	20	c	a	2.2	35.2	広 17.2 狭 8.6	1.55			〃	良	精選	タテ	凹面側に破面
〃 16	〃		縦	20	21	d	a	1.9			0.5			明赤褐色	〃	〃	ヨコナデ	
〃 23	〃															〃		
Fig. 33 26	TP16(SD5)	Z	縦	21	19	c	a	2.4	22	広 18	1.7	7.5		赤褐色	良	〃	ヨコナデ	
〃 27	〃 K−13		〃	17	20	b	a	2	17	狭 11	0.7		4	〃	普通	〃	〃	布綴じ痕
Fig. 44 35	TP19 2層								15.6	9.6				暗黄褐色		石英粒		熨斗瓦凸面側破面
Fig. 58 39	TP21西瓦溜		縦	17	19	b	d	2.4	39	広 23 狭 14	2.72			灰褐色	良	精選	タテ	
〃 40	〃		〃	19	20	d	a	2.2	38.6	広 19 狭 11	2.3	8	4	茶褐色	〃	〃	ヨコナデ	
〃 41	〃		〃	17	20	a	b	2.2	38	広 19 狭 12	2.2		5	茶褐色	〃	〃	タメ	
〃 42	〃	Z	〃	27	21	c	a	2.3	35.5	広 16 狭 12	2.4	11.7		〃	〃	〃	ヨコナデ	
〃 43	〃		〃	20	19	c	a	2.2	35	広 21 狭 12	2.4	9	5	赤褐色	甘い	〃	〃	
〃 44	〃		〃	18	19	c	a	2.5	36	広 20 狭 9	2.5			〃	良	石英粒若干	〃	布綴じ痕
Fig. 59 45	〃		〃	20	16	c	a	2.1	36	広 17 狭 11	2	7.5	4.5	〃	甘い	精選	〃	
〃 46	〃		〃	21	22	c	a	2.3	37	広 19 狭 14	2.4			灰褐色	良	〃	〃	
〃 47	〃		〃	20	23	a	a	1.9	37	広 18 狭 10	2.56	7.5	5	赤褐色	〃	〃	ヨコナデ	破面あり
〃 48	〃		〃	19	25	c	a	2.0	35.2	広 17 狭 10	2.4	7	4	茶褐色	〃	〃	〃	凹面側に破面，布綴じ痕
〃 49	〃		〃	17	23	d	a	2.1	35	広 12 狭 10	2.3			赤褐色	〃	〃	〃	布綴じ痕
〃 50	〃		〃	22	19	d	a	2.1	34.6	広 18.5 狭 11	2.5		4	〃	〃	〃	ヨコナデ	
Fig. 60 51	〃		〃	19	23	d	a	1.9	35	広 19.5 狭 12	2.5	8	4	茶褐色	〃	〃	〃	破面あり
〃 52	〃	Z	〃	20	23	c	a	2.1	35	広 17 狭 9	2.5	6.5	3.5	赤褐色	甘い	〃	?	分割裁線の凹み(?)
〃 53	〃		〃	17	23	d	a	2.1	35.4	広 17.5 狭 10.5	2.35	6.5	4.5	〃	良	〃	ヨコナデ	凹面側に破面

Tab. 11 丸瓦Ⅰ類観察表（行基瓦）②

単位cm．kg

図番号	出土区	粘土継目	糸切方向	布目糸数 縦	布目糸数 横	縁処理 側	縁処理 端	瓦径 厚	瓦径 長	瓦径 幅	重量	円筒径 広端	円筒径 狭端	色調	焼成	胎土	凸面調整	備考
Fig. 60 54	ＴＰ21西瓦溜		縦	19	24	d	a	1.8	35	広 15 狭 10	1		5	茶褐色	良	精選	タテヨコ	布綴じ痕
〃 55	〃	S	〃	19	21	c	a	2.1	32.6	広 20.5 狭 12	2.54		4.5	〃	〃	〃	ヨコナデ	
〃 56	〃		〃	19	25	a	a	1.9	34	広 16.6 狭 10	2.2	7.5		灰褐色	〃	〃	〃	凸面側に破面
Fig. 61 57	〃		〃	21	23	c	a	2.1	29	広 16.4 狭 12	2	7	3.5	赤褐色	〃	〃	ヘラ削 ヨコナデ	
〃 58	〃	Z	〃	19	20	c	a	2.2	33	狭 12	2		6	茶褐色	〃	〃	ヨコナデ	
〃 59	〃					a	a	2	32		1.2			〃	甘い			全体摩滅
〃 60	〃	Z	縦	20	22	c	a	2.2	25	広 20	2			赤褐色	良	精選	ヨコナデ	焼成時変形
〃 61	〃		〃	22	26	c	a	2.1	26	広 18	1.55	7		灰褐色	〃	〃	〃	〃
〃 62	〃			20	21	c	a	2.0	25	狭 13	1.6			茶褐色	〃	〃	〃	
Fig. 62 63	〃		縦	19	20	c	a	2.1	28		1.9			赤褐色	甘い	〃	〃	布綴じ痕
〃 64	〃	有	〃			b	d	2.2	25	狭 11	1.4		4	茶褐色	良	〃	〃	〃
〃 65	〃		〃			c	a	1.7	27	狭 12			4.5	淡赤褐色	甘い	〃	?	全体摩滅
〃 66	〃	有	〃	19	21	c	a	2.1	24	狭 13	1.3		5	赤褐色	良	〃	ヨコナデ	
〃 67	〃		〃	19	23	b	d	2.0	21	狭 12	1.2		4	〃	〃	〃	〃	
〃 68	〃	有	〃	20	19	c	a	2.4	20	狭 12	1.3		4.5	〃	〃		〃	布綴じ痕
〃 69	ＴＰ14 pit47		〃	23	26	c		2.4	15		1			灰褐色	〃		タテ	
〃 70	ＴＰ21西瓦溜	Z	〃	18	17	c	a	2.2	20	狭 12			4	〃	〃	大き目の砂粒	タテ	
Fig. 63 71	〃	Z	〃	19	20	a		2.3	11		0.5			赤褐色	〃		ヨコナデ	
〃 72	〃	有	〃	19	21	c	a	1.8		広 14.5	1.1	7		灰褐色	〃		〃	凹面側に破面
〃 73	〃		〃	22	22	c		1.8	15					淡茶褐色	甘い		〃	布綴じ痕
〃 74	〃	S	〃	22	19	c	a	2.1		広 19	0.9	8		灰褐色	良		タテ	
Fig. 64 82	〃	Z	〃	21	18	c	a	2.0	20		0.6			赤褐色	良		ヨコナデ	熨斗瓦
Fig. 65 86	〃		〃	27	22				22	9.8				灰褐色	〃		タテ	〃

Tab. 12 丸瓦II類観察表（玉縁丸瓦）

単位cm. kg

図番号	出土区	粘土継目	糸切方向	布目糸数		縁処理		瓦径			重量	円筒径		色調	焼成	胎土	凸面調整	備考
				縦	横	側	端	厚	長	幅		広端	狭端					
Fig. 10 1	TP11(SD3)	有		粗	粗	11	14	1.8	8.2	12.2				灰白色	甘い	石英粒,砂粒	不明	玉縁は直立
Fig. 14 5	TP11東瓦溜	有		19	16	a								暗灰色	甘い	雲母	ヨコナデ	凸面側に破面
〃 6	〃 西拡張H	有		18	19	a	a	1.9	13.5	8.2				黄灰色	甘い	石英粒,雲母	ヘラ削り ヨコナデ	布綴じ痕，玉縁4.3cm
〃 7	〃	有		38		a		1.8	10.5	12				暗灰色	甘い	砂粒，石英	ヨコナデ	玉縁3.6+α
Fig. 47 36	TP21(SD5)	有		粗	粗			1.6	7	10				灰色	甘い	石英粒,砂粒	縄目	玉縁は直立，磨滅
Fig. 63 75	TP21西瓦溜	有						1.4	12.3	9				淡黄灰色	不良	砂粒		摩滅，玉縁7.6cm
〃 76	〃	有		粗	粗			1.8	10.5	8.5				暗灰色	甘い	石英粒	縄目	玉縁直立
〃 77	〃	有				15	17							黄灰色	甘い	石英粒,金雲母		

Tab. 13 平瓦I類観察表

単位cm. kg

図番号	出土区	製作技法	模骨巾	粘土継目	糸切方向	布目糸数		縁処理		瓦径			色調	焼成	胎土	凸面原体種類	備考
						縦	横	側縁	端縁	厚	長	幅					
Fig. 14 8	TP11北H				縦			d	a	2.3			暗赤褐色	良			
Fig. 14 10	〃	桶巻	1.8		〃	17	20	a	a	2.1			灰褐色	〃			
Fig. 14 12																	
Fig. 20 17	TP14西瓦溜				縦	19	16	f	a	2.3	23	17	淡赤褐色	甘い		幅 7.4, 8 本	曲率径20cm
Fig. 20 18	TP14 4層上	桶巻	2.2		〃	17	18	e	b	2.4	16	11	赤褐色	良		幅 7.7, 6 本	縄目の上にカキ目
Fig. 20 19	TP14西瓦溜				〃			a	a	1.9			〃	〃		幅 8.6, 9 本	曲半径20cm
Fig. 27 25	TP15東瓦溜				〃	18	21	b	a	2.2			灰褐色	良			
Fig. 34 28	TP16H	桶巻	3.7		〃			d	a	2.3	21	20	赤褐色	〃		幅 9.8, 8 本	
Fig. 34 29	〃				〃			b	a	2.7	20	16	〃	甘い		幅 8.5, 7 本	
Fig. 42 34	TP18 3層				〃			e		2.0			茶褐色				
Fig. 64 78	TP21西瓦溜	桶巻	3.7		〃	23	25	c	a	2.3	33	19	〃	甘い		幅 14 cm, 12本	
Fig. 64 79	〃	〃	4.3		〃			d		2.6			〃	良			破面あり
Fig. 64 84	〃	〃	4		〃	17	18	a	a	3	19	13	〃	〃		幅 7.5 cm, 5本	熨斗瓦
88	TP23				〃			a	a	2.9	17	14	暗赤褐色	〃		幅 7.2, 6 本	

Tab. 14 平瓦II類観察表

単位cm. kg

図番号	出土区	製作技法	模骨巾	粘土継目	糸切方向	布目糸数		縁処理		瓦径			色調	焼成	胎土	凸面原体種類	備考
						縦	横	側縁	端縁	厚	長	幅					
Fig. 10 2	TP11(SD3)	桶巻	3.7	Z	縦	24	38	c		2.2			灰白色	堅緻	精選		叩きの上にヨコナデ
Fig. 14 9	T P 11 H	〃	2.7		〃			c	b	2			赤褐色	良	〃	R(ℓ ℓ 2種あり	
Fig. 20 20	TP14西瓦溜	〃	4.2		〃			b		1.9	21	20	明赤褐色	甘い	〃	R(ℓ ℓ	8㎜の孔あり
Fig. 20 21	〃				斜め				a	1.6	11	14	灰色	〃	石英粒	幅5cm	
Fig. 20 22	〃					15	19		a	1.5			暗灰褐色	〃	〃		軟質
Fig. 38 30	TP17 2層					16	18	b	a	2.6	13	17	灰褐色		〃		桶半径21
Fig. 38 31	〃				縦	28	43	c		1.9			灰色	堅緻	精選	R(ℓ ℓ	桶半径14.5
Fig. 41 33	TP18 2層	桶巻	3.7		縦			c	b	2.0	32	18	明赤褐色	甘い	〃	〃	1.55kg
Fig. 64 80	TP21西瓦溜	〃	4.4					c	b	2.3		21	赤褐色	甘い	〃	2種	桶半径21
Fig. 64 81	〃	〃	3.8		縦	28	28	c	a	1.8	20	17	灰色	〃	〃	不鮮明	〃 20
Fig. 66 87	〃	一枚作り			縦			c	a	1.9	18	17	赤褐色	〃	〃	長さ8.3、幅4.3	糸9本

Tab. 15 平瓦III類観察表

単位cm. kg

図番号	出土区	製作技法	模骨巾	粘土継目	糸切方向	布目糸数		縁処理		瓦径			色調	焼成	胎土	凸面原体種類	備考
						縦	横	側縁	端縁	厚	長	幅					
Fig. 14 11	TP11北拡H							b		1.9	10	7	暗茶褐色	甘い			I類と複合
Fig. 64 83	T P 21 西瓦			有	縦	密	密	c	a	2.4	26	21	灰白色	甘い		長さ8.1cm 幅6cm	斜格子

Ⅳ まとめ

壱岐国の成立時期については諸説があるが，続日本紀の慶雲三年（706）七月条に「九国三島」とみえるところから，遅くとも大宝令の施行前後であろうと言われている。[註1]

養老令の規定によると，壱岐・対馬は下国とされ，国司として守一人，目一人が置かれた。ただ，壱岐・対馬の場合は令の上でも特別地域として規定されており，一般の職掌以外に対外的防備の役目が附加された。両地域には，天智天皇二年（663）白村江の敗戦による結果，防人がおかれている。

天平十三年（741）聖武天皇による国分寺建立の詔が発せられ，[註2] これによって壱岐にも国分寺が建立されることとなった。しかし，国分寺の建立にはそれ相当の経費が必要である。壱岐についての古記録をみても，

天平宝字七年（763）癸卯「壱岐疫病，賑給する」続日本紀

天平神護元年（765）乙巳「……，壱岐，……七国飢饉，賑給する」続日本紀

神護景雲三年（768）戊申「壱岐島飢饉，賑給する」続日本紀

宝亀七年　　（776）丙辰「壱岐島大風，苗子を損じ，今年の調を免じる」続日本紀

など，度重なる天災地変等による損害も大きく，新たに官寺を建立するほどの経済基盤があったか疑わしい。このような事情のせいであろうか，新しく一寺を建立することを断念し，従来あった壱岐直の氏寺をこれに充てたとされている。[註3] 僧数も他の国分寺が二十僧という規定であるのに比して五口とされた。また名称も特に嶋分寺とされ，その維持にあたっては，筑前，肥前，肥後，豊後，日向等の九州諸国が経費を分担している。[註4・5]

壱岐直の氏寺を何時の段階で嶋分寺に充てたのかの記録は無い。天平勝宝八年（756）諸国の国分寺に仏具の領賜があった時も，九州では筑後，肥前，肥後，豊前，豊後，日向の六国に対してであり，薩摩，大隅，壱岐，対馬，多禰の二国三島の記載は無く，[註6] この段階ではまだ国分寺としての機能を果たしていなかったものと思われる。

その後，壱岐嶋分寺に関しては，承和十一年（844）大隅，薩摩，壱岐三カ国の講師を復したという記録と，[註7] 安和三年（970）天満宮安楽寺草創に際して，壱岐嶋分寺中浜荘を寄進したとの記録が残っていると言う。[註8]

これによると，壱岐嶋分寺は確実なところでは9世紀中頃から10世紀終り頃までは機能していたことになる。この問題について，発掘調査による成果から考えてみよう。

遺構と土器の項で触れた如く，最も古い遺構はＳＢ３柱穴列とＳＤ５出土の土器であり，８世紀中頃までさかのぼる。ＳＢ２はこれより少し新しいもので８世紀後半頃に比定出来る。版築基壇を持つＳＢ１周辺及びそれに付随するＳＤ２からは８世紀後半から10世紀にかけての資料が出土しているが，９世紀後半から10世紀にかけてのものが多い。またＴＰ20とＴＰ21の３層出土の土器の中には８世紀後半から終末の資料が見られる。

この他，ＳＢ５やＴＰ24の瓦溜の中からは13世紀代の土器が含まれており，時期的には一時期断絶

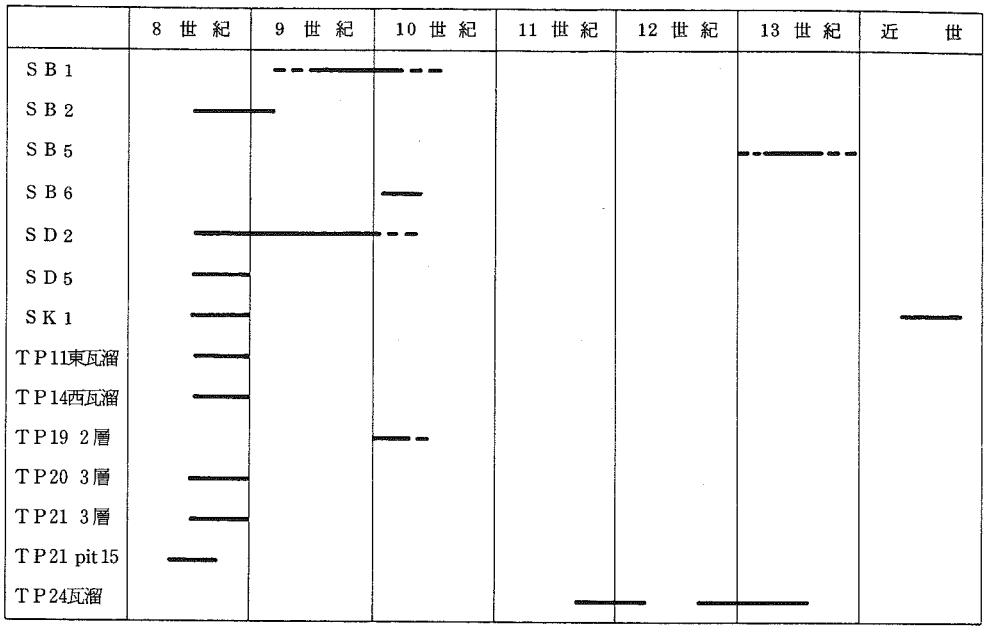


Fig. 80　遺構別時期変遷図

が見られる。

壱岐直の氏寺を何時の段階で嶋分寺に転用したかについては，なお推定の域を出ないが，少なくとも８世紀の中頃から後半にかけては，その基になる氏寺は存在していたものと思われる。しかし，どの程度の規模の寺であったのかは，いまだに判然としない。確実なのは，北側の東西に延びるＳＤ５と西側に位置するＳＢ２とＳＢ３の柱穴列であり，版築基壇を持つＳＢ１とは時期が多少ずれる可能性がある。出土瓦の量をみると，例えばＴＰ14，ＴＰ21の瓦溜出土総量は丸瓦345kg，平瓦440kgであり，それぞれの平均重量で割ると丸瓦138枚，平瓦220枚程度となる。大分県宇佐弥勒寺[註12]の場合，出土瓦の枚数から葺く屋根の面積を計算した結果，平瓦160枚，丸瓦81枚で約８㎡という数値が推定されている。瓦の大きさにも若干の違いがあるため単純には比較できないが，参考になるだろう。

以上のことから推測すると，壱岐直の氏寺としての創建時の姿は一定の伽藍配置に基ずく規模であったとは考えにくくなる。しかし，規模の大小は別としても，瓦葺きの建物があったことは事実であり，平城宮系軒丸瓦の出土がそれを裏付けている。

壱岐嶋分寺出土の6284Ａ型は平城宮においては第Ｉ期（和銅元年～養老５年）に使用された瓦[註9]であり，同范の資料は大和大安寺，山背長岡宮などで出土[註10]している。時期的には８世紀第II四半期にあたるとされる。何らかの理由で平城宮で不要になった范を壱岐に運び，再使用したとすれば，その時期以降になることは自明である。ただし，瓦の項で説明した如く，壱岐嶋分寺で出土した軒丸瓦は極めて少量であり，また丸瓦の取り付け部が180°異なる資料があることは，恐らく数回にわたって焼いたことが推定されるが，どの程度の期間范が使用保存されたかは現在のところ不明である。

九州の初期寺院に使用された古瓦は，畿内系，朝鮮系，太宰府系の３種に分類されるが，その盛行する時期はほぼ国分寺の出現する頃までであるとされる。以後は太宰府の強力な政治的地位を背景と

して，肥後を除く各地の国分寺には太宰府系の古瓦が大きく躍進すると言われている[註11]が，その中にあって平城宮系の軒丸瓦と平瓦の范のみを使用している事実は，海人族として九州から朝鮮半島にかけて活躍したといわれる壱岐氏と中央政権との強い結び付きを示すものであろうか。

この国分寺一帯には，6世紀末から7世紀にかけての大規模な古墳が集中し，その中には朝鮮半島との関係を示すアクセサリーや土器等が含まれている例がある。それらの古墳はこの壱岐氏一族の墓ではないかと推定されているが，連綿と続く壱岐氏の力が国家仏教政策奨励による造寺につながったものであろう。

嶋分寺のその後の推移については，遺物の面からみる限り10世紀で一旦衰退したことが伺われる。壱岐は2度にわたって外敵の侵攻を受けている。1回目は寛平六年(894)新羅賊によって襲撃され[註15]，官舎等がことごとく焼亡せられたとの記録がある。但し，寺が焼亡したとは書いていない。2回目の被害は寛仁三年（1019）で，刀伊の入寇と呼ばれている。壱岐嶋司をはじめほぼ全滅に近い被害であったと言う。前述した如く，現在までの調査によると11世紀代の遺物は顕著でない。つまり，その頃までにはすでに嶋分寺は機能していなかった可能性が強く，もし嶋分寺衰退の原因の一つとして外敵の侵入があげられるなら，この2回の侵攻は時期的に一致する可能性がある。

現在，壱岐において古代瓦の出土はこの国分地域を除いて他に知られていない。瓦窯址の発見は今後の重要な課題である。また，壱岐の国府については，この国分周辺であったとする説[註13]と，芦辺町湯岳興触周辺とする説がある[註14]。現在湯岳周辺において当時の遺跡を示す遺物の発見は希薄であるが，「大古墳のあるような地を避ける傾向がある[註16]」という意見は暗示的である。

註1　竹内理三『古代編』長崎県史所収　長崎県　1970
註2　『続日本紀』天平十三年二月乙巳条
註3　『延喜式』玄蕃寮
註4　『延喜式』主税式
註5　『続日本紀』天平十六年七月申申条
註6　『続日本紀』天平勝宝八歳十二月己亥条
註7　『類聚三代格』三　諸国購読師事承和十一年四月十日官符
註8　『太宰府資料』上世編第五分冊　山口麻太郎氏論文「国分寺の研究」による
註9　奈良国立文化財研究所　「平城宮発掘調査報告Ⅻ」1985
註10　奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所基準資料Ⅷ　瓦編　8」1981
註11　小田富士雄「西海道の古瓦―国分寺の出現まで―」角田文衛編　新修国分寺の研究　第五巻下　西海道　1987
註12　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館「弥勒寺」1989
註13　吉田東伍「大日本地名辞書」第3巻　明治40年
註14　日野尚志「壱岐嶋の国府・郡家について」史学研究　第130号　1976
註15　『日本紀略』には寛平七年とあるが、寛平六年の間違いであるとの指摘がある。註1文献
註16　註1文献

図　　版

ＰＬ．１　調査風景

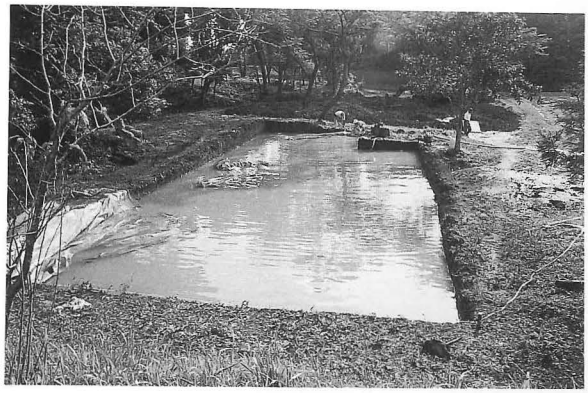
遠　景

近　景

近　景

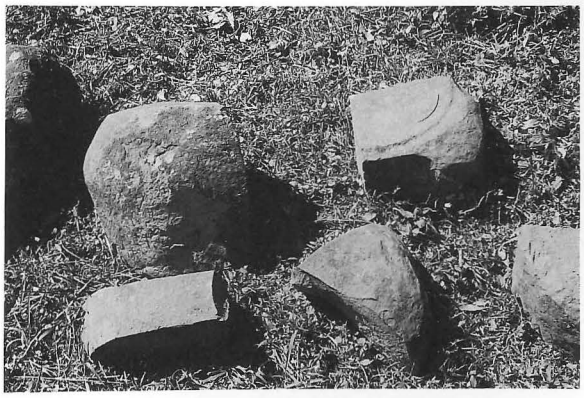
調査風景

調査風景



雨後の冠水状態

調査風景



残存礎石

PL. 2　TP11区

調査前

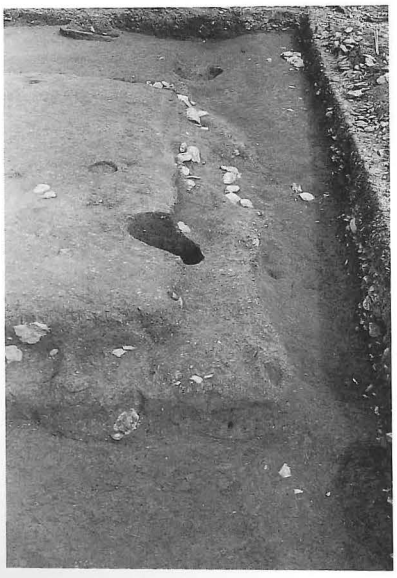
調査状況

基壇　南側より

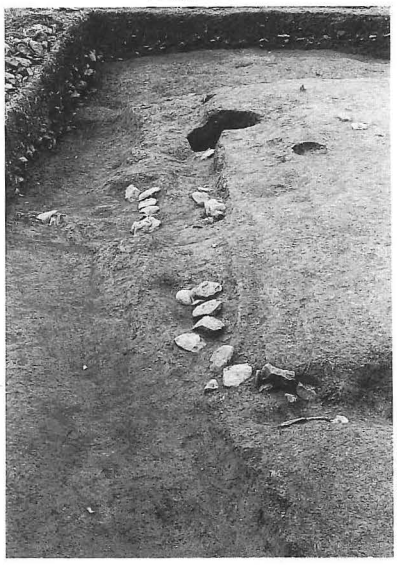
同　南側階段部分

東側より

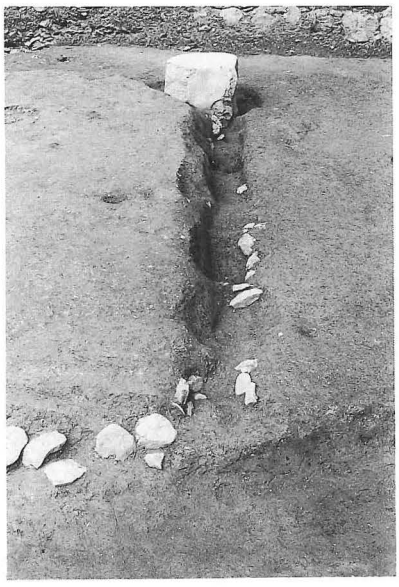
西側より



東側より



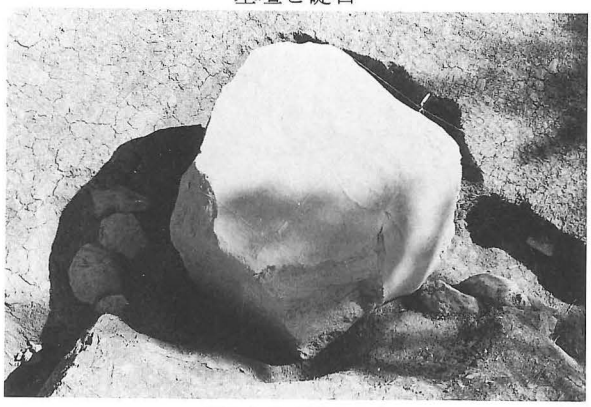
南側より



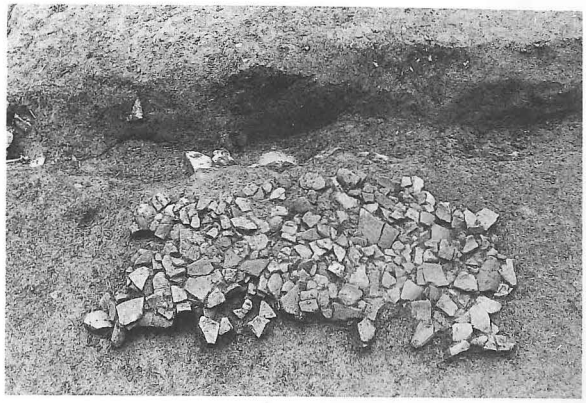
PL. 3　TP11区

基壇と礎石

礎石周辺



礎石（西側より）



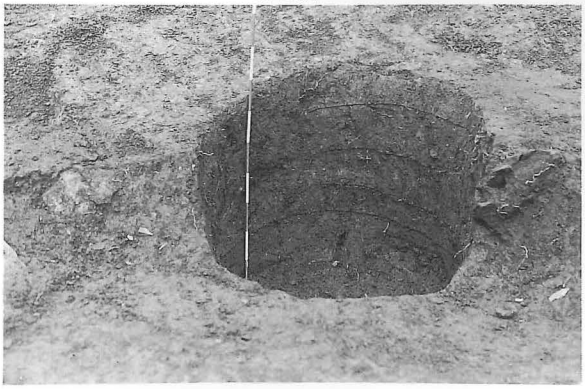
東瓦溜

東壁

東瓦溜と礎石

西壁

電柱跡



PL. 4　TP14・TP15区

TP14区（西側より）

TP14区（東側より）

TP14　2層遺物出土状況

TP14　北壁

TP14　西瓦溜

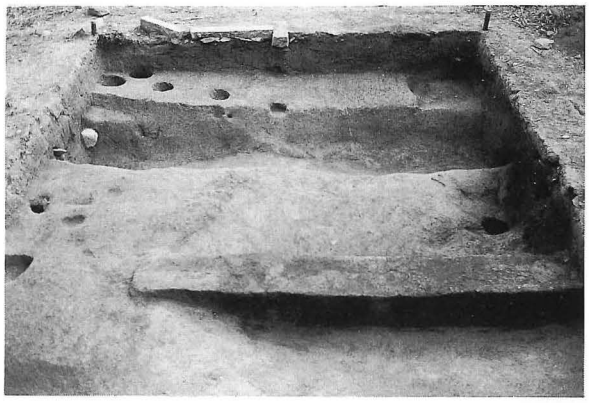
TP15区（東側より）

SD7（西側より）

TP15（SK1）

TP15　西溜

PL. 5　TP16区

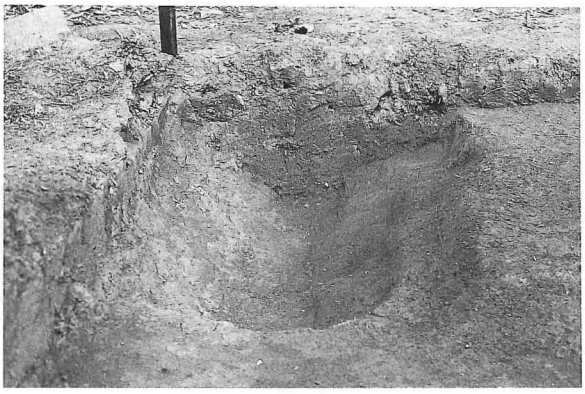


TP16区　全景

左SD6　右SD5

SD5（東側より）

SD5（東側より）



SD6（西側より）

SD5（西側より）

土器出土状況

PL. 6　TP17・TP18・TP24区

TP17区（東側より）

TP18区（南側より）

同上

TP17区　SD4

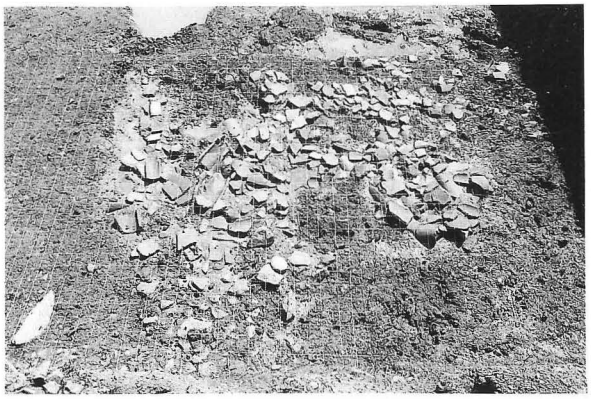
TP24区（東側より）

TP24　SB6

PL. 7　TP14・TP20・TP21区

全景（東側より）

全景（西側より）



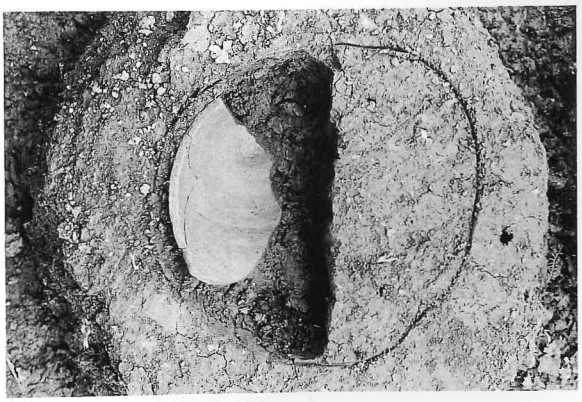
TP21　西瓦溜

同左

同上

同上　下層

TP21　東瓦溜



SB5　柱穴遺物出土状況

PL. 8 土器①

Fig. 7－1

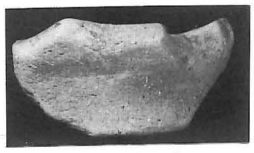


Fig. 7－2

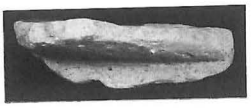


Fig. 7－3

Fig. 8－1

Fig. 8－2

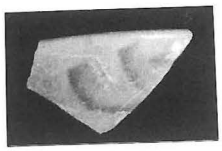


Fig. 8－3

Fig. 8－4

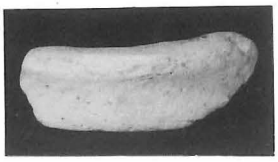


Fig. 8－5

Fig. 8－6

Fig. 8－7

Fig. 8－8

Fig. 8－9

Fig. 8－10

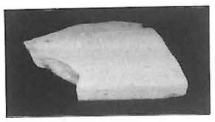


Fig. 11－1

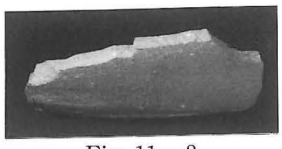


Fig. 11－2

Fig. 12－1

Fig. 12－2

Fig. 12－3

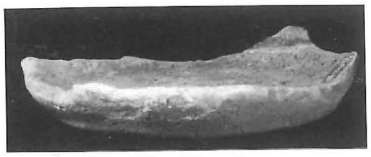


Fig. 12－4

Fig. 12－5

Fig. 12－6

Fig. 12－7

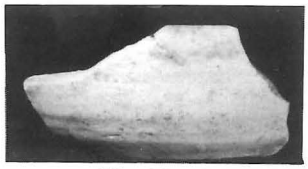


Fig. 12－8

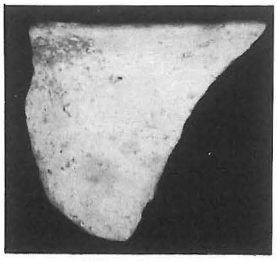


Fig. 12－9

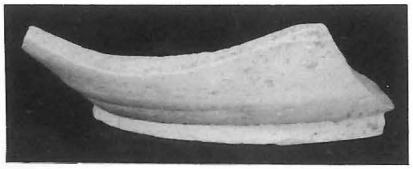


Fig. 12－10

Fig. 12－11

Fig. 12－12

Fig. 12－13

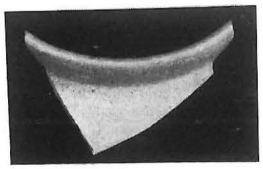


Fig. 12－14

PL. 9 土器②

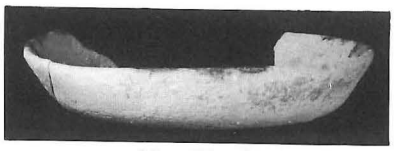


Fig. 15—8

Fig. 15—2

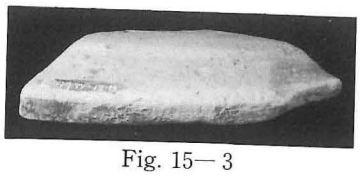


Fig. 15—3

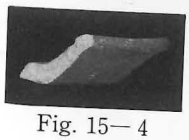


Fig. 15—4

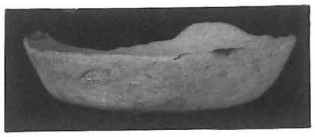


Fig. 17—1

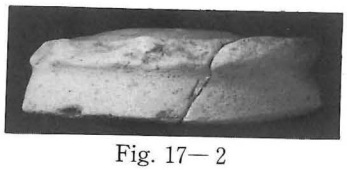


Fig. 17—2

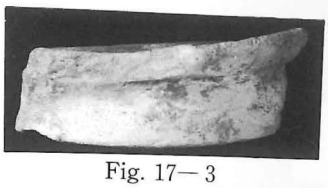


Fig. 17—3

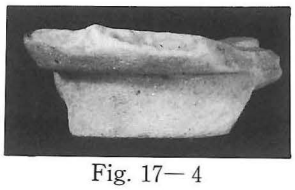


Fig. 17—4

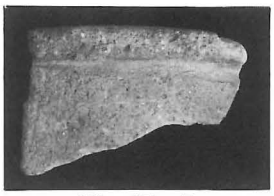


Fig. 17—5

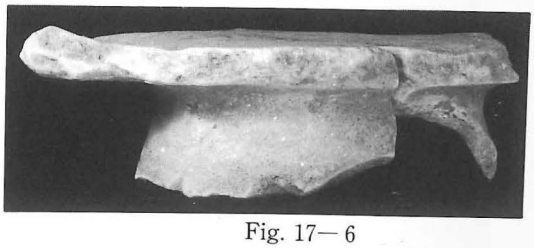


Fig. 17—6

Fig. 17—7

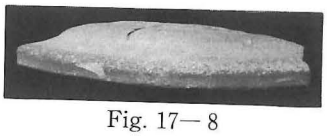


Fig. 17—8

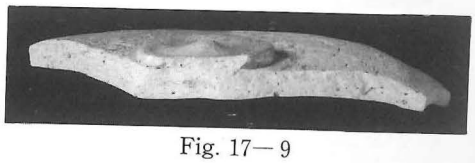


Fig. 17—9

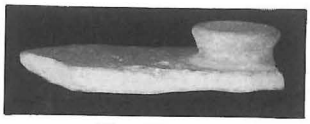


Fig. 17—10

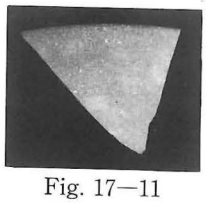


Fig. 17—11

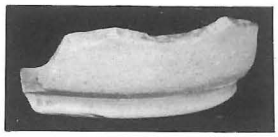


Fig. 17—12

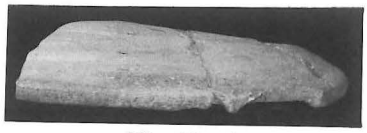


Fig. 19—1

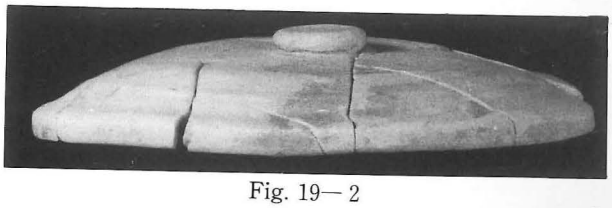


Fig. 19—2

Fig. 19—3

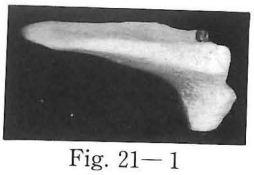


Fig. 21—1

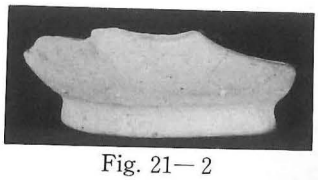


Fig. 21—2

Fig. 21—3

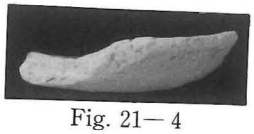


Fig. 21—4

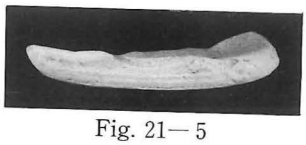


Fig. 21—5

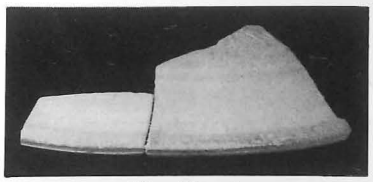


Fig. 21—6

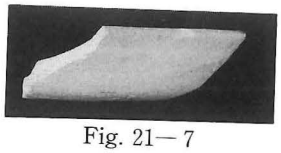


Fig. 21—7

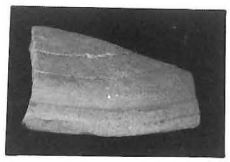


Fig. 21—8

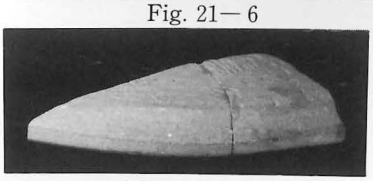


Fig. 21—9

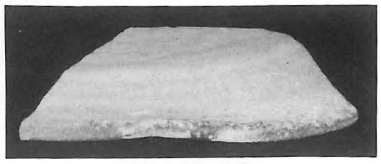


Fig. 21—10

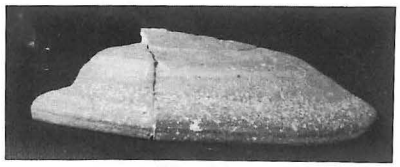


Fig. 21—11

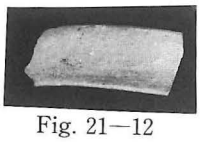


Fig. 21—12

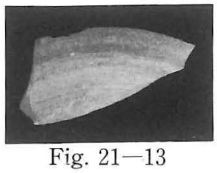


Fig. 21—13

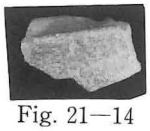


Fig. 21—14

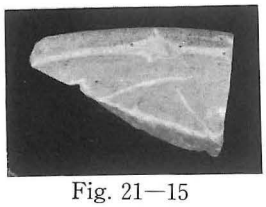


Fig. 21—15

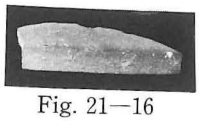


Fig. 21—16

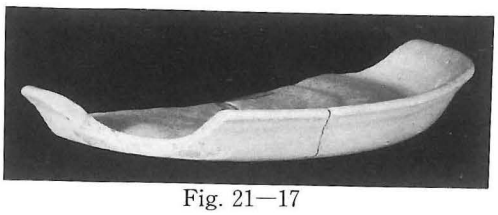


Fig. 21—17

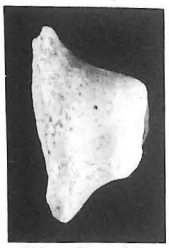


Fig. 21—18

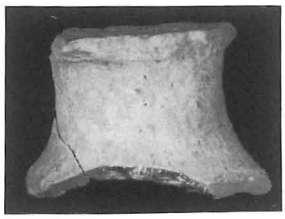


Fig. 18— 1

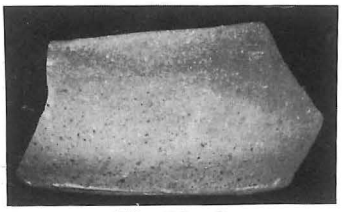


Fig. 18— 2

Fig. 18— 3

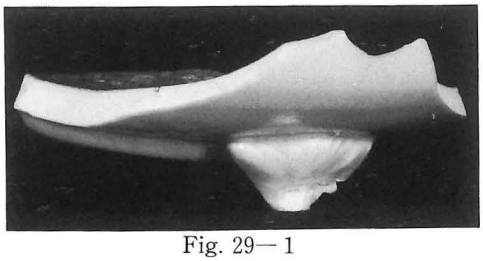


Fig. 29— 1

Fig. 29— 2

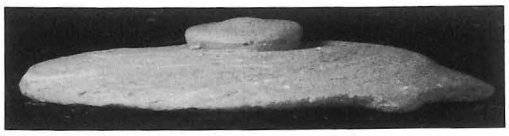


Fig. 31— 1

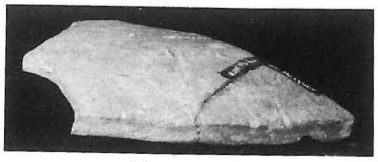


Fig. 31— 2

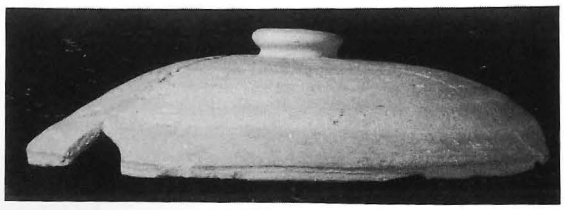


Fig31— 3

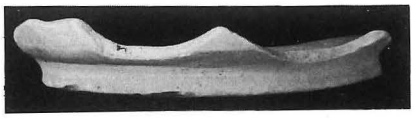


Fig. 32— 1

TP14出土遺物(58～66)・SB 2 (67～69)・SK 1 (70～71)・SD 5 (72～74)・SD 6 (75)

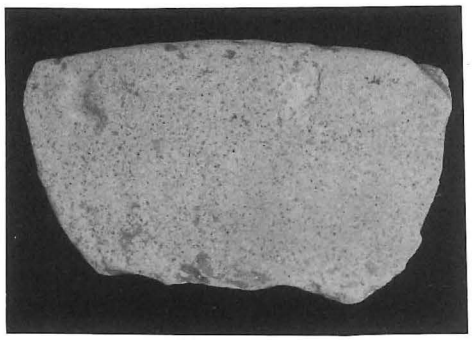


Fig. 36—1

Fig. 36—2

Fig. 36—3

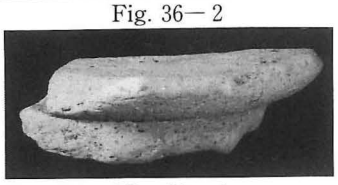


Fig. 36—4

Fig. 36—6

Fig. 36—7

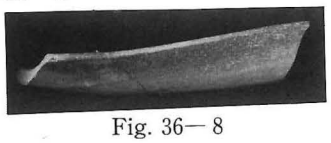


Fig. 36—8

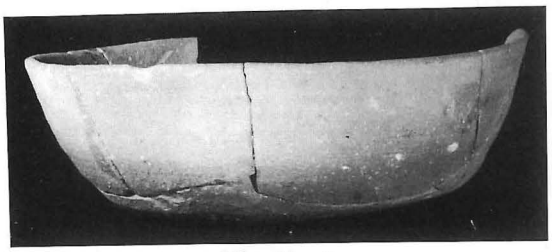


Fig. 36—9

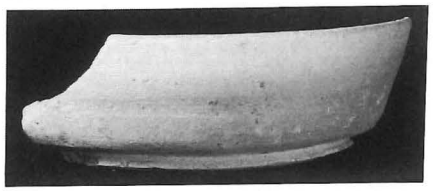


Fig. 36—10

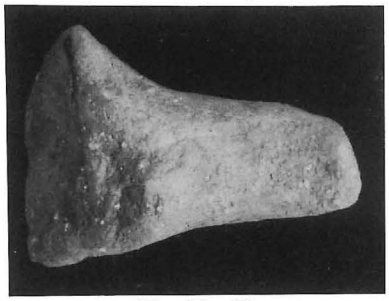


Fig. 36—12

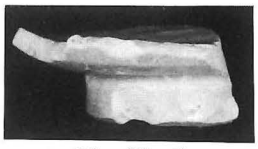


Fig. 37—1

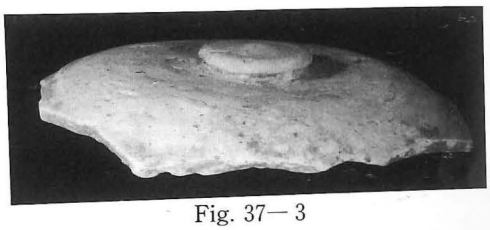


Fig. 37—3

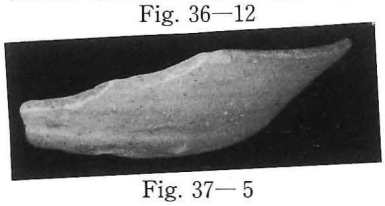


Fig. 37—5

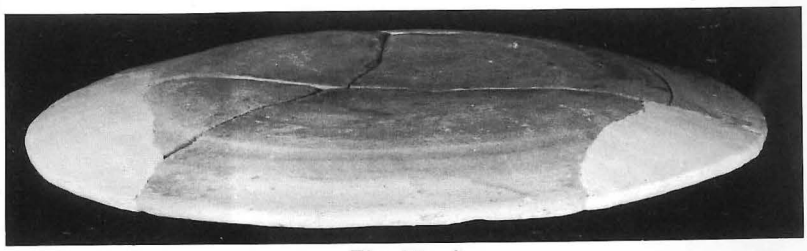


Fig. 37—2

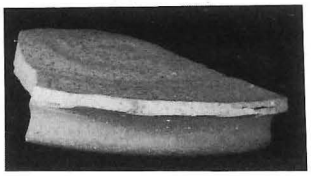


Fig. 37—6

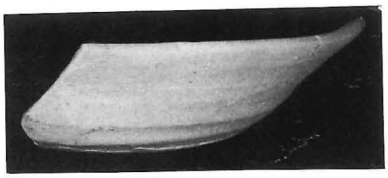


Fig. 37—4

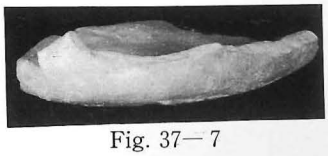


Fig. 37—7

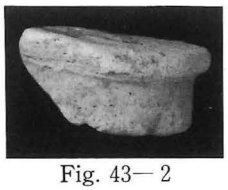


Fig. 43—2

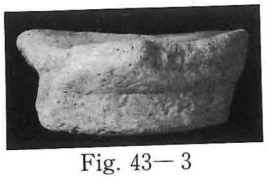


Fig. 43—3

Fig. 43—1

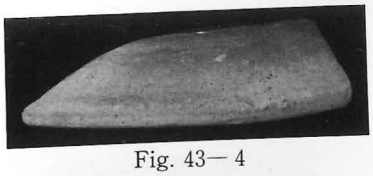


Fig. 43—4

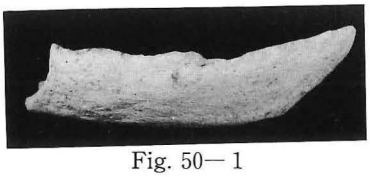


Fig. 50—1

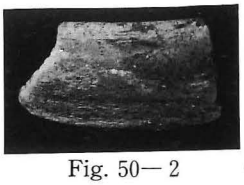


Fig. 50—2

Fig. 45—1

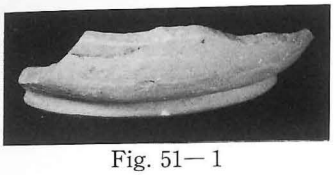


Fig. 51—1

Fig. 52—1

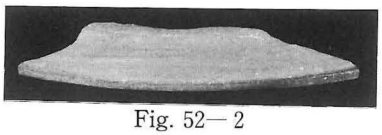


Fig. 52—2

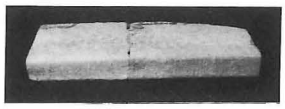


Fig. 52—3

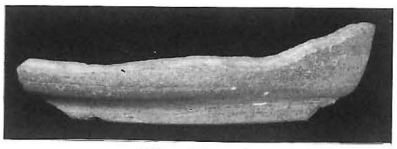


Fig. 52—4

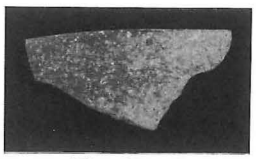


Fig. 52—5

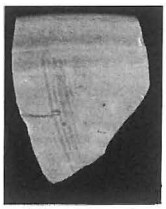


Fig. 55—1

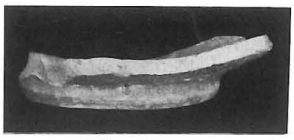


Fig. 55—2

Fig. 55—3

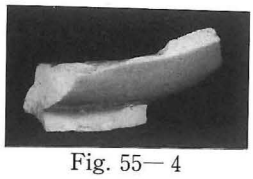


Fig. 55—4

Fig. 55—6

Fig. 55—5

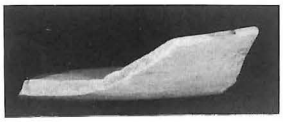


Fig. 52—18

Fig. 55—7

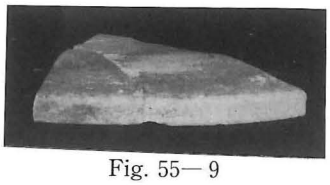


Fig. 55—9

Fig. 55—10

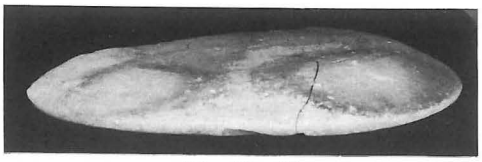


Fig. 55—11

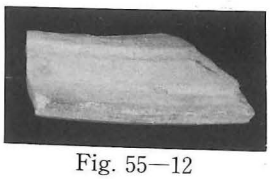


Fig. 55—12

Fig. 55—13

Fig. 55—14

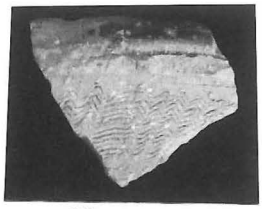


Fig. 55—15

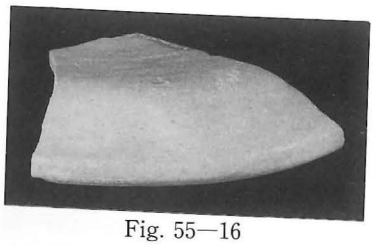


Fig. 55—16

Fig. 55—17

Fig. 55—8

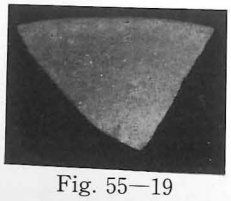


Fig. 55—19

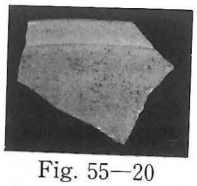


Fig. 55—20

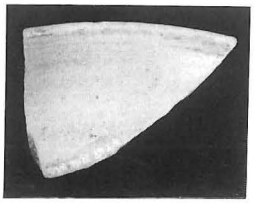


Fig. 55—21

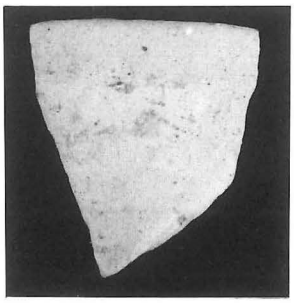


Fig. 55—22

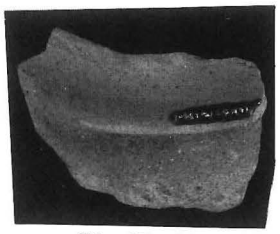


Fig. 55—23

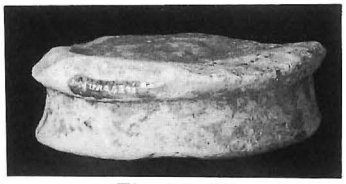


Fig. 55—24

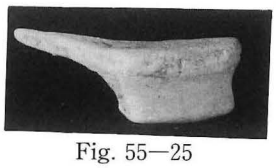


Fig. 55—25

Fig. 55—26

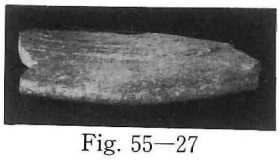


Fig. 55—27

Fig. 55—28

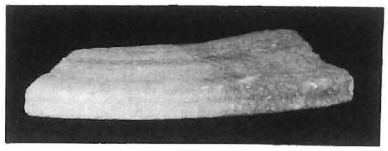


Fig. 55—29

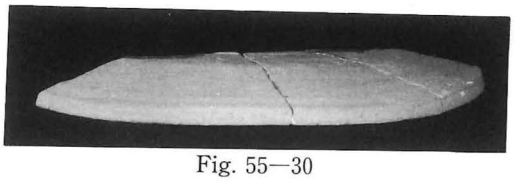


Fig. 55—30

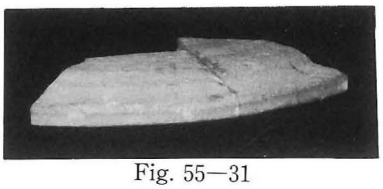


Fig. 55—31

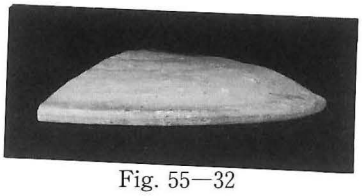


Fig. 55—32

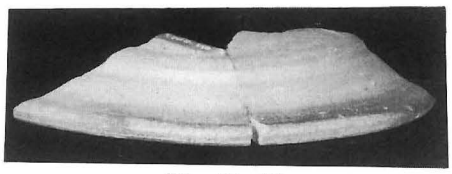


Fig. 55—33

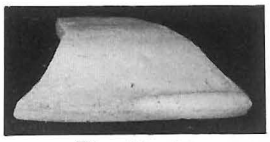


Fig. 55—34

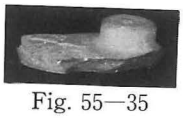


Fig. 55—35

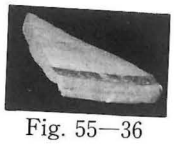


Fig. 55—36

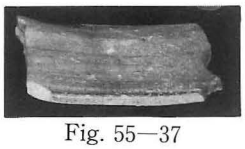


Fig. 55—37

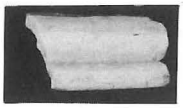


Fig. 55—38

Fig. 55—39

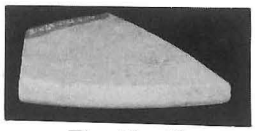


Fig. 55—40

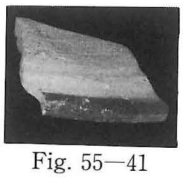


Fig. 55—41

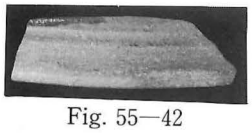


Fig. 55—42

Fig. 55—43

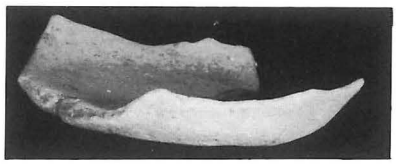


Fig. 56—44

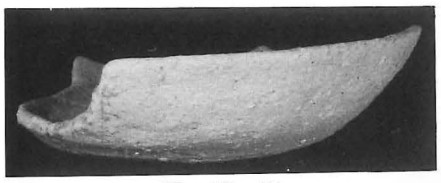


Fig. 56—45

Fig. 56—46

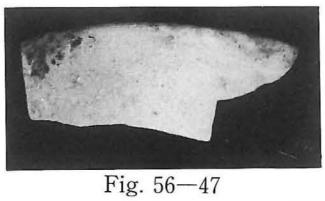


Fig. 56—47

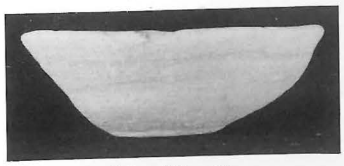


Fig. 56—48

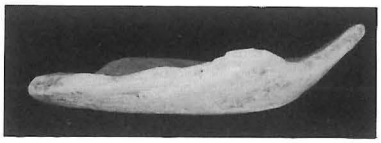


Fig. 56—49

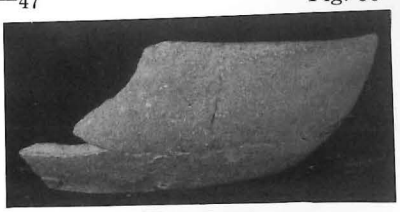


Fig. 56—50

PL. 14 土器⑦

Fig. 56—51

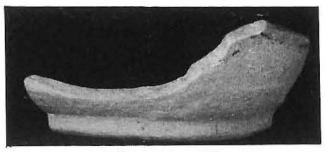


Fig. 56—52

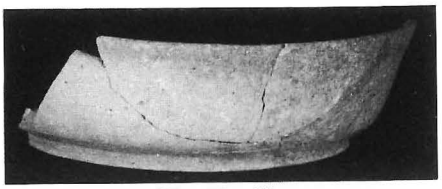


Fig. 56—53

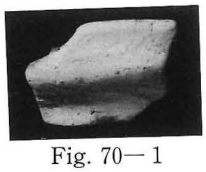


Fig. 70—1

Fig. 56—54

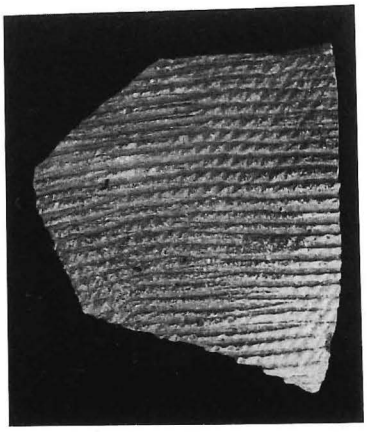


Fig. 56—56

Fig. 56—55

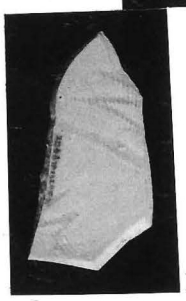


Fig. 72—1

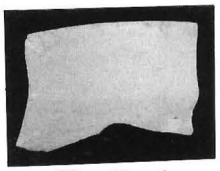


Fig. 71—1

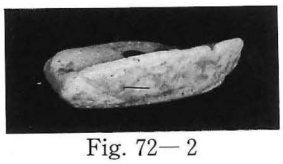


Fig. 72—2

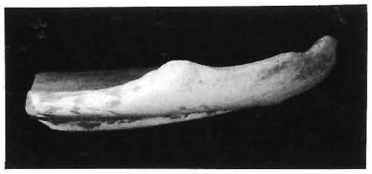


Fig. 72—3

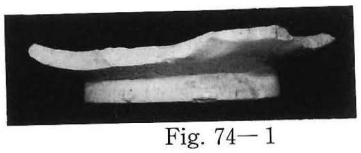
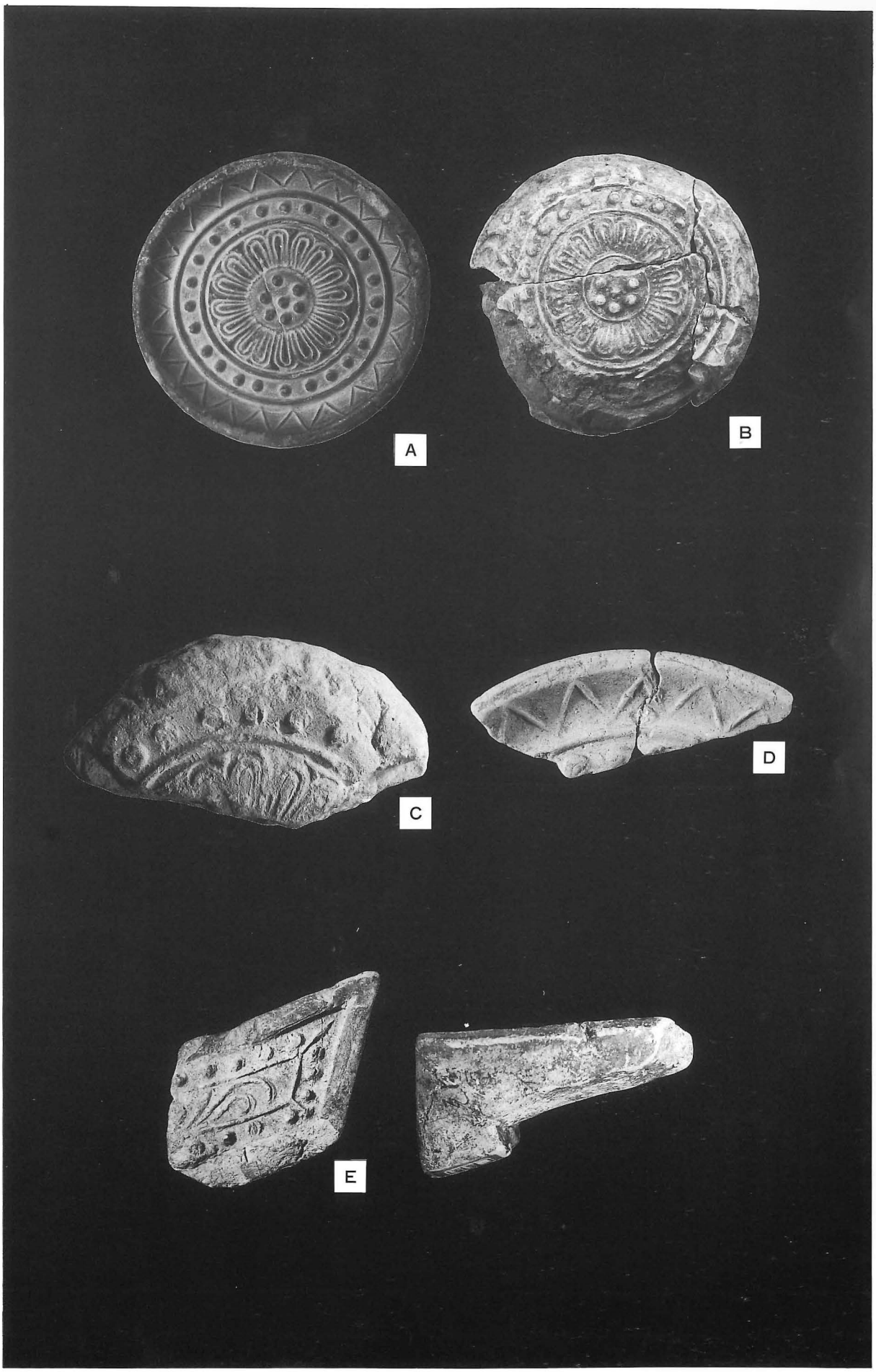


Fig. 74—1

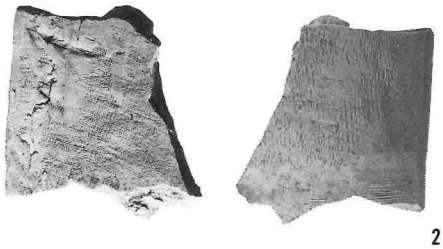
ＰＬ．15　平城宮出土軒丸瓦及び壱岐嶋分寺出土軒丸・軒平瓦



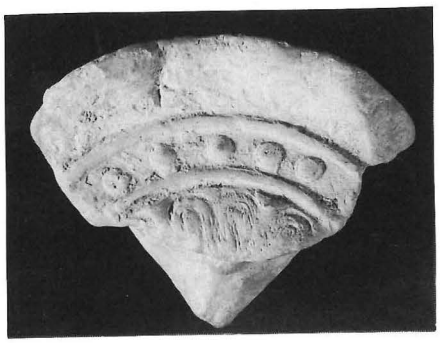
A．平城出土6284A型式　E．表採軒平瓦（長崎県立美術博物館蔵）　A，B（1/4）　他（1/2）

PL. 16 瓦

1



2

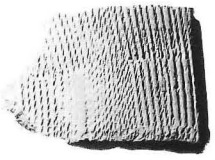


3

4

6

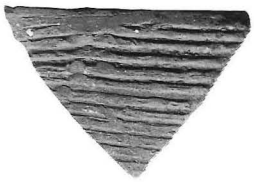
7



9

10

11



12

13

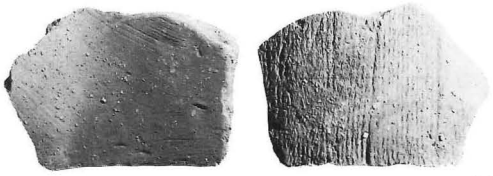
3.4 (½) 他 (⅕)

PL. 17 瓦

15

17

20



21

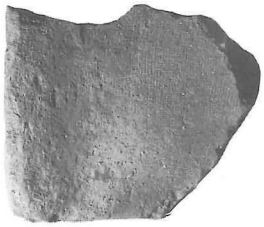
24

28

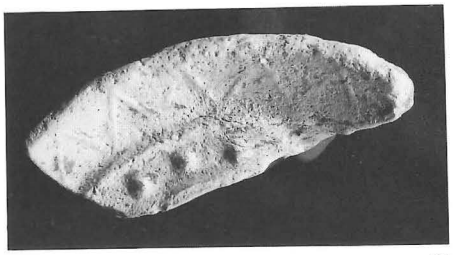
29

24（$\frac{1}{2}$）他（$\frac{1}{5}$）

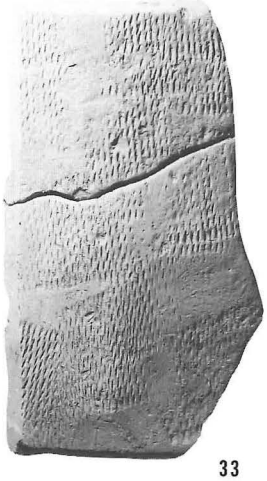
PL. 18 瓦



30



32



33

37

38

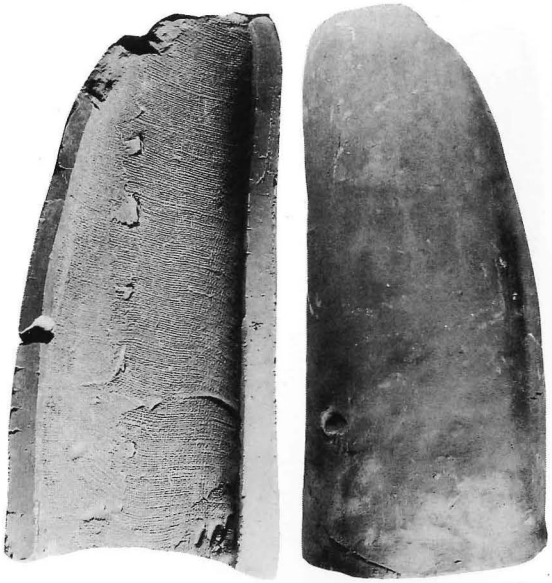
32, 37, 38 (1/2) 他 (1/5)

PL. 19 瓦

39

40

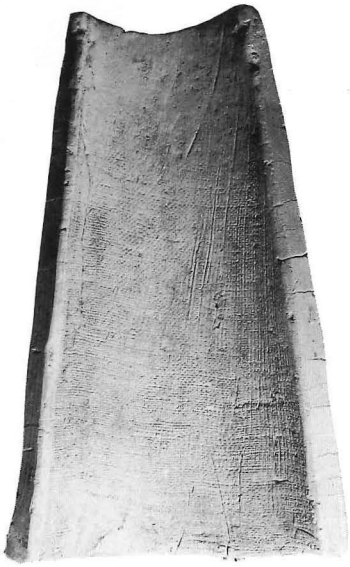
41



42

(1/5)

PL. 20 瓦



43

44

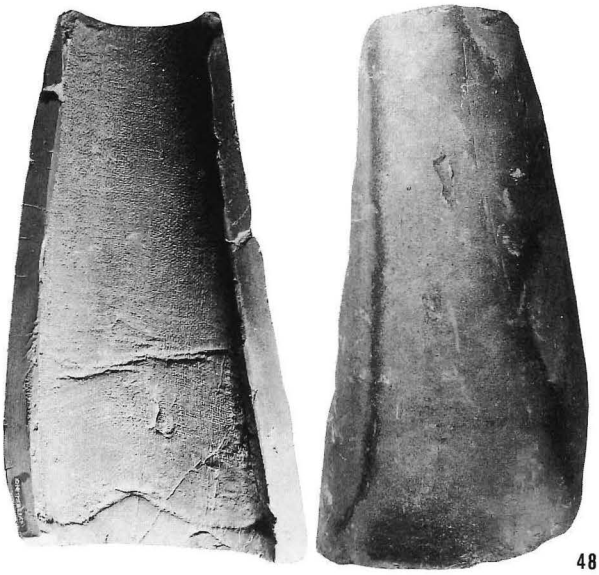
45

46

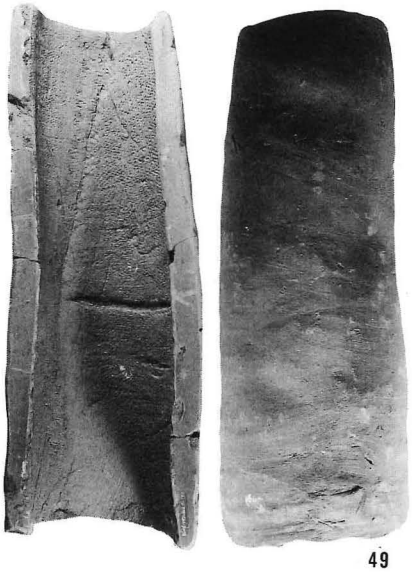
47

(1/5)

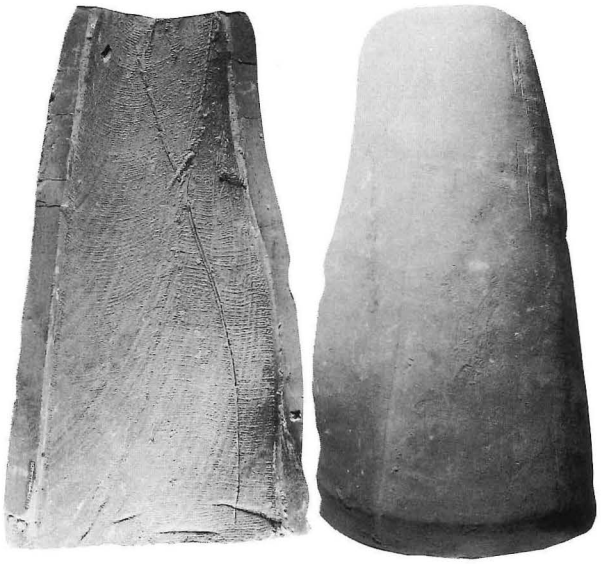
PL. 21



48

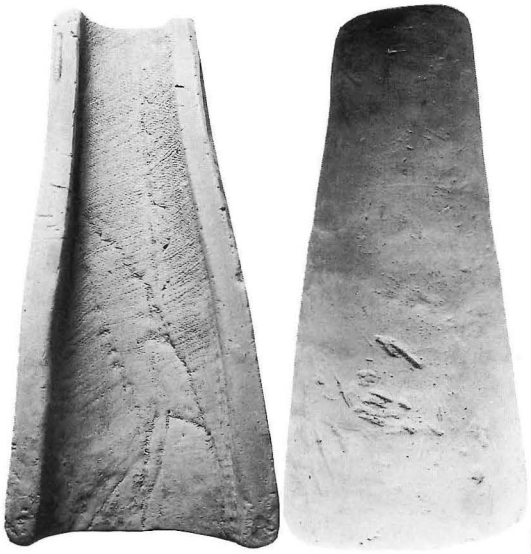


49



50

51



52

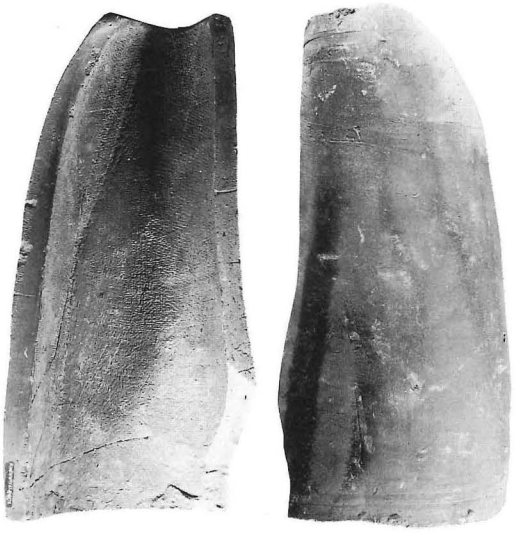
53

($\frac{1}{5}$)

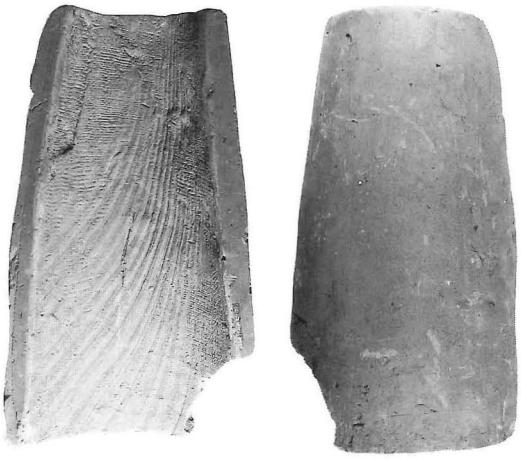
PL. 22

54

55



56



57

58

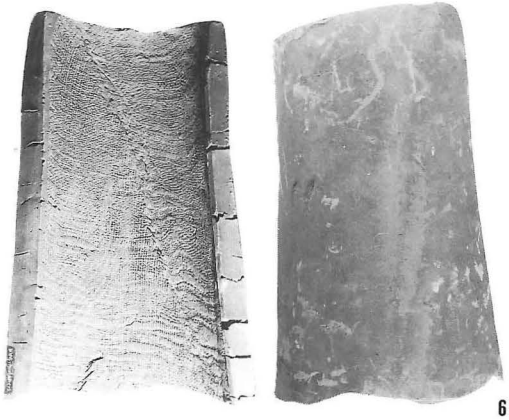
59

$(\frac{1}{5})$

PL. 23

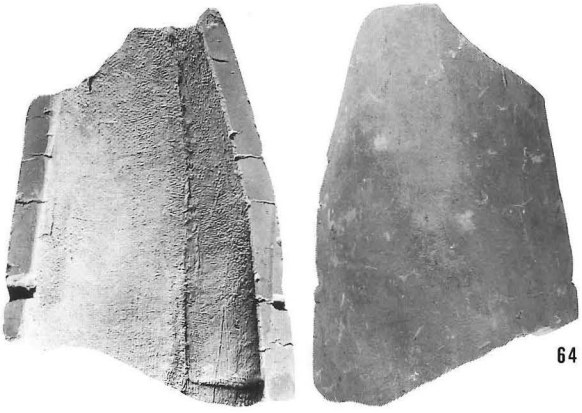
60

61

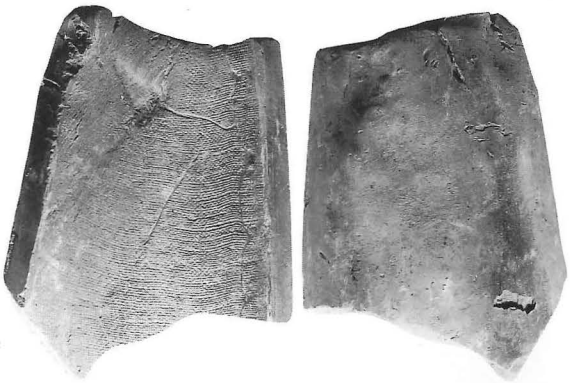


62

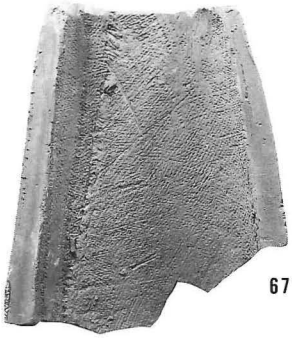
63



64



66

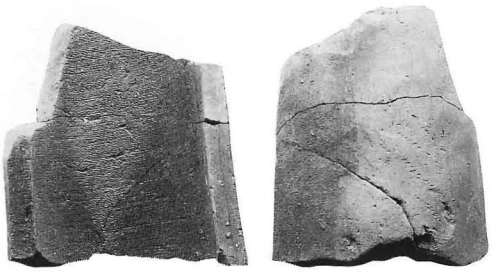


67

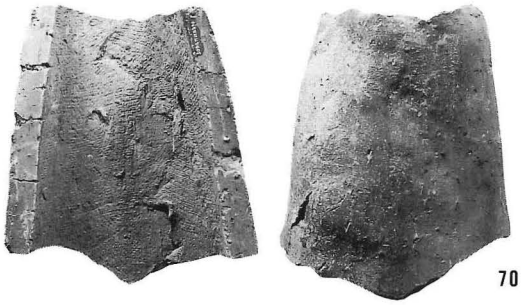
68

($\frac{1}{5}$)

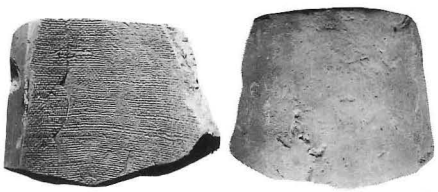
PL. 24



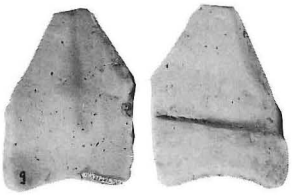
69



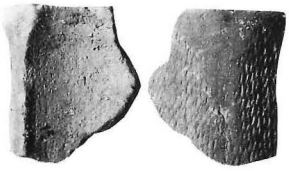
70



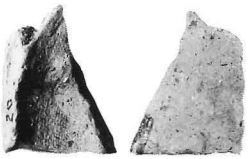
74



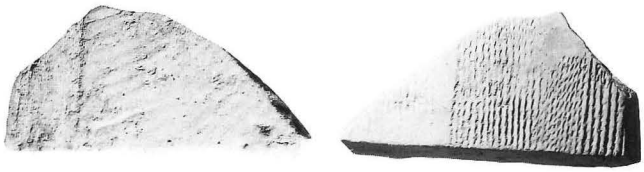
75



76

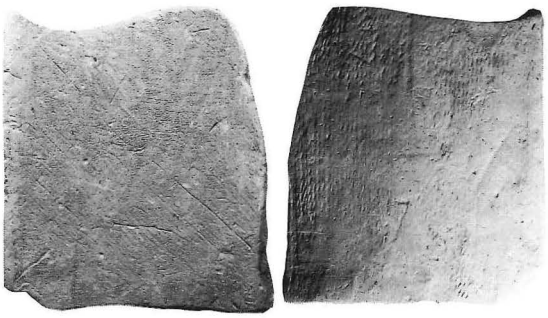


77



80

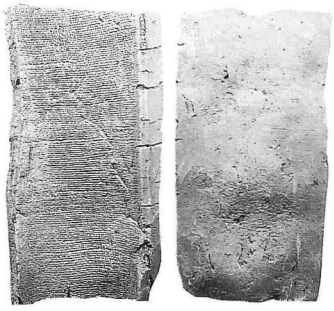
78



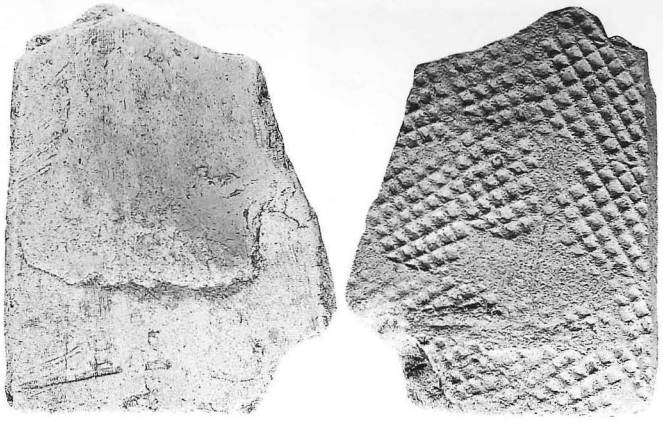
81

$(\frac{1}{5})$

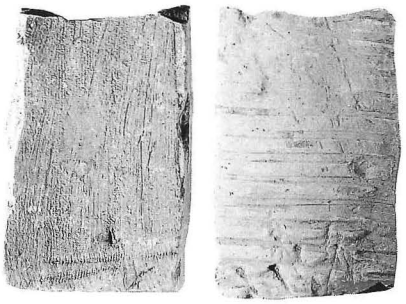
PL. 25 瓦



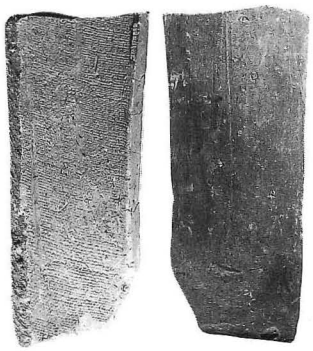
83



82

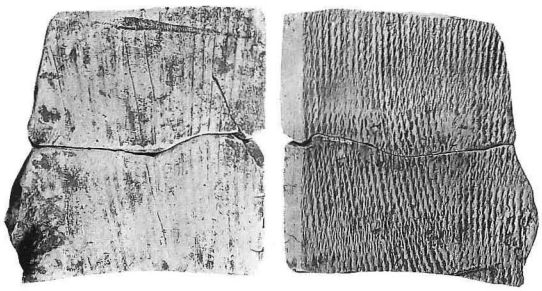


84

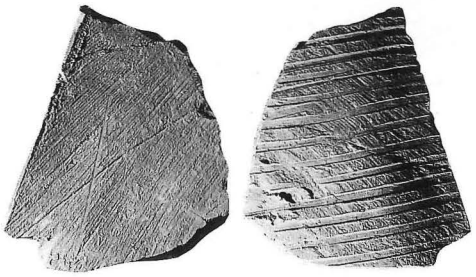


85

86



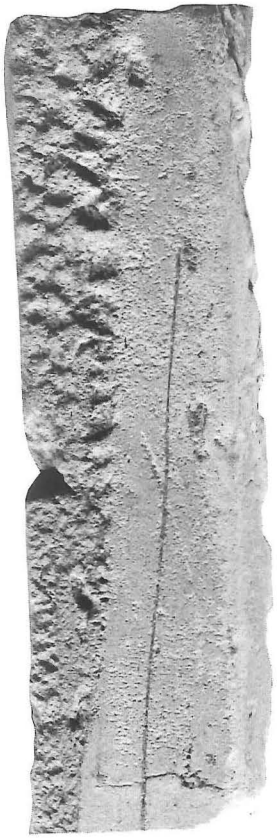
87



88

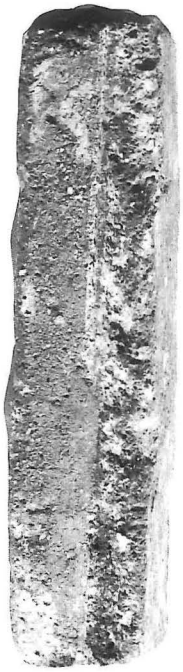
(1/5)

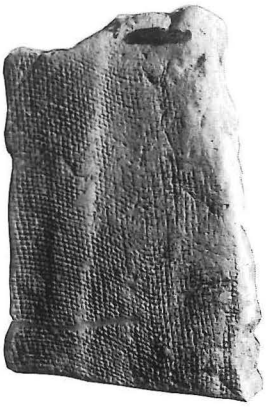
ＰＬ．26　側縁破面と模骨痕



凹面側に破面がある例

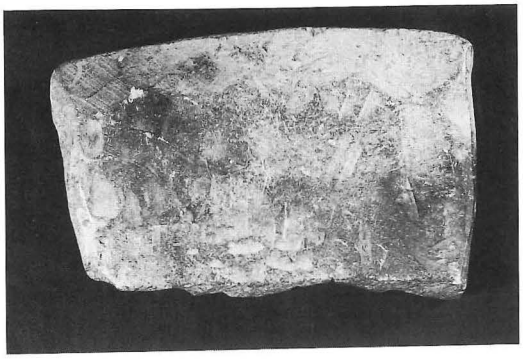
凸面側に破面がある例





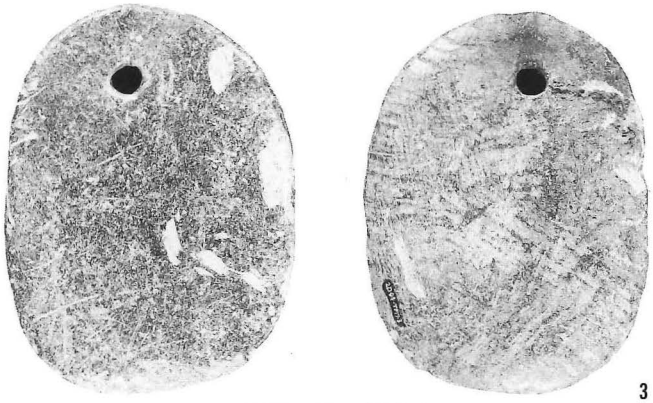
模骨痕

ＰＬ．27　その他の遺物



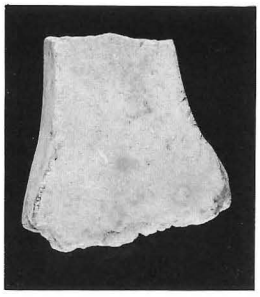
ＴＰ14区２層出土　1

ＴＰ14区３層出土　2

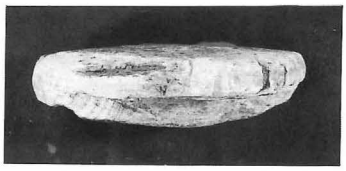


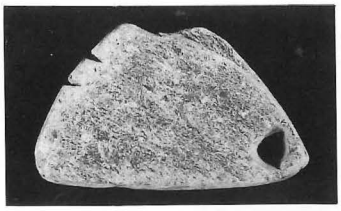
3

ＴＰ17区３層出土



ＴＰ21　西瓦溜出土　4





ＴＰ21　西瓦溜出土　5

4（$\frac{1}{4}$）他（$\frac{1}{2}$）

長崎県芦辺町文化財調査報告書第５集
壱岐嶋分寺Ⅰ

平成３年（1991）３月31日発行

発行者　芦辺町教育委員会
壱岐郡芦辺町芦辺浦562番地
〒811-53　☎09204－５－1111

印刷所　昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007－２
〒854　☎0957－22－6000